

長野県松本市

松本城下町跡

ROKKU

六九 第4次

——緊急発掘調査報告書——

2002.3

松本市教育委員会

長野県松本市

松本城下町跡

ROKKU

六九 第4次

——緊急発掘調査報告書——

2002.3

松本市教育委員会

序

六九町は現在の大手2丁目の南端に位置し、松本城下町跡の南西部にあたります。松本城下町跡の調査は数多く行われていますが、六九町については平成12年に初めての発掘調査が行われて以来、今回で4箇所目の調査となります。

このたび当地に松本六九リバーサイド地区市街地再開発事業が計画されたため、松本市が松本六九リバーサイド地区市街地再開発組合から委託を受け、埋蔵文化財を記録する目的で緊急発掘調査を実施することとなりました。

発掘調査は平成12年9月から平成13年4月にかけて行われました。長期間に渡る調査となりましたが、関係者の皆様の御尽力により無事終了することができました。発掘調査の結果、古墳時代および中世から近世にかけての、様々な時代の生活跡を発見することができました。これらは今後、地域の歴史を解明するうえで、大変役に立つ資料になることと思われまます。

しかしながら、開発事業に先立って行われる発掘調査は、記録保存という遺跡の破壊を前提とする側面があることも事実です。開発により私たちの生活が豊かになる一方、それにともない歴史遺産が失われてしまうのは残念なことです。発掘調査により当時の生活が明らかとなり、私たちの郷土松本が歩んできた歴史が一つずつでも解き明かされることは大変貴重なことだと考えます。

最後になりましたが、発掘調査に多大な御理解と御協力をいただいた松本六九リバーサイド地区市街地再開発組合の皆様、地元関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成14年3月

松本市教育委員会 教育長 竹 淵 公 章

例 言

- 1 本書は、長野県松本市大手2丁目231他において、平成12年9月18日から平成12年10月27日の間及び平成13年2月22日から平成13年4月16日の間行われた、松本城下町跡六九第4次調査の報告書である。
- 2 本調査は、市街地再開発事業に先立ち、松本六九リバーサイド地区市街地再開発組合と松本市が発掘調査委託契約を締結し、それに基づいて松本市教育委員会が行った緊急発掘調査である。
- 3 本書の執筆は、1章：事務局、2章1節：森義直、2章2節及び4章1節：竹内靖長、4章2節：廣田早和子、4章3節：赤羽裕幸、4章4節：中村慎吾、5章：井上直人、6章：パリオ・サーヴェイ株式会社、その他を赤羽裕幸と小山高志が行った。
- 4 本書作製にあたっての作業分担は以下のとおりである。
遺物洗浄：河野清司、福島勝、百瀬二三子
遺物保存処理・復元：内澤紀代子、洞沢文江、廣田早和子
遺構図整理：赤羽裕幸、石合英子、小山高志
遺物実測：菊池直哉、中谷高志、竹内直美、竹平悦子、松尾明恵、望月咲
トレース・版組：赤羽裕幸、窪田瑞恵、小山高志、林和子、
写真撮影：（遺構写真）赤羽裕幸、荒木龍、小山高志、櫻井了、中村慎吾（遺物写真）宮嶋洋一
（航空写真）株式会社ジャステック
- 5 本書の中で略称を用いる場合は次のように省略した。
第Ⅰ検出面→Ⅰ検、建物址1→建1、七坑1→土1、溝状遺構1→溝1
- 6 本報告書の作成にあたっては次の方々より多大なる御教唆、御協力をいただいた。記して感謝申し上げる。
井上直人氏、瀬川長広氏、森義直氏、山本英二氏
- 7 本調査で得られた出土遺物及び調査の記録類は松本市教育委員会が保管し、松本市立考古博物館（長野県松本市大字中山3738-1 TEL0263-86-4710）に収蔵されている。

目 次

序

例言・目次

1章 はじめに	1
2章 調査地の環境	
1節 地理的環境	4
2節 歴史的環境	6
3章 調査結果	
1節 調査概要	10
2節 出土遺構	14
4章 出土遺物	
1節 土器・陶磁器	35
2節 木器	54
3節 石器	62
4節 金属器	65
5章 付編1	69
6章 付編2	72
写真図版	

1章 はじめに

1節 調査に至る経緯

今回調査を行った六九は松本城下町跡の南西部分に該当し、平成11年度に第1次調査を始めとする3度の調査が行われており、今回が第4次の調査となる。

松本城下町跡は松本城を中心として現市街地部分に広がる近世町屋跡の遺跡であり、近年の市街地における区画整理や再開発などに伴って各所で発掘調査が行われ、多数の遺構、遺物が発見されてきた。

こうした中、六九商店街の一部、松本市大手2丁目231の10一帯に六九リバーサイド地区市街地再開発事業が計画された。六九は城下町や蔵・厩などが存在したと伝えられている場所であり、周知の遺跡である松本城下町跡の範囲内に位置している。また、平成11年度に行われた六九第2次・第3次調査においても今回の事業地に隣接した地点で遺構・遺物が確認されており、事業が実施された場合は埋蔵文化財が破壊されると予想されたため、松本市教育委員会は埋蔵文化財の保護について事業主である松本六九リバーサイド地区市街地再開発組合と協議を行った。その結果、事業地内における埋蔵文化財の破壊は避けられないとの結論に至り、保護措置として工事着手前に緊急発掘調査を実施して遺跡の記録保存を図ることとなった。

平成12年9月18日付で松本市と松本六九リバーサイド地区市街地再開発組合が委託契約を締結し、松本市教育委員会が発掘調査を行った。発掘調査はA地区とB地区の2地区に分けて行われ、同教育委員会では次節のような調査体制を組織して、同年9月18日から10月27日までA地区において、翌平成13年2月22日から4月16日までB地区において現地調査を実施し、調査終了後は室内における整理作業及び本報告書の作成を進めて、平成13年度本報告書を刊行するに至った。

2節 調査体制

調査団長 竹淵公章（松本市教育長）

調査副団長 人澤一男（松本市教育部長）

調査担当者 <A地区> 小山高志（文化課主事）、荒木龍（同嘱託）、櫻井了（同）、
<B地区> 赤羽裕幸（文化課主事）、櫻井了（同嘱託）、中村慎吾（同）

調査員 今村克、松尾明恵、宮嶋洋一、望月映、森義直

協力者 浅井信興、荒井留美子、飯田三男、五十嵐周子、石合英子、入山正男、内澤紀代子、
岡村行夫、菊池直哉、窪田瑞恵、河野清司、興喜義、小山貴広、芝田とり子、下条ちか子、
鷲見昇司、竹内直美、竹平悦子、田中一雄、中上昇一、中谷高志、中山白子、林和子、
廣田早和子、福島勝、二木一男、布野行雄、布野和嘉夫、布山洋、洞沢文江、待井敏夫、
道浦久美子、村山牧枝、百瀬二子、山崎照友、横山清、米山祐興、渡辺順子

事務局 松本市教育委員会文化課

木下雅文（課長、～平成13年3月）、有賀一誠（課長、平成13年4月～）、
熊谷康治（課長補佐）、松井敬治（同）、直井雅尚（主査）、武井義正（主任）、
久保田剛（同）、渡邊陽子（嘱託）、塚原祐一（同）



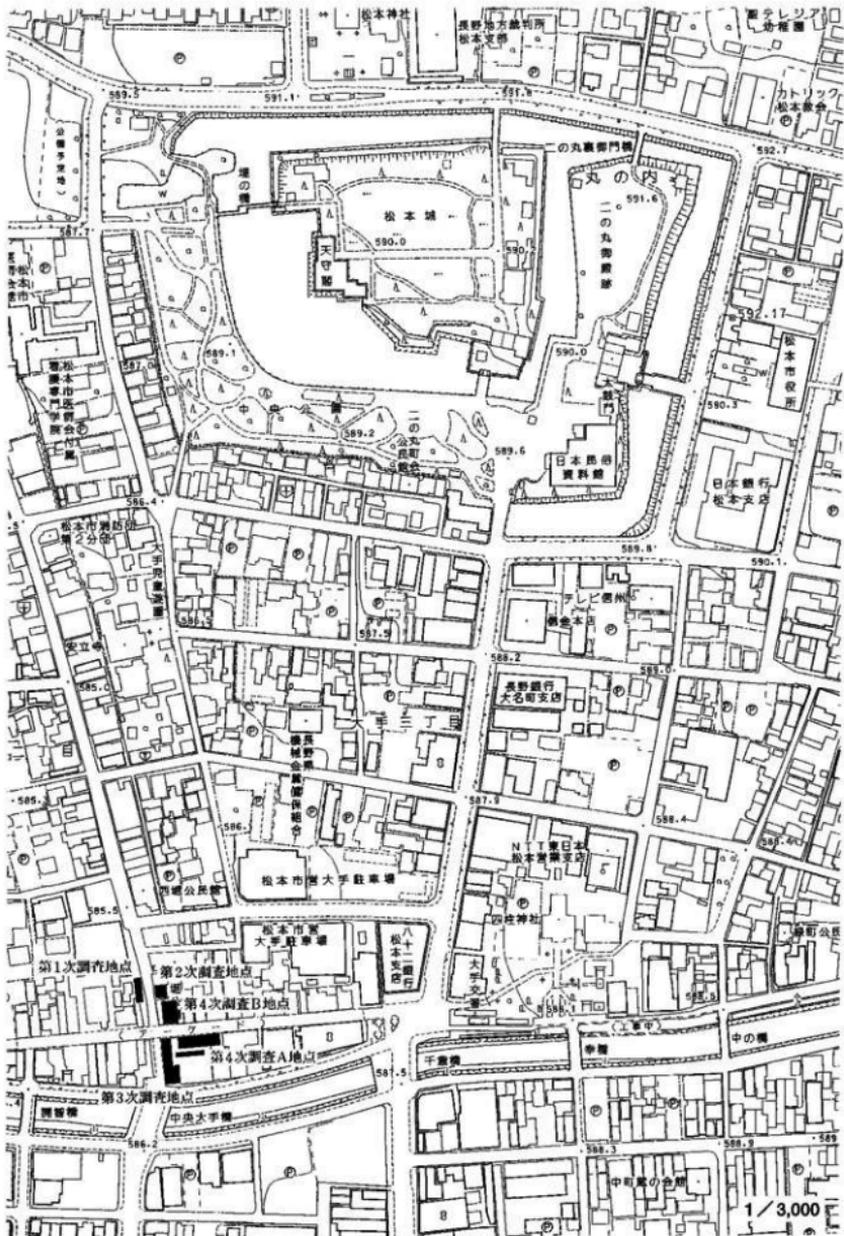
遺跡

- | | | | |
|-----------|-----------|-----------|-----------|
| 1 旧射の場西遺跡 | 7 犬部城址 | 13 城山殿遺跡 | 19 伊勢町遺跡 |
| 2 元原遺跡 | 8 宮瀨二つ塚遺跡 | 14 宮瀨遺跡 | 20 本町南遺跡 |
| 3 沢村北遺跡 | 9 織ヶ崎遺跡 | 15 女鳥羽川遺跡 | 21 犬神西遺跡 |
| 4 峰ノ平遺跡 | 10 沢村遺跡 | 16 丸の内遺跡 | 22 清城址 |
| 5 鳥屋山古墳 | 11 田町遺跡 | 17 大名町遺跡 | 23 松本城跡 |
| 6 放光寺遺跡 | 12 岡の宮遺跡 | 18 土居尻遺跡 | 24 松本城下町跡 |

古墳

- | |
|-------------|
| A 峰ノ平1号古墳 |
| B 開き松古墳 |
| C 宮瀨二つ塚1号古墳 |
| D 宮瀨二つ塚2号古墳 |
| E 宮瀨1号古墳 |
| F 勢多賀神社裏古墳 |
| G 饅頭塚古墳 |

第1図 周辺遺跡図



第2図 調査位置図

2章 調査地の環境

1節 地理的環境

本遺跡の位置と地帯

本遺跡は松本市旧市街地にある松本城の南約350m～450m付近で女鳥羽川の右岸沿いにあり、標高は約590mから584mへと南南西方向に緩く傾斜している。

旧市街地は広い松本盆地中央の東寄りにあり、一辺数km四方の不定形をした二次的小盆地を形成している。東部と北部は第三紀層の筑摩山地で、西部は市街地と接する第三紀層とそれに載る洪積層の低い山地により三方を囲まれ、南は開けている。この旧市街地に現在流入している主な河川は、東部山地から西流する薄川と、東北～北部山地から南流する女鳥羽川であり、この両河川により複合扇状地が形成されている。両河川共、河況係数が極めて大で、歴史的にはしばしば大洪水を引き起こし幾重にも、ふるい分けの悪い洪水性堆積物が載っている。旧市内付近はこのような扇状地堆積物の上にながら、県内の他の扇状地とは少し異なり、地下水面が高く湧水にも富んでいる。これは単に扇状地の末端での集水の結果だけでは説明は困難で、地史的要因も考える必要がある。

本遺跡周辺の地形・地質

松本盆地は南北に長い構造性の大盆地であり、西部と南部は飛騨山地で中・古生層とそれを貫く花崗岩やその他の火成岩からなっている。これ等の岩石は主に梓川水系により浸食され、大量の土砂が盆地の南半分を埋めている。更に南から北流する奈良井川・鎖川その他の河川による堆積物が加わり広大な複合扇状地を形成している。この扇状地堆積物は旧市内の下層にも厚く堆積していることがボーリングの結果判明している。一旦盆地が形成されてから後、洪積世後期後半頃から旧松本市周辺に局部的な構造性の盆地の誕生が始まり、その西側（城山）は逆に傾動しながら隆起を始め、それまで大口沢方面に流れていた古女鳥羽川は、次第に南西→東へ押しやられ洪積世の末頃第三紀層の上に古女鳥羽川の礫層を載せて山地化し、隆起の進行と共に右岸に三段の段丘面を形成しつつ市街地東部を流れるに至った。

女鳥羽川は筑摩山地の三才山峠（1500m）から流れ出す木沢を始め幾つもの沢と合して西に向って流れ、稲倉から120°向きをかえて市街地に向って南流し、流路の首振りを繰り返して貝殻を伏せたような地形、即ち扇状地を形成している。一方薄川は市街地の東部、三峰山や厩峠付近を源流とし、幾つもの沢を合流しつつ西流して入山辺地区の西端付近を扇頂とする扇状地を形成している。

以上2つの扇状地は湯川付近で接し、これより南西方向には流路の首振りと共に、両者がサンドイッチ状に、あるいは混成して堆積し複合扇状地を形成している。発掘地点を含む旧市街地の南西部は、この複合扇状地上にある。

発掘地点付近の地形と地質

上述したように旧市街地は、[松本盆地の時代]次に洪積世の後半から始まった[局部的構造盆地の時代]の二段階を経て現在に至っているので、地下40～50m以深には梓川水系を主とする中・古生層からの砂礫が堆積しており、上部の土層は局部的盆地の形成に伴う筑摩山系の女鳥羽川・薄川の土砂が堆積している。礫の岩質は女鳥羽川系は珩岩が多く砂岩、石英閃緑岩、第三紀層の礫岩から転出した粘板岩・チャートの小礫である。薄川系は緑色火山岩類、安山岩、石英閃緑岩、砂岩、珩岩、などであり、両河川共筑摩山系から供給されたものであるので混成された土層では見分けが困難である。

発掘地点での土層について

先年岡田地区から鎌ヶ崎にかけての発掘調査により、女鳥羽川が平安時代には岡田町の西を流れ、現在の

大口沢川とほぼ同じ流路をたどっていたことが判明した。繰り返す洪水による氾濫が起き、平安時代の末頃の大洪水のとき、洪水自身の押し出した大量の土砂による堆積で流路を東にとるに至った（各報告書を参照されたい）。

堆積特に河川に近く洪水の直撃を受けた所は、極めてふるい分けの悪い礫土層となり、直撃を受けない場所や安定期には、雨水や小流により洪水堆積物からシルト質が洗い出されて運ばれ厚く堆積している。

発掘地点を含む旧市内南西部は、土層上部には洪水による黄褐色砂礫層が二層程存在する。B地点では、-250cmまでの間に三層の洪水層があり、一番下の洪水層は-112cm～-100cmである。この洪水の後100cm堆積するに要する年数を推定するには、古墳時代の木製品が-240cmで出上っているの、年平均約1.6mm前後の速さで堆積（沈降）していることになる。したがって100cm堆積するに要する年数は約600年という値になり、これより上の2層の洪水層は江戸時代後半のものということになる。下部の約600年前の洪水層を境にして、それより下は洪水の直撃を受けておらず細砂やヨシの茎や根を含む泥炭質粘土層などの厚い腐植に富む土層となっている。即ち上部-110cm～0cmは女鳥羽川の洪水による黄褐色礫土層や、人為的に城山方面から運ばれたと推定される黄褐色礫土と湿地性の黒色土層より成り、下部の沼地性の非洪水性堆積物とは異なっている。

沼地化の原因について

以前考えられた説は扇状地の末端でみられる湧水が主な原因と考えられてきたが、今回の発掘で判明したことはB地点では上記の如く年平均約1.6mmの速さで沈降していることになり、これは、松本盆地中央部の新村～穂高町付近の平均1mmに比して大きな値である。このことは洪積世末に起きた局部的な造盆地変動が現在も進行中であるとみなければならない。そのようにとらえないと旧市内では大火の後必ず土盛りをしているのを説明するのが困難で、地盤沈下の結果、湿地化を逃れるため火災を期に土盛りをせざるを得なかったと解すべきであろう。

人為的女鳥羽川の変化について

上述のように住宅地としては適さない土地柄であるが、中世末頃微高地に築城し、その防衛上からは、地下水位が高く少し掘れば湧水が到る所にみられるので堀に水を溜易く、更に女鳥羽川の流路を城の東と南を囲むように90°曲げる改修を行なうなど人為的に流路を変えている。この川の改修により川巾は中流域よりも下流域の方が狭くなり、その上流路が90°曲げられているため、近世、洪水時には改修域で氾濫が起き易くなったと推定される。

現在女鳥羽川は白坂付近で田川に合流しているが、地形的には改修前の一時期、清水付近で曲がらずに直進し埋蔵付近で薄川と合流していた可能性が高い。

2節 歴史的環境

1 六九周辺における原始・古代・中世の遺跡

本遺跡が位置する松本市中心部は、近年の市街地再開発事業などに伴い、継続して発掘調査が実施されてきた。これらの調査では、近世の松本城下とその下層から新たな遺跡が発見され、非常に大きな成果を得ている。以下、近年の発掘データから、松本市中心部周辺の遺跡分布や立地について時代を追って記述する。

旧石器時代：城山丘陵の蟻ヶ崎（放光寺）より、尖頭器が1点表面採集されているが、低湿地帯に立地する中心市街地からの出土はない。

縄紋時代：松本城二の丸からは中期の打製石斧が出土している。また、二の丸から北400m地点の旧田町小学校地点からは、中期の土器片が出土している。丸の内遺跡では、日本銀行松本支店の建設工事（S31～32年）の際に、後期後半の土器とともに、土偶片・被熱しているシカの大腿骨片・クルミ・トチの実が伴出している。三の丸跡土居尻第2次調査（H13年）では、下層より加曾利B式（後期）の土器が出土し、大名町遺跡が西側に広がっていることが確認された。この地点より700m東には、女鳥羽川遺跡がある。昭和45年に女鳥羽川河川改修工事で川底を掘削したところ、後期～晩期の遺物が出土した。晩期前半の土器が主体を占め、大形土偶、土製耳飾、土製円盤、石鏃などがみられた。その他、城山丘陵一帯には、山ノ神遺跡（前期末）、城山腰遺跡、峰ノ平遺跡（中期～後期初頭）などが分布している。

弥生時代：城山丘陵から宮淵一帯に遺跡がみられる。城山腰遺跡（中期～後期）、峰ノ平（中期）、沢村遺跡（後期）、宮淵遺跡（調査時：宮淵本村遺跡）などが分布している。城山腰遺跡は、昭和25年・38年、平成13年度に調査されている。昭和25・38年の調査では、底部に布目瓦痕のある土器や人型蛤刃石斧、細型管玉、磨製石包丁など多量の出土遺物を得ている。平成13年度に行われた第2次調査では、竪穴住居跡1軒と鉄製の鉋が出土した。宮淵遺跡は、昭和60～62年にかけて調査され、中期～後期の住居跡84軒や土器棺墓などが発見された。この調査で発見された第5号住居跡は、土器製作上層の性格を持つものとされており、全国的にみても貴重な例といえる。

古墳時代：今回報告する六九4次調査地点では、城下町下層から古墳時代前期の土器片とともに、竪穴住居の垂木とみられる木製品が出土している。また、近隣の三の丸跡土居尻第1次調査（H3年度）でも、古墳時代の高杯が出土している。今回の調査結果を踏まえ、城下町下層の別遺跡として、土居尻遺跡を新設した。平成11年度に実施した城下町跡宮村町1次調査では、城下町下層から古墳時代前期の住居跡1軒と土坑1基が検出された。これまで、この周辺に古墳時代の遺跡は確認されておらず、新発見の天神西遺跡とした。岡の宮遺跡（H12年度調査）では、古墳時代前期の住居跡4軒が調査されている。女鳥羽川遺跡では中期、宮淵遺跡では後期の住居跡が調査されている。古墳は宮淵から城山丘陵に集中してみられる。城山腰では、5世紀代と推定される古墳が7基ある。開き松古墳は、明治初年の発掘で、肩庇付冑ほか多数の出土遺物が確認された。松本深志高校の南にある饅頭塚古墳は、明治6年の発掘で剣、直刀、勾玉ほか多数の遺物が出土した。遺物から5世紀後半の築造と考えられる。また、宮淵遺跡では、5世紀後半の古墳が2基調査されている。これらの結果から、城山丘陵周辺の古墳築造年代は、5世紀代に限られていることがわかる。

奈良～平安時代：奈良時代の集落は、蟻ヶ崎遺跡（H9年度調査・住居跡4軒）、旧射的場西遺跡、岡の宮遺跡（H12年度調査・住居跡3軒）が調査されている。平安時代では、旧射的場西遺跡、蟻ヶ崎遺跡で住居跡が発見されている。

中世：城下町跡伊勢町第23次調査では、城下町下層より12～13世紀代の遺構・遺物が発見された。これまで、このあたりには下層に遺跡は存在しないと考えられていたが、中世に集落が存在することが新たに判明した。この調査結果から、下層の中世集落は伊勢町遺跡として遺跡登録した。この中世集落は、伊勢町東半部から本町にかけて広がる安定した砂質層上にあり、低湿地帯のなかに縞状に残った微高地上に形成され

たとえられる。これらのことから、本町から伊勢町東半部にかけての箇所は、中世の段階から微高地状地形を呈しており、そこに鎌倉期の集落が形成され、やがて城下町時代に野麦街道を通し、伊勢町・本町が形成されたと推定できる。

2 近世松本城の略史

松本城は、その前身である深志城を基盤として築城されたといわれている。深志城は、永正元年（1504）に烏立氏により築城されたとも、室町時代より深志介を名のっていた坂西氏の居館を基盤にしていた、とも言われているが、実際のところ詳細は全くわかっていない。平成13年に実施された三の丸跡土居層第2次調査では、16世紀前半（一部15世紀前半）までさかのぼる堀と土塁が発見され、深志城時代の解明に大きな資料を得た。深志城は、もともと小笠原氏の本城である林城の支城の一つにすぎなかったが、天文20年（1550）に武田晴信が松本平に侵攻して以後、30年間にわたり武田氏の信濃侵攻の拠点となった。

天正10年（1582）、小笠原長時の二男貞慶が武田氏滅亡を機に、深志城を回復し、安曇・筑摩両郡の支配権を獲得した。貞慶は入城して以後、深志城を松本城と改め、城郭の町割を行なった。『信府統記』によれば、城郭部分の道筋を整え、町割をして、市辻、泥町あたり（地蔵清水から大柳町にかけての場所と推定される）にあった町屋を、女鳥羽川より南に移し、侍屋敷と町屋を区別して居住させた。そして、三の丸には堀を掘り、土塁を築いて、四方に5箇所の大城戸を構え、南門を大手と定め、小路を割り、侍屋敷を建てたのである。こうして、武家地としての三の丸と町人地である本町、中町、東町とそれに伴う枝町の道筋と町割りができ、城下町の基本が造られたのである。

小笠原氏が豊臣秀吉により古河へ転封となり、変わって石川数正・康長父子が入封すると、石川氏は小笠原貞慶の築いた城郭に、天守閣を築いて城下町の拡充を行なった。

その後、石川氏が改易されると、慶長18年（1613）に小笠原秀政が飯田から再び入封した。秀政が入封した頃は、城下町の町割が出来ていてもまだ空き地や空き家が多かったが、飯田から従った人々や、城下町の再整備により集住が進んだようである（『松本記』）。

続いて元和3年（1617）戸田康長が入封する。戸田氏の時代には、安原町西に足軽屋敷の建設があった。

戸田氏のあと、寛永10年（1633）に徳川家康の孫にあたる松平直政が入封すると、天守閣修復工事が行なわれた。この修復により辰口附櫓と月見櫓が新たに付設された。さらに二の丸には、幕府の非常用米穀を保管するために八千俵蔵を建て、六九には厩を設置した。

松平直政が松江に転封した後、堀田正盛が入封する。しかし、在封期間が短かったため、土上に蔵を建て、城北側の土塀・石垣破損の修復程度で、本格的な城下・城郭の修築はなかった。

堀田正盛の佐倉転封のあとをうけて、寛永19年（1642）に水野忠清が入封する。

水野氏改易の後、戸田氏が入封する。享保12年（1727）正月元旦、本丸御殿が焼失した。御殿の膳所合部屋と台所の間より出火して、昼七時過ぎまでに全焼した。総坪数905坪、総畳数1560畳余の広大な殿舎を焼き尽くした。当時の松本藩戸出家は、財政が窮乏していたため、本丸御殿の復興はならず、政庁は二の丸御殿に移された。しかし、二の丸御殿は狭かったため、二の丸御殿内にあった郡所や町所は六九へ移された。また、大名主・大庄屋の役人会所も土上へ移された。この後、城郭と城下町には基本的な変化がないまま、明治維新を迎えることとなる。

3 六九の沿革

六九は三の丸に隣接しており、江戸後期には松本藩の地方行政機関が集中していた町であった。『嘉永7年家中名前付図』（1854年・写真次頁）を見ると、幕末段階では六九の北半部に、東から郡所（町所を併合）・表勘定所・預所の順で軒が並び、南側には蔵と射場・蔵役所・木場役所・炭所が設置されていた。

今回調査を実施したA区は、幕末時に蔵があった場所と推定される。ここには、安永5年（1776）の火災で焼失する直前には、東西157間余（約283m）の規模をもつ54正立ての外厩（六九厩）があった。この厩

は、藩主・松平直政の時代（1633～38年）に設置されたもので、安永5年の火災後一旦は再建されたものの、その後道路に沿って、御蔵と呼ばれる細長い蔵が建てられた。この蔵は、二の丸内の八千俵蔵に対し、万俵蔵とも言われ、嘉永七年の図から土蔵であったことがわかる。また、この蔵の西には、蔵役所・燃料用の木炭を収納する炭所（炭蔵）と材木を扱う木場役所が設置されていた。

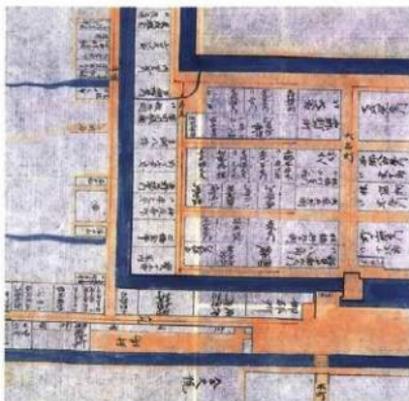
調査B区は、A区の道路を挟んで北側に位置しており、預所からその西側にある武家屋敷地にかけての場所と想定される。預所とは、寛保3年（1743）に松本藩が、幕府より委任された信濃国内の5万3千石余の天領である預領の管理を行なう役所である。領地の内訳は、佐久郡内に1万5千石、筑摩郡内に3万2千石、小県郡内に4千石、伊那郡内に2千石ほどであった。藩は、遠隔地の佐久・小県の諸村支配にあたっては、佐久郡平賀に陣屋（平賀陣屋）を置いて藩士を派遣したが、それ以外の預領は、この六九の預所に伊那部屋（塩尻組と伊那郡）・川手部屋（出川組・和田組）・会田部屋（麻績組・坂北組等）の三分署を設けて管轄した。

預所の東隣には、表勘定所があった。表勘定所は、天保9年（1838）に城内から勘定所の機能の一部を六九に移し、表勘定所として設置したものである。勘定所は、領内から年貢などの諸税を徴収し、藩財政を運営する機関である。天保9年の施策により、藩主の出納を扱う勝手方勘定は、二の丸御殿内に残し、それ以外が表勘定所として城外に独立することとなった。この結果、それまで郡所が管轄していた商業施策部門の一部を担当することとなった。この年、領内の商工業者に布達が出され、紺屋願ひ、綿打願ひ、商札願ひなどの鑑札に関する諸願ひの届出と、それに伴う運上・夏加の上納は、表勘定所に出されることとなった。安政3年（1856）表勘定所は藩主の勝手方賄所と事務を合併し、勘定所と改称、表勘定奉行も勘定奉行に改まった。その後、慶応3年（1868）に勘定所は再び分離し、山方勘定を扱う表勘定所と勝手方勘定を担当する御勘定所となった。

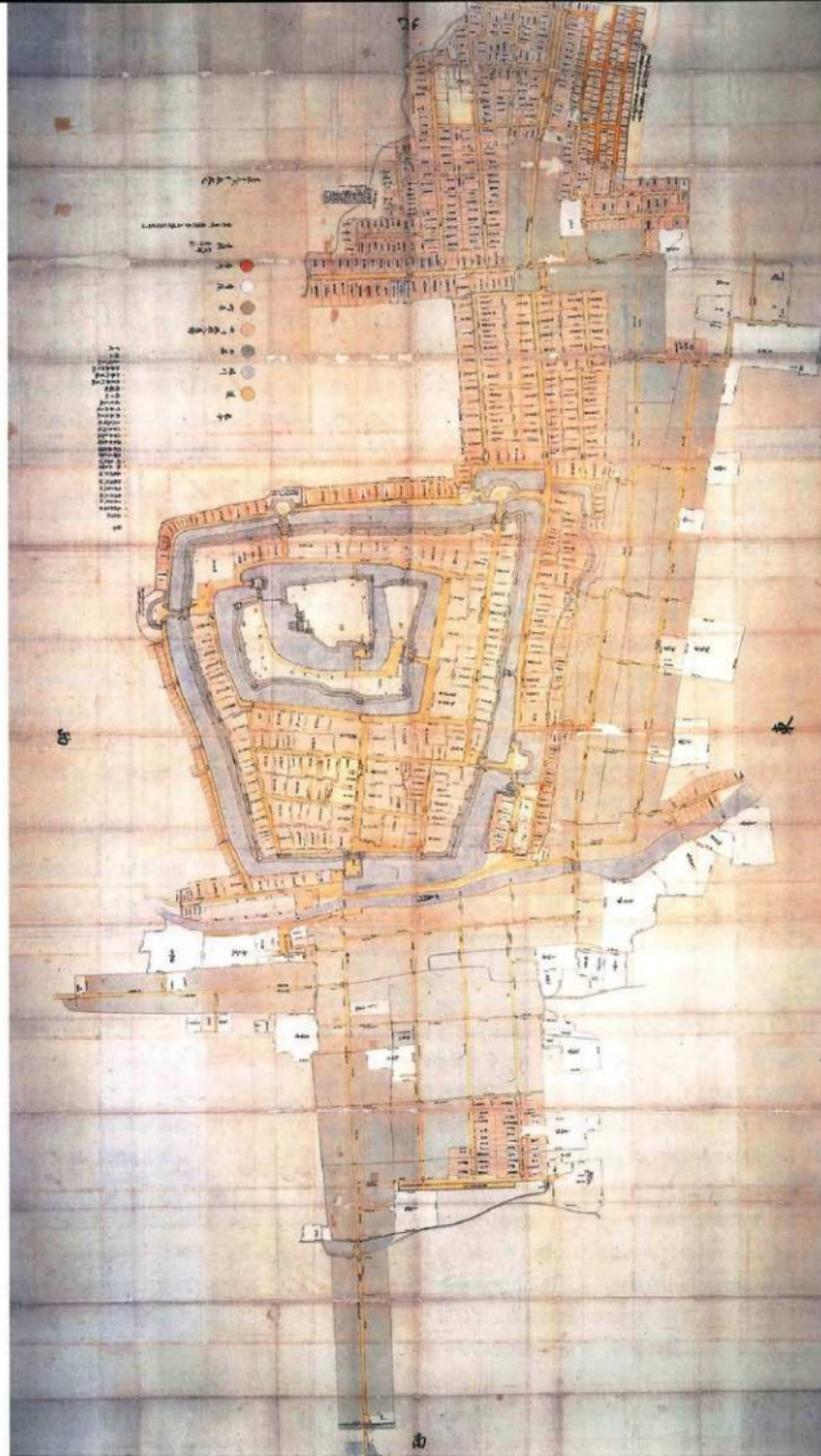
勘定所の隣には、郡所があった。松本藩領の総人口の約85%を占める村方（在方）支配を担当した。この役所が対象とした農民は、約9～10万人に及んでいる。ちなみに7万石の水野氏時代の村方人口は、享保7年（1722）で98336人（『信州松本領町在々宗門改入高宗旨分ヶ目録』）であった。

安永5年の火災で町所が焼失して以降は、町方行政を担当する町所も郡所に吸収合併された。また、天保9年（1838）以降は、天保の藩財政改革により、郡奉行のほか表勘定奉行までも兼任する。

各役所の敷地面積は、残された絵図等からほぼ近似した規模であったが、郡所は間口24間×奥行11間半の276坪、預所は256坪であった。預所には建坪170坪の建物があった。



「嘉永七年三月改 家中名前附図」(部分)
瀬川長広氏 所蔵



「享保十三年秋改 松本城下図」

3章 調査結果

1節 調査概要

1 A地区

今回の調査はA地区とB地区とに分けて行った。A地区は大手2丁目2番地に該当し、北側は六九通り(旧糸魚川街道)、南側は女鳥羽川沿いの道路に挟まれた部分に位置する。

A地区の発掘調査は平成12年9月18日から同年10月27日にかけて行った。六九商店街のアーケード解体や、旧建物の廃材運び出し等の作業と並行しての日程となったため、調査範囲も事業地全体ではなく、大きな建物があつた部分を避け、比較的遺構の残存が良好であると予想される事業地の西側部分を選択し調査区を設定した。解体作業や排上置場の都合上、先に調査区の北側部分を調査し、北側部分の埋め戻し後南側部分を調査した。

発掘調査の手順は、まず重機を使用して深掘りを行い、第Ⅰ検出面の深さを確認した後重機によって第Ⅰ検出面までの上土を除去し、その後人力による遺構検出を行った。検出の終了した遺構から遺構番号を命名し、人力による掘り下げを開始した。なお、遺構番号は各面ごとに1番から順に命名した。掘り下げの終了した遺構は写真と測量図とで記録を行った。遺構の測量は任意の定点から磁北方向を基準とし、3mの方眼を設定した。全ての遺構の掘り下げと記録が終了した後、重機を使用して第Ⅱ検出面までの掘り下げを行った。その後第Ⅵ検出面まで同様の手順を繰り返す。北側部分を埋め戻した後南側部分も同様に調査を行い、最後に重機で南側部分の埋め戻しを行い、発掘調査の現場における行程を終了した。

遺構の掘り下げと並行して人力で小トレンチを掘って次の層理面を探りながら調査を行い、これを手掛かりとして次の検出面までの掘り下げを行ったが、平面観察したところ遺構の認められない面はそのまま掘り下げ、遺構の確認できる面のみを検出面として調査を行った。加えて、東西に長い調査区であったため、同一の検出面においても上層の異なる可能性があり、検出面の設定に疑問が残る。

北側部分については第Ⅰ～第Ⅵまでの検出面を設定して調査を行い、第Ⅵ検出面の下層に植物遺存体を多量に含む腐植泥質土層が認められたため調査終了とした。南側部分については、第Ⅱ検出面と第Ⅲ検出面のみの調査となった。出土遺物から判断して、16世紀後半から19世紀初頭までの調査であったと考えられるが、第Ⅱ検出面及び第Ⅲ検出面の大規模な溝状遺構や建物址は、六九の歴史を考えるうえで貴重な資料と思われる。

2 B地区

B地区は六九通り(旧糸魚川街道)を挟みA地区北側向かいに位置し、江戸時代は南大手門を西へ総堀沿いに数軒連なった上級武士の屋敷跡にあたると思われる。調査範囲は最大145.9m²で、各検出面の調査面積の合計は下記の通り。中央部にゴミ穴として使われたと思われる攪乱が広がる。

調査にあたり、重機で遺構検出面までの表土除去を行った後、人力により検出・遺構掘り下げを行い、調査終了後重機による埋め戻しを行った。調査地西南隅に深掘りトレンチを設定し、土層を観察した上で層ごとに掘り下げた。第Ⅰ～Ⅳ検出面まで掘り進めたところ、北部で遺構・遺物が集中して出土したため、北側を拡張して第Ⅲ～Ⅵ検出面を調査し、並行して南部も第Ⅲ～Ⅺ検出面まで調査した。第Ⅱ、Ⅵ検出面は遺構が見られなかったため平面観察の後直ちに掘り下げた(総面積には含めず)。よって、調査のある期間においては、調査範囲内の場所により検出面が異なる状況があった。また、検出面は厳密に層理面に合わせて掘り下げたというより、便宜的に標高を揃えて広げた場合が多いため、同じ検出面でも場所ごとに土層が異なる可能性がある。特に第Ⅲ、Ⅳ検出面にその疑いが濃い。

当初は近世の遺跡として、調査は腐植泥質土層（第16層）の上部までにとどめる予定であったが、第16層にあたる第Ⅴ検出面で古墳時代の土器を伴う溝状遺構を検出し、下部の第Ⅺ検出面では建築材と思われる木器数点と土器2点を出土した。

近世期の遺跡としては上級武士の住居、特に茶室をうかがわせる遺物がいくつか出土した第Ⅳ検出面建物址、近世初頭の工法を示す第Ⅵ検出面建物址などが注目される。また、第Ⅴ・Ⅺ検出面ではこの地域としては初めての古墳期遺構と遺物が発見された。従来城下町跡の下層部は低湿地で遺跡はないと見られていただけに貴重な発見と言えよう。検出面の決定に疑義があり、遺物の回収基準・回収方式にも若干の問題がある点が惜しまれる。

遺構等の測量は、A地区のグリッドと同じ方向、規格で行った。調査の実施期間、面積、遺構遺物の詳細については以下に列記する。

調査期間 A地区：平成12年9月18日～平成12年10月27日

B地区：平成13年2月22日～平成13年4月16日

調査面積 A地区：1243.8m²（全面合計）

B地区：671.4m²（全面合計）

検出遺構 A地区：建物址 4棟
木樋 1条
溝状遺構 11条
土坑 250基

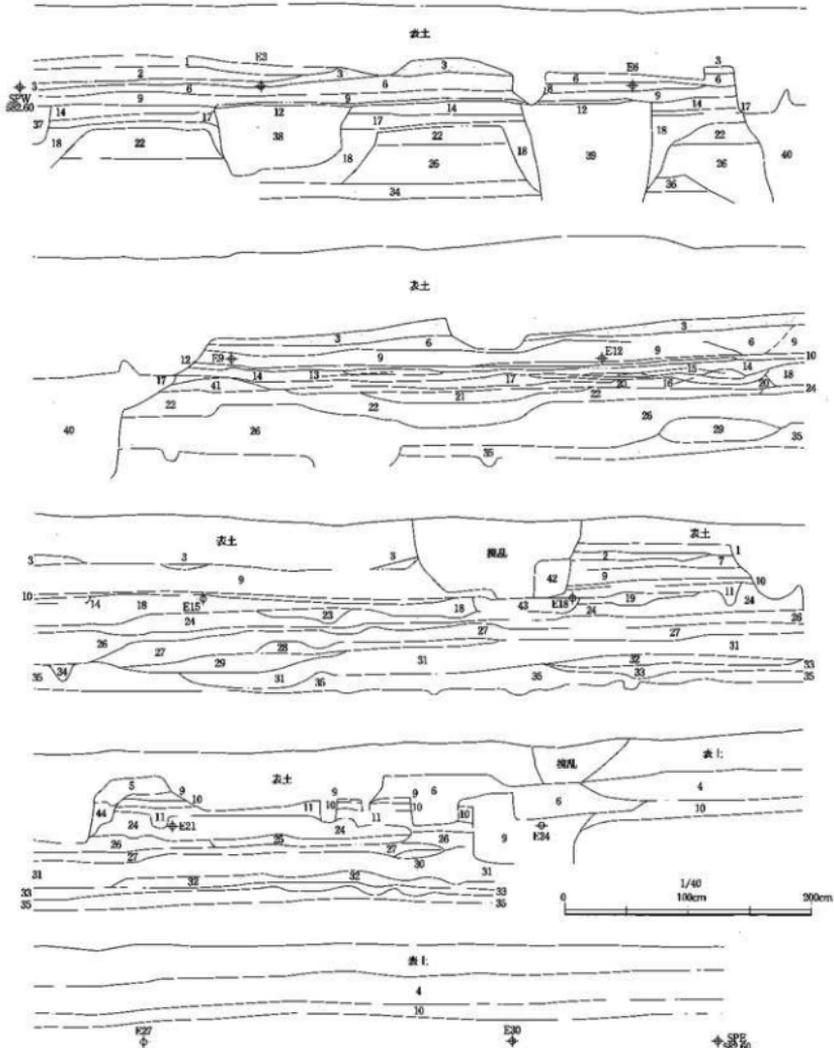
B地区：建物址 6棟
集石遺構 1基
溝状遺構 2条
土坑 108基
焼土範囲 4箇所

出土遺物 A地区：近世

陶磁器
鉄製品（刀物、煙管他）
銅製品（銭貨）
木製品（木札、下駄他）
石器（不明品）
獣骨

B地区：古墳時代前期

土器（上埴器）
木器（建築材）
石器（礫石器）
近世
陶磁器
鉄製品（釘、煙管他）
銅製品（銭貨）
木製品（建築材、下駄他）
石器（印鑑、砥石他）



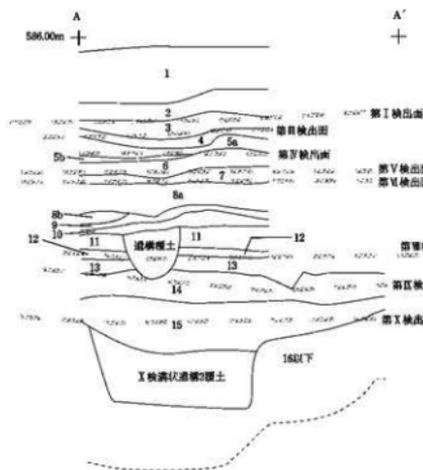
- 1: 青灰色粘質土
- 2: 黄灰色砂質土
- 3: 黄土層
- 4: 黄褐色砂質土
- 5: 砂礫層
- 6: 青灰色粘質土
- 7: 暗褐色粘質土
- 8: 不明
- 9: 黄褐色粘質土
- 10: 黄褐色粘質土
- 11: 暗褐色粘質土
- 12: 黄土層
- 13: 砂礫層
- 14: 青灰色粘質土
- 15: 腐植物層
- 16: 砂礫層
- 17: 暗灰色粘質土
- 18: 暗灰色粘質土
- 19: 砂礫層
- 20: 青灰色粘質土
- 21: 暗灰色粘質土
- 22: 青灰色粘質土
- 23: 砂礫層
- 24: 暗褐色粘質土
- 25: 青灰色粘質土
- 26: 暗褐色粘質土
- 27: 砂礫層
- 28: 青灰色粘質土
- 29: 暗褐色粘質土
- 30: 暗褐色粘質土
- 31: 暗褐色粘質土
- 32: 砂礫層
- 33: 青灰色粘質土
- 34: 不明
- 35: 暗褐色粘質土
- 36: 不明
- 37: 不明
- 38: 青灰色粘質土
- 39: 暗褐色粘質土
- 40: 青灰色粘質土
- 41: 暗褐色粘質土
- 42: 暗褐色粘質土
- 43: 暗褐色粘質土
- 44: 暗褐色粘質土

- 16: 砂礫層
- 17: 暗灰色粘質土
- 18: 暗灰色粘質土
- 19: 砂礫層
- 20: 青灰色粘質土
- 21: 暗灰色粘質土
- 22: 青灰色粘質土
- 23: 砂礫層
- 24: 暗褐色粘質土
- 25: 青灰色粘質土
- 26: 暗褐色粘質土
- 27: 砂礫層
- 28: 青灰色粘質土
- 29: 暗褐色粘質土
- 30: 暗褐色粘質土
- 31: 暗褐色粘質土
- 32: 砂礫層
- 33: 青灰色粘質土
- 34: 不明
- 35: 暗褐色粘質土
- 36: 不明
- 37: 不明
- 38: 青灰色粘質土
- 39: 暗褐色粘質土
- 40: 青灰色粘質土
- 41: 暗褐色粘質土
- 42: 暗褐色粘質土
- 43: 暗褐色粘質土
- 44: 暗褐色粘質土

- 31: 暗褐色粘質土
- 32: 砂礫層
- 33: 青灰色粘質土
- 34: 不明
- 35: 暗褐色粘質土
- 36: 不明
- 37: 不明
- 38: 青灰色粘質土
- 39: 暗褐色粘質土
- 40: 青灰色粘質土
- 41: 暗褐色粘質土
- 42: 暗褐色粘質土
- 43: 暗褐色粘質土
- 44: 暗褐色粘質土

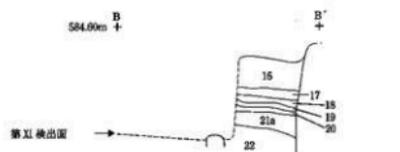
第3図 A地区北壁土層断面図

調査区西壁断面図



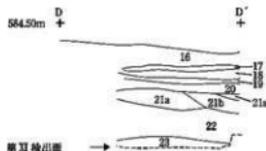
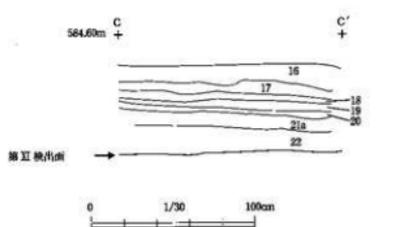
- | | | |
|----------------|--------|---|
| 1. 上土 | 埋砂 | (径5-50mm 60%混、酸化強い) |
| 2.5YR4/4(土)赤褐色 | 粗砂含細砂 | (径5-50mm 混3%混、炭化物1%混) |
| 3.7.5Y4/2灰オリーブ | シルト含細砂 | (径5-30mm 混10%混、炭化物1%混、機上1%混、5Y4/2灰オリーブ粗砂5%混、2層土9%混) |
| 4.5Y3/2灰オリーブ | | |
| 5a | | |
| 5b | | |
| 6 | | |
| 7 | | |
| 8a | | |
| 8b | | |
| 9 | | |
| 10 | | |
| 11 | | |
| 12 | | |
| 13 | | |
| 14 | | |
| 15 | | |
| 16以下 | | |

第X-XI 検出面断面図



- | | | |
|----------------|----|-----------------------------|
| 16.7.5YR3/1黒褐色 | 粘土 | (結核遺体60%混、黒色土塊10%混) |
| 17.5.5YR5/1褐色 | 粘土 | (結核遺体60%混、7.5YR4/1褐色土塊10%混) |
| 18.7.5YR2/1黒 | 粘土 | (結核遺体60%混) |
| 19.7.5YR5/1褐色 | 粘土 | (結核遺体40%混) |
| 20.7.5YR2/1黒 | 粘土 | (結核遺体60%混) |
| 21a.7.5YR4/1褐色 | 粘土 | (結核遺体50%混、黒色土塊10%混) |
| 21b.2.5Y3/1黒褐色 | 粘土 | (結核遺体50%混) |
| 22.7.5YR3/1黒褐色 | 粘土 | (結核遺体10%混、遺物包含層) |
| 23.7.5YR1.7/1黒 | 粘土 | (結核遺体60%混、遺物包含層) |

※土色は「新報 標準土色録」(日本色研事業株式会社1998)による



第4図 B地区 土層断面図

2節 出土遺構

今回の調査では両地区を通じて数多くの遺構の命名を行った。しかし中には遺構として認定することに疑問の残るものもある。また、遺構の名称が適切かどうか、あるいは検出面の設定の問題、遺構の帰属検出面の問題もあるが、本書では現場段階で欠番とした遺構以外はすべて遺構図に記載した。その中の主なものについて、地区ごと検出面ごとに以下に述べる。

1 A地区

第Ⅰ検出面 (99.6m²)

攪乱によって破壊され、調査区の東西両端に一部のみ残存していた。遺物から19世紀初頭の面と考える。なお検出面各所に杭が認められたが、遺構として命名はしなかった。

建物址1

調査区の東端。東側と北側は調査区外にかかるため2辺のみの確認であり、全体の様子は不明だが遺構の主軸は東西南北に合致すると思われる。形状から相当重量のある建築物を支えるための基礎であると考えられ、過去の調査事例から上葺の間知石と推定される。面取した石が二段もしくは三段に積まれており、石の正面形は長方形、断面形は台形のものが多い。人力でトレンチを掘削して断面観察を行ったところ、間知石の外側34cmほどの地点から深さ31～34cm程度の掘り込みが認められた。間知石は検出面の10～20cm下から第一段目が積まれており、間知石の直下及び周囲には5～10cm大の礫を多く含む砂礫層が堆積していた。これは間知石を安定させるための裏込めと考えられる。また、第Ⅰ検出面を調査している時点で判明しなかったが、後に同地点から杭列が確認された。調査区北壁面の土層観察の結果やⅡ検の溝1の工法から考えるとこの杭列はⅠ検建1の下部構造である可能性が高い。

土坑7

建物址1の西辺に近接する。遺構内北部から桶が出土したが断面観察を行った結果、桶出土部分と他の部分は別の遺構である可能性が高い。桶出土部分と建物址1との関係は不明。

第Ⅱ検出面 (322.1m²)

北側部分と南側部分を調査。出土遺物から18世紀末～19世紀初頭の面と推定される。しかし南側部分については検出面の設定が難しく、本来第Ⅰ検出面に帰属する遺構を含む可能性が高い。

溝状遺構1

調査区北壁のE17付近から発して南に直行し、S4E17付近で直角に曲がり西壁に達する。北側と西側は調査区外にかかる。当初は溝状遺構として命名し調査を行ったが、調査を進めるに従って大規模な建物址である可能性が高いことが判明した。検出時の状態は、北壁からS4E17付近にかけては遺構覆土に焼土及び3～10cm大の礫が多く認められ、その他の部分の遺構覆土は小礫を含む青灰色粘質土であった。その後第Ⅲ検出面に到って遺構の下部の構造が明らかになり、遺構内には30cmほどの幅で2列に杭が打たれその周囲は3～10cm大の礫で固められていることが判明した。また、北壁からS4E17付近にかけての部分には杭の上に横木が渡されていた。なお、第Ⅰ検出面においては、このⅡ検溝1に該当する部分はほとんどが攪乱によって破壊されており、また当遺構の工法がⅠ検建1と酷似しているため比較的新しいものであると考えられることから、当遺構の帰属面が真に第Ⅱ検出面であるかどうかは疑いが残る。

木樋

調査区西壁のS6付近から発しS3E4付近に達する。Ⅱ検の検出面では既に木樋部分が露呈している状態であったため上面から埋設されたものである可能性が高い。

土坑11

遺物及び調査区北壁面の土層観察の結果から考えると上面からの掘り込みであると考えられる。

第Ⅱ検出面 (272.8m²)

北側部分と南側部分を調査。出土遺物から判断すると17世紀初頭～17世紀前半の面と思われる。第Ⅱ検出面との時代的間隔が大きい。

建物址1

北側部分と西側部分が調査区外にかかるため全体の様子は不明。調査区に表れた部分は、1辺7～8mほどのT字形に深さ10cm程度の溝状の掘り込みがあり、その中に40～70cm大の礎石が各所に据えられている。遺構覆土は3cm～20cmほどの礫を多く含む。

土坑25、土坑31、土坑38

遺構内より柱と思われる木材が出土。十文字に木組みが施してあった。3基とも同様の工法であり、ほぼ直線上に位置するため同一の構造物の一部である可能性が高い。

建物址2

Ⅱ検溝1の下部と推定される。杭の間に礫が詰められ、杭の上には横木が渡されていた。

第Ⅲ検出面 (197.9m²)

北側部分のみの調査。出土遺物から考えると16世紀末～17世紀初頭の面と思われる。なお、Ⅰ検～Ⅲ検まででは検出面の各所に見えていた杭が当検出面においては極めて少なくなっている。

建物址1

調査区東側において確認された。40～60cm大の平らな石が長方形に配列されている。それぞれの礎石は半分～3分の2程度が地中に埋まった状態で検出されたが、トレンチを掘削して断面観察を行ったところ礎石を掘るための掘り込みは特に確認されず、この面が整地された際に埋められた可能性がある。なお当遺構のさらに東側に30cm程度の石が確認されたが当遺構には含まなかった。

第Ⅳ検出面 (190.8m²)

出土遺物から考えると16世後半～16世紀末の面と思われる。なお、溝状遺構2は平面形も不定形であり、断面観察においても明確な立ち上がりが認められないため遺構ではない可能性が高い。

土坑9、土坑19、土坑21、土坑52

土坑9、土坑21、土坑52の各遺構内の底部に上部が平らな石が確認された。3基の土坑がほぼ直線上に位置するためこれらの土坑が建物址の一部であることを疑い、土9から西へ190cmほどの地点にトレンチを設定したところ同様の石が確認された。しかし、土19では同様の石は確認されたものの遺構覆土等が他の3遺構とは異なる様子であった。また、トレンチ周辺でも平面的に遺構は確認されなかったため、これら4基の土坑を建物址とは命名せずその可能性を検討するに留まった。

第Ⅴ検出面 (160.6m²)

出土遺物は極めて少ないが16世紀末と考えられる遺物が出土しているため、当検出面も同様の時期に帰属するものと思われる。なお、土坑25、土坑34などからは杭あるいは柱材と思われる木材が出土しているが、これらの遺構をもって建物址と想定できる平面形を形成するには至らなかった。

2 B地区

第Ⅱ、第Ⅴ検出面は平面の観察、遺物回収にとどまるため遺構についての記述は割愛した。

第Ⅰ検出面 (104.9m²)

遺物から見て19世紀中頃～後半の面と思われる。南部に径約30cmの礫を並べた、建物址と見られる掘り込みがあったが、出土品等から新しい時代の擾乱と判断し、遺構とは認定しなかった。

建物址1

調査地北東でN-89°-W方向に位置する。北側及び東側は調査区外にかかり全体の規模は不明であ

る。布掘工法をとっていると想像され、深さ約20～30cm、幅約35～50cmで溝状の掘り込みの中に径約4～10cmの礫が混入する。

土坑6

調査区北部に位置する。規模は長軸60cm×短軸50cm×深さ27cmで、陶製の甕が潰れた状況で出土した。周囲には粘土が詰められ、遺物ではなく埋設した遺構と判断した。

第Ⅲ検出面 (132.1m²)

N 27以北は拡張部分。遺物から見て17世紀後半～18世紀前半の面と思われるが、拡張部分の上坑23(木桶)からは近代の遺物が出土しており、拡張部分の検出面は新しい時代の面である可能性がある。南西隅にトレンチを囲むように杭列があるが、詳細は不明である。

建物址1

調査地東側中央でN-0°の方向に、鐘形の溝状遺構として位置する。布掘工法をとっていると想像され、幅約30～50cm、掘り込みの深さは約15cm、直径約10～20cmの礫が多数混入する。第Ⅰ検出面の建物址1に類似し、場所も近接することから、第Ⅰ検出面の掘り残しの可能性もある。

建物址2

調査地北部に南北へ伸びる形で位置する。形は不整形である。約20cmの深さの掘り込みに径約1～20cmの礫が混入する。調査地北西部分、上坑23付近で建物址が不整形になるのは、土坑23(木桶)につながる木管を埋設した際の掘り込みを混同している恐れがある。

建物址3

調査地北部に建物址2を挟むようにして位置する3基の土坑(それぞれ基礎1、2、3と称する)によって形成される。3基とも深さ約10cmの掘り込みに径約10cm～20cmの礫が混入する。

土坑23(木桶)

直径約55cm、深さ約90cmの木桶が周辺に粘土を詰めて埋設されている。桶底部から大日本ビール(1906～1949)製の瓶が出土しており、新しい時代まで利用されていたと思われる。上部の遺構を見逃していた可能性がある。側面に水を導くための直径約15～20cmの木管が接続され、北西方面へ伸びる。木管内側には直径約5cmの穴が穿たれる。この木管を設置した際の掘り込みは確認できなかった。桶底面に穴はない。他方から水を引く集水槽的な機能を果たしていたかと思われる。

土坑25

土坑中央部に柱が残存。この柱に細木が貫通し、さらにその上に細木が井桁状に組まれ、約3～20cmの礫が混入する。柱が沈まないための構造と思われる。A地区第Ⅲ検出面で検出された土坑25、31、38の構造と類似する。

第Ⅳ検出面 (145.9m²)

N 27以北は拡張部である。遺物から見て17世紀前半までに相当する面と思われる。

集石遺構

調査区南部に東西方向と平行に位置する。径約15～40cmの礫に囲まれるような形で、深さ10cmの掘り込みの中に径約3～10cmの小礫が多量に混入する。周辺の石列とも主軸が同一であり、詳細は不明だが建物址の一部かと思われる。

建物址1

調査地北部に位置する礎石・杭の集合で構成される。礎石建物の工法をとり、本来の構造は複数の杭の七に礎石を載せ、その上に柱を立てたものと推測される。杭の集合は3～5本ほどの杭により形成される。第Ⅴ検出面で検出された杭の集合も、この面で掘り逃したもとのとして建物址に含める。プラン内から水滴、

中国漳州窯産染付皿、志野織部皿など茶器関係の陶磁器がいくつか出土した。

第Ⅴ検出面 (32.9m²)

当初の発掘範囲からの拡張部にあたる。特筆すべき遺構なし。遺物から見て16世紀末から17世紀初頭の面と思われる。

第Ⅵ検出面 (50.3m²)

遺物から見て16世紀末から17世紀初頭の面と思われる。東部で瀬戸・美濃産の茶入が出土するが、位置から見てⅣ検建物址で掘り逃した遺物である可能性がある。

土坑9

中央部に65×60×15cmの甕状の木桶が埋設される。炭化物を多く含む。

土坑10

中央部に70×60×13cmの甕状の木桶が埋設される。

第Ⅷ検出面 (74.6m²)

中央部で南北と平行にオリブ黒の砂質土地域が溝状に細長く分布しているが、トレンチを入れたところ、むしろオリブ黒砂質土を掘り込んで両側に青灰色砂質土が分布するため、遺構とは認定しなかった。遺物は少量だが、建物址1の工法から見て、16世紀後半以後の面と思われる。

建物址1

掘立柱建物の構造をとり、土坑4、7、15、22などには角材の柱が残る。下部に栗石、礎石を置いたものもあり、本来は柱材の下に礎石を置き、周りを栗石で固めるという16世紀後半の工法を使用していると思われる。土坑1、4、6、7、9、15、16、17、20、22、23、25、28、29、さらにこの面で掘り逃したと思われる第Ⅸ検出面の土坑3、4、5で一つの建物址を形成すると推定される。プラン内に土坑3、5、10、18、19、21を持つ。プラン内南東隅には径約5～20cmの礎石圏が存在する。建物址との関係は不明。

土坑21

調査地の北部に位置する。この土坑21と西にある土坑22を繋ぐように径約2～10cmの礎石圏が分布する。内部に約70cmの棒状木片が井桁状に差し渡され、内側に暗褐色粘質土と黄灰色灰が堆積する。上記建物址に付随する火関連の施設であろうか。

第Ⅷ区検出面 (54.2m²)

特筆すべき遺構なし。土坑3、4、5は第Ⅷ区検出面の建物址の掘り残しと思われる。

第Ⅸ検出面 (62.3m²)

腐植泥質土層の上面を検出面とする。溝状遺構底部から古墳時代前期の土器が出土しており、その時代の面かと思われる。

溝状遺構1

調査地南部に位置し、調査区外の東へ伸びる。西半分は幅約40～50cmで深さ約5～10cmの浅い掘り込みだが、東部では幅約70～80cm、深さ40～45cmの、垂直な長方形に掘り込まれた溝になる。

溝状遺構2

調査地南西部に位置し、調査区外の西へ伸びる。幅約90cmで東端部は直径約110cmの円形にふくらみ、深さは約45cmである。底部で土器が1点、木器が2点出土する。

第ⅩⅠ検出面 (14.2m²)

特筆すべき遺構なし。古墳時代前期の土器が2点、建築材と思われる木器、他から持ち込まれた石器などが散発的に出土する。第Ⅸ区検出面から第Ⅹ区検出面にかけて採取した土壌サンプルから、イネ科植物細胞のケイ酸体が多数確認され、この地区で稲作が行われた可能性を示唆している(第5章参照)。

第1表 建物址一覧表 <>:推定 () :残存

地区・検出面	No.	平面形 柱配り	主軸方位 面積 (㎡)	規模 (cm)	柱間寸法 (cm)	柱穴(礎石)		備考
						平面形	規模 (cm)	
A I	1	不明 不明	N-89°-W (65.5)	841×(790)				径約20～70cmの礎石の配列で構成。
A II	1	不明 不明	N-0° (52.5)	(783)×(735)	(礎石間) 76～228	(礎石) 径35～50		幅約46～86cm、深さ約8～25cmの溝状遺構内に礎石が等列配置。
A III	2	不明 不明	N-0°	(596)				幅約60～94cm、深さ約7～13cmの溝状遺構内に杭が配置。その上に板状木材が置かれる。
A IV	1	長方形 不明	N-89°-W (7.0)	(549)×228	(礎石間) 104～185	(礎石) 径34～59		礎石が等列配置。
B I	1	不明 不明	N-0° (3.1)	(431)×(111)				幅約35～50cm、深さ約20～30cmの溝状遺構内に径約4～10cmの礎石が詰まる。
B III	1	不明 不明	N-90°-E (4.3)	252×(189)				幅約35～50cm、深さ約10cmの溝状遺構内に径約10～20cmの礎石が詰まる。
B II	2	不整形 不明	N-2°-E (39.4)	(736)×438				深さ約20cmの掘り込みに径約2～10cmの礎石が詰まる。
B III	3	不明 不明	N-84°-E	(576)	259～275	3基 楕円形 径42～74 深9～12		径約10～20cmの礎石が詰まる。
B IV	1	長方形 側柱形	N-88°-W (27.5)	(864)×408	103～194			杭が数本集中した部分を柱痕に見たてて建物址のプランを策定。プラン内に土坑12・15、灰・炭化物範囲を持つ。茶器関係の遺物複数出土。
B III	1	不明 側柱形	N-88°-W (43.8)	(826)×(771)	177～431	17基 円形 径37～84 深15～65	8基 径11～17	土坑の一部に柱材が残存。それを囲むように径約33～40cmの礎石が配置される。最低面に礎石。

第2表 溝状遺構一覧表 <>:推定 () :残存

地区・検出面	No.	起点	終点	断面形	規模 (cm)			時期	備考
					長さ	幅	深さ		
A I	1	S15・E20 (南端)	S1・E20 (北端)	皿形	(1287)	44～59	28～50	不明	南端は調査区外。
A II	1	S4・E2 (西端)	N3・E18 (北端)	皿形・長方形	(2255)	58～114	17～23	18C末～19C初頭	溝3を切る。土1・2、木樋に切られる。両端は調査区外。
A II	2	S1・E31 (東端)	S1・E29 (西端)	皿形	(224)	52～64	8～14	18C末～19C初頭	東端は調査区外。
A II	3	S3・E21 (東端)	S3・E18 (西端)	皿形	(254)	80～88	6～18	不明	土12に切られる。両端は溝1・4に切られる。
A II	4	N2・E21 (北端)	S5・E21 (南端)	皿形	(746)	114～176	10～26	不明	溝3を切る。北端は調査区外。南端は掘削に切られる。
A III	1	NS0・E20 (西端)	NS0・E21 (東端)	皿形	143	49～60	7～9	不明	
A III	2	NS0・E21 (西端)	NS0・E23 (東端)	皿形	167	34～54	5～8	不明	
A IV	1	N2・E4 (西端)	N1・E7 (東端)	皿形	317	19～25	2～7	不明	
A V	1	N2・E3 (北端)	S3・E2 (南端)	逆台形・長方形	(562)	22～59	18～21	不明	北端は調査区外。南端はⅡ検溝1に切られる。
A V	2			皿形			5～19	不明	不整形。内部に土26をもつ。Ⅱ検溝1に切られる。西部は調査区外。
A V	3	NS0・E15 (南端)	N2・E15 (北端)	皿形	(266)	44～60	6～8	不明	土7・38・39に切られる。北端は調査区外。
B X	1	N16・W4 (西端)	N16・W8 (東端)	皿形・長方形	(569)	37～75	6～46	不明	冒検土29に切られる。東端は調査区外。
B X	2	N17・W5 (南東端)	N18・W7 (北西端)	長方形	(280)	93～111	44～46	古墳?	トレンチに切られる。北西端は調査区外。

第3表 土坑一覧表 <> : 推定 () : 残存

地区・調査区	No.	平面形	規模(cm) 長横×短横×深さ	時期	備考
A1	1	不明	154×(90)×21	不明	トレンチに切られる。
A1	2	円形	26×26×14	不明	
A1	3	不整形	80×68×9		
A1	4	楕円形	28×22×6	不明	
A1	5	楕円形	69×48×9	不明	
A1	6	不明	124×66×15	不明	南端は調査区外。
A1	7	不明	380×84×16	不明	遺物出土に切られる。
A1	1	楕円形	214×180×28	不明	溝1を切る。
A1	2	不明	2280×259×24	不明	溝1を切る。南端は調査区外。
A1	3	不整形	172×56×12	不明	
A1	5	不明	180×(80)×15	不明	土壁に切られる。北端は調査区外。
A1	6	円形	48×44×18	不明	土壁を切る。
A1	7	不整形	124×72×20	不明	
A1	8	円形	34×24×7	不明	
A1	9	不明	2190×(80)×14	不明	土に切られる。北端は調査区外。
A1	10	円形	34×20×11	不明	
A1	11	不明	2400×179×16	190c後半	北端は調査区外。
A1	12	楕円長方形	58×44×18	不明	
A1	13	円形	22×20×23	不明	
A1	14	楕円形	80×22×22	不明	
A1	15	不明	260×14×7	不明	南端・西端は調査区外。
A1	16	楕円形	172×90×12	不明	
A1	17	不明	70×62×10	不明	土壁に切られる。
A1	18	不整形	154×86×6	不明	土壁を切る。
A1	19	楕円形	26×22×10	不明	
A1	20	不整形	22×42×9	不明	
A1	21	楕円形	42×22×6	不明	
A1	22	不明	1700×126×18	不明	北端は調査区外。
A1	23	円形	98×82×25	不明	土壁を切る。
A1	24	不整形長方形	66×72×21	不明	
A1	25	円形	28×28×3	不明	
A1	26	不整形	274×94×9	不明	土壁に切られる。
A1	27	不明	48×(20)×17	不明	南端は調査区外。
A1	28	楕円形	44×28×11	不明	土壁を切る。
A1	29	不明	76×(80)×7	不明	土壁に切られる。
A1	30	楕円長方形	68×22×9	不明	
A1	31	不明	126×(54)×26	不明	南端は調査区外。
A1	32	楕円形	46×28×16	不明	
A1	33	円形	76×68×5	不明	
A1	34	円形	54×50×15	不明	
A1	35	長方形	82×24×9	不明	
A1	36	楕円形	38×20×6	不明	
A1	37	楕円形	56×44×6	不明	
A1	38	円形	20×20×10	不明	
A1	39	楕円形	58×46×9	不明	
A1	40	楕円形	22×12×7	不明	
A1	41	不明	44×(12)×8	不明	北端は調査区外。
A1	42	不整形	288×156×26	不明	北端は調査区外。
A1	43	円形	72×64×17	不明	
A1	44	不明	45×(22)×8	不明	南端は調査区外。
A1	45	不整形	1280×54×9	不明	南端は調査区外。
A1	46	不明	89×160×24	不明	南端は調査区外。
A1	47	楕円形	36×27×6	不明	
A1	48	不明	86×(70)×13	不明	北端は調査区外。
A1	49	円形	26×24×21	不明	
A1	50	楕円形	46×24×23	不明	
A1	51	不整形	(270)×(80)×16	不明	南端・東端は調査区外。
A1	52	不明	(280)×176×2	不明	3ヶ所に切られる。土壁を切る。
A1	1	不明	472×192×26	不明	南端は調査区外。

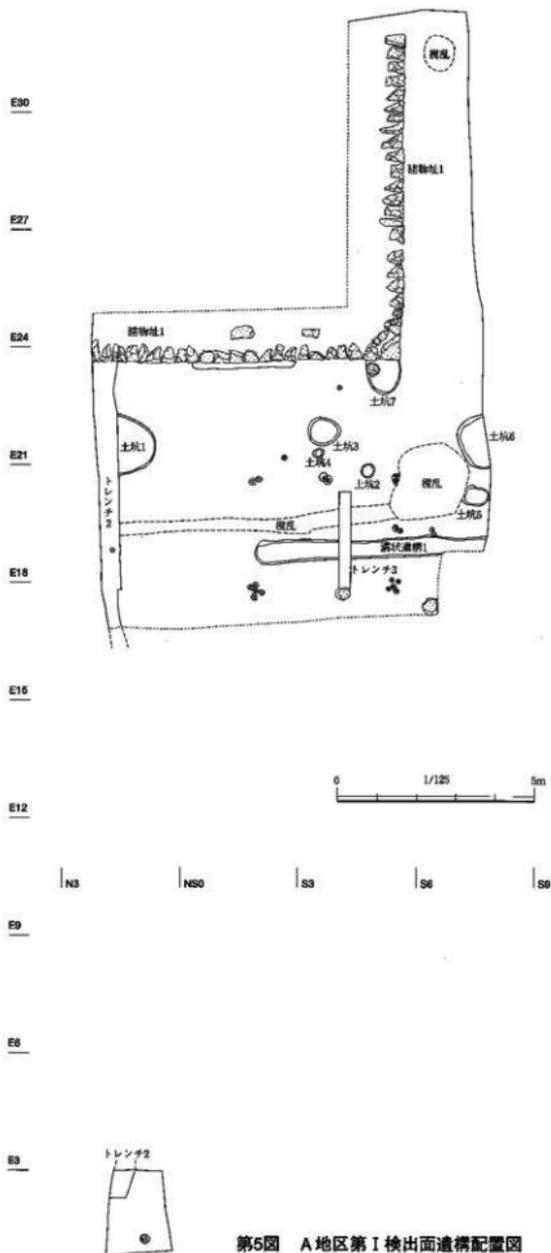
地区・調査区	No.	平面形	規模(cm) 長横×短横×深さ	時期	備考
A1	2	不明	160×116×3	不明	南端に切られる。
A1	3	楕円長方形	58×50×9	不明	
A1	4	不明	1800×26×7	不明	南端に切られる。
A1	5	不整形	204×175×5	不明	
A1	6	不明	56×50×9	不明	
A1	7	不整形	124×26×9	不明	
A1	8	不明	122×(24)×25	不明	北端は調査区外。
A1	9	楕円形	62×40×12	17C初期?	
A1	10	楕円形	44×22×13	不明	
A1	11	円形	46×40×16	不明	
A1	12	楕円形	44×28×9	不明	
A1	13	不明	116×(70)×26	不明	南端は調査区外。
A1	14	円形	42×40×4	不明	
A1	15	不明	1620×202×22	17C初期?	溝1に切られる。北端は調査区外。
A1	16	楕円形	46×27×7	不明	
A1	17	円形	12×9×6	不明	
A1	18	楕円形	27×18×14	不明	
A1	19	円形	10×9×10	不明	
A1	20	円形	44×42×19	不明	
A1	21	楕円形	26×24×12	不明	
A1	22	楕円形	42×24×4	不明	
A1	23	楕円形	68×48×16	不明	
A1	24	不明	1300×78×13	不明	北端は調査区外。
A1	25	円形	82×72×21	17C中頃～後半	柱跡あり。
A1	26	楕円形	176×150×13	不明	
A1	27	不明	168×128×19	17C初期?	
A1	28	不整形	100×79×21	不明	
A1	29	円形	28×26×22	不明	
A1	30	楕円形	34×28×15	不明	
A1	31	不整形	132×80×45	不明	柱跡あり。
A1	32	楕円形	58×24×23	不明	
A1	33	楕円長方形	82×82×6	不明	
A1	34	不明	160×26×14	不明	北端は調査区外。
A1	35	円形	42×41×15	不明	
A1	36	円形	58×86×16	不明	
A1	37	円形	42×28×21	不明	
A1	38	不整形	154×88×22	不明	柱跡あり。
A1	39	楕円形	74×54×10	不明	
A1	40	不明	76×52×26	不明	
A1	41	不整形	114×80×18	不明	
A1	42	楕円形	28×24×16	不明	
A1	43	不明	390×(280)×20	不明	南端は調査区外。
A1	44	楕円形	36×24×16	不明	土壁を切る。
A1	45	不明	40×20×17	不明	北端は調査区外。
A1	46	楕円形	44×26×10	不明	
A1	47	楕円長方形	82×48×19	不明	
A1	48	不明	36×(20)×9	不明	土壁に切られる。
A1	1	不整形	282×91×12	不明	
A1	2	円形	44×42×6	不明	
A1	3	円形	33×22×2	不明	
A1	4	楕円形	52×44×8	不明	
A1	5	円形	42×40×12	不明	
A1	6	不明	162×(70)×42	不明	北端は調査区外。
A1	7	不整形長方形	116×36×9	不明	
A1	8	不明	228×118×5	不明	
A1	9	楕円形	26×27×12	不明	
A1	10	長方形	162×72×24	不明	
A1	11	不明	46×28×24	不明	
A1	12	不整形	68×46×26	不明	

地区・教団名	No.	平面形	規模(m) 長軸×短軸×階台	時期	備考
A.Y	13	楕円形	92×74×16	不明	
A.F	14	楕円形	90×72×24	不明	
A.R	15	不明	84×(20)×37	不明	北側に調査区外。
A.R	16	不整形	88×82×32	不明	
A.F	17	円形	80×44×20	不明	
A.W	18	楕円形	34×28×11	不明	
A.F	19	不規則丸方形	84×58×12	不明	
A.Y	20	不明	(136)×118×13	不明	東側に調査区外。
A.R	21	真円形	64×32×9	不明	
A.V	1	不明	138×(50)×25	不明	北側に調査区外。
A.V	2	円形	45×43×20	不明	
A.V	3	円形	48×43×19	不明	
A.V	4	楕円形	182×124×4	不明	土質に砂と石。
A.V	5	不整形	148×82×7	不明	
A.V	6	円形	42×38×34	不明	
A.V	7	楕円形	82×50×12	不明	溝2を切る。
A.V	8	不明	64×(50)×8	不明	基壇直上10m程度。
A.V	9	楕円形	54×47×36	不明	
A.V	10	円形	39×36×27	不明	
A.V	11	円形	38×34×30	不明	
A.V	12	楕円形	27×30×11	不明	
A.V	13	不明	76×(20)×9	不明	南側に調査区外。
A.V	14	円形	40×38×31	不明	
A.V	15	真円方形	22×45×24	不明	
A.V	16	楕円形	44×36×18	不明	枕形。
A.V	17	楕円形	55×32×21	不明	
A.V	18	楕円形	47×38×20	不明	
A.V	19	楕円形	59×51×20	不明	
A.V	20	不明	(58)×52×36	不明	東側に調査区外。
A.V	21	不整形	81×(64)×28	不明	東側に調査区外。
A.Y	22	円形	54×50×7	不明	
A.V	23	不整形	86×50×14	不明	
A.V	24	不規則丸方形	49×29×46	不明	上4を切る。枕形。
A.V	25	円形	41×36×15	不明	
A.V	26	楕円形	56×28×42	不明	枕形。
A.V	27	不整形	383×(236)×18	不明	南側に調査区外。
A.V	28	円形	54×50×13	不明	枕形。
A.V	29	不明	60×(34)×51	不明	上4に切らる。
A.V	30	楕円形	80×19×16	不明	
A.V	31	円形	28×26×16	不明	
A.V	32	楕円形	25×23×17	不明	
A.V	33	真円三角形	45×36×19	不明	
A.V	34	円形	22×29×20	不明	枕形。
A.V	35	楕円形	22×30×27	不明	
A.V	36	円形	35×32×21	不明	
A.V	37	円形	36×34×34	不明	
A.V	38	楕円形	44×34×12	不明	溝3を切る。
A.V	39	楕円形	38×30×15	不明	溝3を切る。
A.V	40	円形	36×34×12	不明	枕形。
A.V	41	円形	30×26×14	不明	枕形。
A.V	42	円形	42×40×24	不明	枕形。
A.V	43	円形	33×32×24	不明	土層を切る。
A.V	44	円形	32×29×17	不明	
A.V	45	楕円形	34×35×17	不明	
A.V	46	楕円形	30×24×23	不明	枕形。
A.V	47	楕円形	40×33×6	不明	
A.V	48	楕円形	30×18×12	不明	
A.V	49	円形	21×20×2	不明	
A.V	50	楕円形	35×32×18	不明	

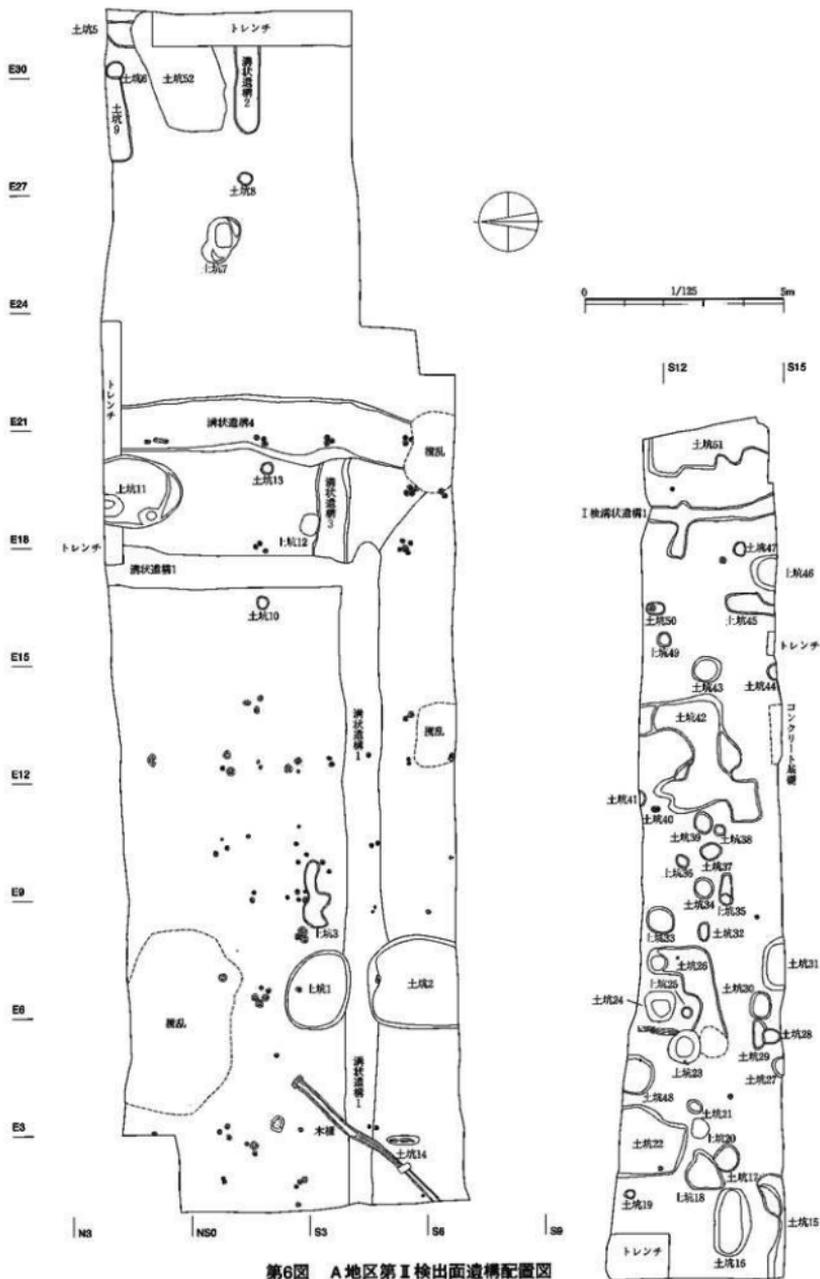
地区・教団名	No.	平面形	規模(m) 長軸×短軸×階台	時期	備考
A.V	51	円形	30×28×11	不明	
A.V	52	楕円形	43×27×20	不明	
A.W	1	円形	32×28×25	不明	
A.W	2	楕円形	34×17×23	不明	
A.W	3	不整形	44×34×18	不明	
A.W	4	不整形	38×12×23	不明	
A.W	5	楕円形	25×22×16	不明	
A.W	6	円形	34×22×11	不明	
A.W	7	円形	32×29×30	不明	
A.W	8	円形	29×24×22	不明	
A.W	9	不整形	44×34×20	不明	
A.W	10	楕円形	39×24×16	不明	
A.W	11	不明	24×(18)×20	不明	南側に調査区外。
A.W	12	円形	32×27×30	不明	
A.W	13	楕円形	38×19×14	不明	
A.W	14	不明	56×(18)×12	不明	南側に調査区外。
A.W	15	円形	33×30×16	不明	
A.W	16	円形	38×28×14	不明	
A.W	17	円形	64×58×13	不明	
A.W	18	円形	30×28×7	不明	
A.W	19	不整形	229×146×15	不明	上21を切る。上22・23に切らる。
A.W	21	不明	18×(16)×27	不明	上20に切らる。
A.W	22	円形	29×28×21	不明	
A.W	23	円形	46×40×21	不明	上20を切る。
A.W	24	不整形	19×16×5	不明	
A.W	25	円形	28×27×13	不明	柱形あり。
A.W	26	楕円形	89×45×3	不明	
A.W	27	円形	62×52×20	不明	上20を切る。
A.W	28	楕円形	28×22×27	不明	
A.W	29	不整形	49×36×18	不明	
A.W	30	真方形	41×41×15	不明	
A.W	31	楕円形	52×40×20	不明	
A.W	32	円形	19×19×15	不明	
A.W	33	楕円形	80×64×19	不明	
A.W	34	楕円形	31×27×23	不明	柱形あり。
A.W	35	円形	26×24×17	不明	
A.W	36	楕円形	37×32×11	不明	
A.W	37	不明	38×(12)×8	不明	南側に調査区外。
A.W	38	円形	28×25×18	不明	
A.W	39	円形	21×20×12	不明	
A.W	40	不整形	56×49×9	不明	
A.W	41	楕円形	19×16×6	不明	枕形。
A.W	42	楕円形	12×8×3	不明	
A.W	43	楕円形	45×38×7	不明	
A.W	44	楕円形	26×14×3	不明	
A.W	45	不整形	32×22×11	不明	
A.W	46	楕円形	25×22×6	不明	
A.W	47	不整形	28×24×10	不明	
A.W	48	楕円形	32×16×10	不明	
A.W	49	楕円形	41×29×4	不明	
A.W	50	楕円形	24×18×24	不明	
A.W	51	円形	63×54×22	不明	土層を切る。枕形。
A.W	52	不整形	449×216×18	不明	
A.W	53	楕円形	15×12×6	不明	
A.W	54	円形	14×13×10	不明	
A.W	55	楕円形	46×28×14	不明	
A.W	56	不整形	298×156×12	不明	土質に切らる。
A.W	57	不明	90×(31)×30	不明	上26を切る。上21に切らる。枕形。
A.W	58	楕円形	16×13×16	不明	

地区・ 線区	No.	平面形	縦横(cm) 乗組×荷物×高さ	種類	備考
A区	59	楕円形	18×12×6	不明	
A区	60	楕円形	75×15×15	不明	
A区	61	楕円形	15×11×44	不明	
A区	62	不明	35×120×11	不明	両側は鋼板区外。
A区	63	不明	111×40×7	不明	
A区	64	楕円形	20×11×9	不明	
A区	65	楕円形	23×18×8	不明	
A区	66	楕円形	45×21×40	不明	
A区	67	円形	45×39×23	不明	
A区	68	楕円形	13×19×10	不明	
A区	69	楕円形	11×11×15	不明	
A区	71	楕円形	11×8×9	不明	
A区	72	楕円形	10×19×9	不明	
A区	73	楕円形	10×9×5	不明	
B区	1	不明	(100)×(80)×13	不明	トンナに切り取る。乗組は鋼板区外。
B区	2	楕円形	40×52×14	不明	枕木あり。
B区	3	不明形	116×54×18	不明	
B区	4	楕円形	36×62×13	19C	枕木あり。
B区	5	不明	40×(24)×8	不明	両側に切り取る。
B区	6	不明	60×50×27	不明	壁が傾斜。
B区	7	不規則多角形	74×62×16	19C最下	枕木あり。
B区	1	不明形	122×60×20	17C	
B区	2	不明形	130×68×12	不明	
B区	3	円形	54×32×24	不明	
B区	4	円形	45×36×7	不明	
B区	5	不明形	62×62×11	不明	枕木あり。
B区	6	楕円形	22×20×12	不明	
B区	7	不明形	206×68×18	不明	
B区	8	楕円形	49×31×14	17C上～18C上	
B区	9	円形	57×45×11	不明	
B区	10	不明形	100×84×14	不明	
B区	11	円形	79×80×18	不明	
B区	12	不規則多角形	46×29×7	不明	
B区	13	円形	32×30×12	不明	
B区	14	楕円形	35×24×12	不明	
B区	15	円形	36×34×16	不明	
B区	16	楕円形	66×24×11	不明	
B区	17	楕円形	45×35×7	不明	枕木あり。
B区	18	楕円形	66×40×7	不明	
B区	19	楕円形	56×44×7	不明	
B区	20	不明形	(142)×100×4	18C	車輪は鋼板区外。
B区	21	楕円形	28×30×5	不明	
B区	22	円形	33×21×8	不明	
B区	23	円形	66×61×6	不明	木輪が傾斜。
B区	24	不明	66×(20)×14	19C最上	両側に切り取る。
B区	25	不明	68×(30)×30	不明	枕木あり。
B区	1	楕円形	49×29×14	不明	
B区	2	楕円形	35×29×15	不明	枕木あり。
B区	3	不明	38×(20)×11	不明	上側に切り取る。
B区	4	楕円形	78×57×8	不明	土3～5を切る。枕木あり。
B区	5	楕円形	(10)×38×6	不明	土4に切り取る。
B区	6	不明	(70)×36×30	不明	両側に鋼板区外。
B区	7	不明	24×16×7	不明	両側に鋼板区外。
B区	8	円形	22×30×6	不明	
B区	9	円形	42×36×9	不明	
B区	10	不明形	75×30×6	不明	
B区	11	楕円形	29×29×8	不明	
B区	12	楕円形	54×44×5	不明	
B区	13	不明	56×(30)×19	不明	両側に切り取る。
B区	14	不明	132×64×20	19C最上	両側に切り取る。
B区	15	不明形	27×28×2	不明	
B区	1	不明形	102×64×9	不明	

地区・ 線区	No.	平面形	縦横(cm) 乗組×荷物×高さ	種類	備考
B区	1	楕円多角形	156×116×7	不明	両側に切り取る。
B区	2	円形	56×38×3	不明	
B区	3	不明	(30)×30×4	不明	両側に切り取る。
B区	4	楕円多角形	50×28×19	不明	
B区	5	不明形	104×70×7	不明	枕木あり。
B区	6	楕円形	40×30×9	不明	
B区	7	不明形	(280)×(5)×45	18C最上	土を切る。
B区	8	不明	(31)×(30)×7	不明	土上に切り取る。左側は鋼板区外。
B区	9	円形	104×96×9	18C上	両側の全輪が傾斜。
B区	10	円形	90×76×31	18C最上	両側の全輪が傾斜。
B区	11	不明形	119×66×8	19C最上	
B区	1	不明形	58×26×28	不明	壁1を傾斜。枕木あり。
B区	3	楕円形	42×20×25	不明	枕木あり。
B区	4	楕円形	20×26×40	不明	壁1を傾斜。枕木あり。
B区	5	楕円形	27×20×25	不明	壁1内部にあり。枕木あり。
B区	6	円形	47×44×35	不明	壁1を傾斜。
B区	7	円形	27×22×25	不明	壁1を傾斜。枕木あり。
B区	8	円形	31×25×7	不明	枕木あり。
B区	9	不明形	82×45×62	不明	壁1を傾斜。枕木あり。枕木あり。
B区	10	不明形	50×30×6	不明	壁1内部にあり。枕木あり。
B区	12	不明	56×(14)×8	不明	左側は鋼板区外。枕木あり。
B区	13	楕円形	44×27×20	不明	
B区	14	円形	38×27×7	不明	
B区	15	不明形	80×44×27	不明	壁1を傾斜。枕木あり。
B区	16	円形	28×28×24	不明	壁1を傾斜。
B区	17	円形	(18)×46×(8)	不明	壁1を傾斜。枕木あり。
B区	18	円形	27×23×11	不明	壁1内部にあり。
B区	19	楕円形	28×15×7	不明	壁1内部にあり。
B区	20	不明形	72×44×28	不明	壁1を傾斜。
B区	21	楕円形	94×79×15	不明	壁1内部にあり。
B区	22	不明形	52×54×26	不明	壁1を傾斜。枕木あり。
B区	23	不明形	(20)×40×(30)	不明	壁1を傾斜。枕木あり。
B区	24	不明	22×(20)×7	不明	左側は鋼板区外。
B区	25	不明形	65×65×(12)	不明	壁1を傾斜。枕木あり。
B区	26	不明	22×(14)×7	不明	両側は鋼板区外。枕木あり。
B区	27	不明形	130×114×(8)	不明	
B区	28	円形	26×26×7	不明	壁1を傾斜。枕木あり。
B区	29	不明形	66×66×54	不明	壁1を傾斜。
B区	1	楕円形	56×40×20	不明	
B区	2	楕円形	50×28×16	不明	枕木あり。
B区	3	不明形	90×30×12	不明	壁1を傾斜。
B区	4	円形	44×42×10	不明	壁1を傾斜。
B区	5	楕円形	42×34×13	不明	壁1を傾斜。
B区	6	円形	21×20×10	不明	
B区	7	楕円形	18×14×3	不明	
B区	8	円形	24×22×6	不明	
B区	10	不明	403×(62)×30	18C上～	車輪は鋼板区外。
B区	11	楕円形	25×14×9	不明	
B区	1	楕円多角形	42×39×17	不明	
B区	2	楕円多角形	14×12×6	不明	
B区	3	楕円形	15×12×5	不明	
B区	4	円形	8×7×4	不明	
B区	5	楕円形	14×12×10	不明	
B区	6	楕円多角形	15×16×7	不明	
B区	7	不明形	15×14×6	不明	
B区	8	楕円形	26×16×13	不明	
B区	9	楕円形	18×11×6	不明	
B区	10	楕円形	18×12×10	不明	
B区	11	楕円形	11×9×6	不明	
B区	12	円形	19×8×8	不明	
B区	13	円形	19×9×8	不明	



第5図 A地区第I検出面遺構配置図



第6図 A地区第I検出面遺構配置図

E24

E21

E18

E15

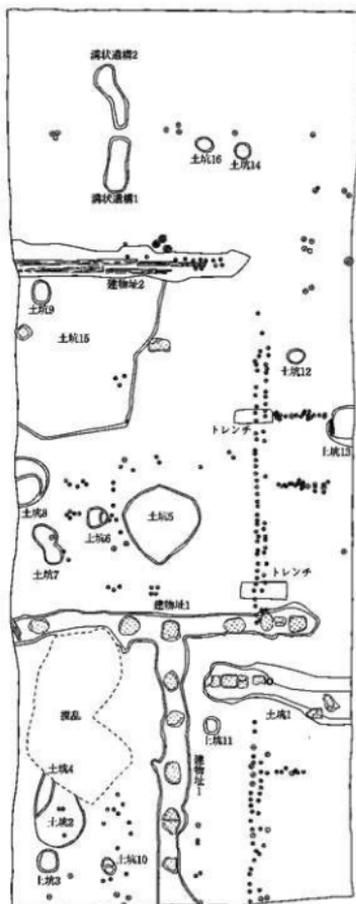
E12

E9

E6

E3

EW0

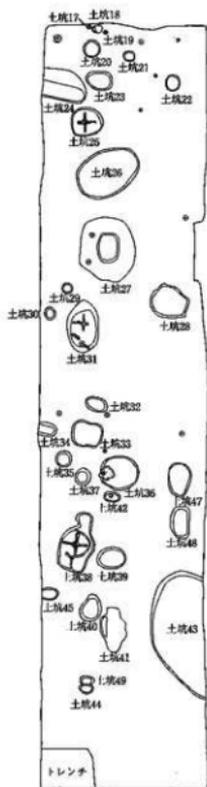


N3

N50

S3

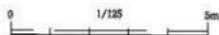
S6



S9

S12

S16



第7図 A地区第Ⅲ検出面遺構配置図

E24

E21

E18

E16

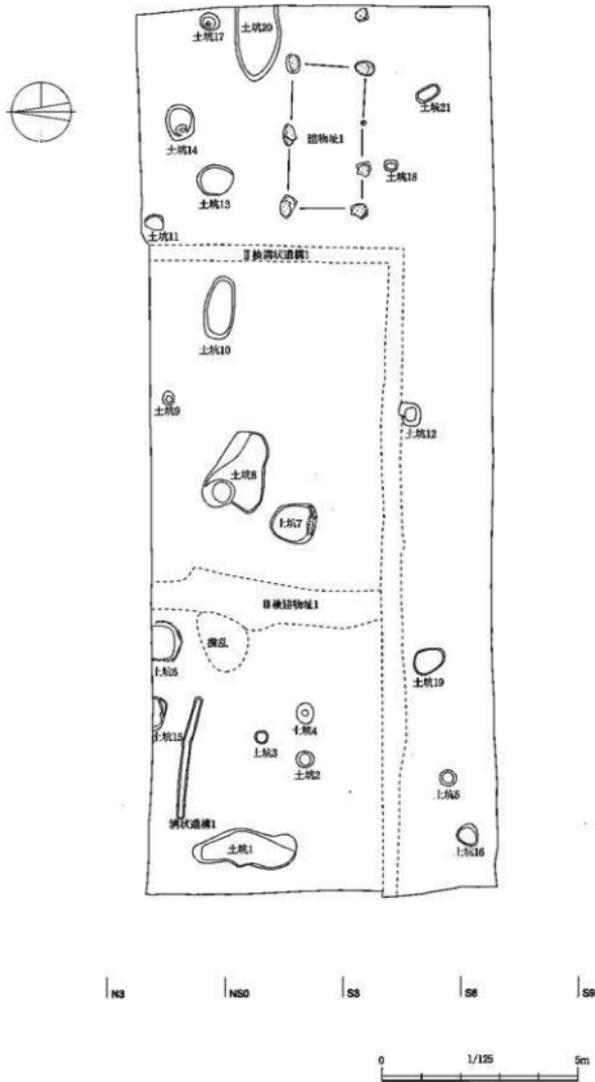
E12

E9

E6

E3

EWO



第8图 A地区第IV号出土面遗物配置图

E24



E21

E18

E15

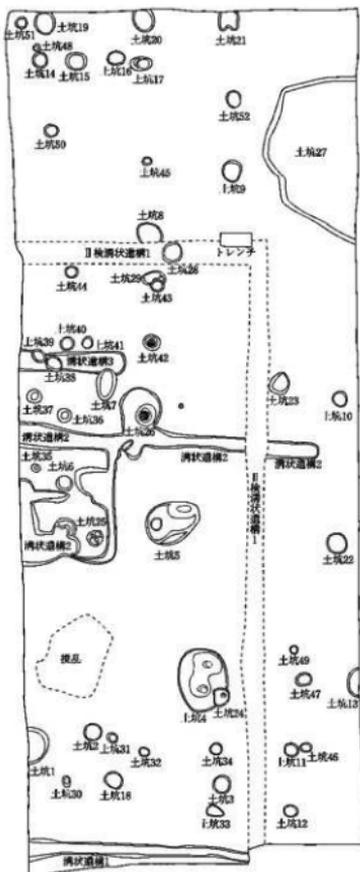
E12

E9

E6

E3

EWO



N3 | N90 | S3 | S6 | S9

0 | 1/125 | 9m

第9図 A地区第V検出面遺構配置図

E24



E21

E18

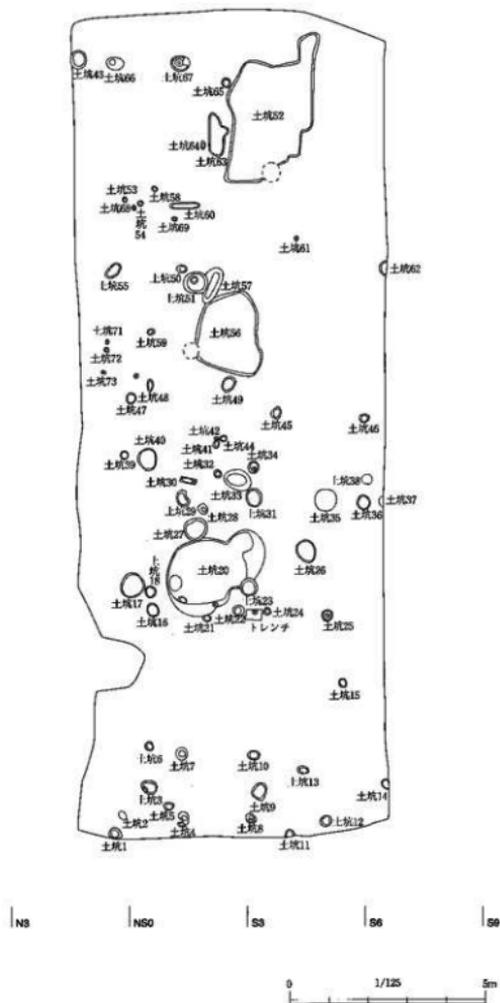
E15

E12

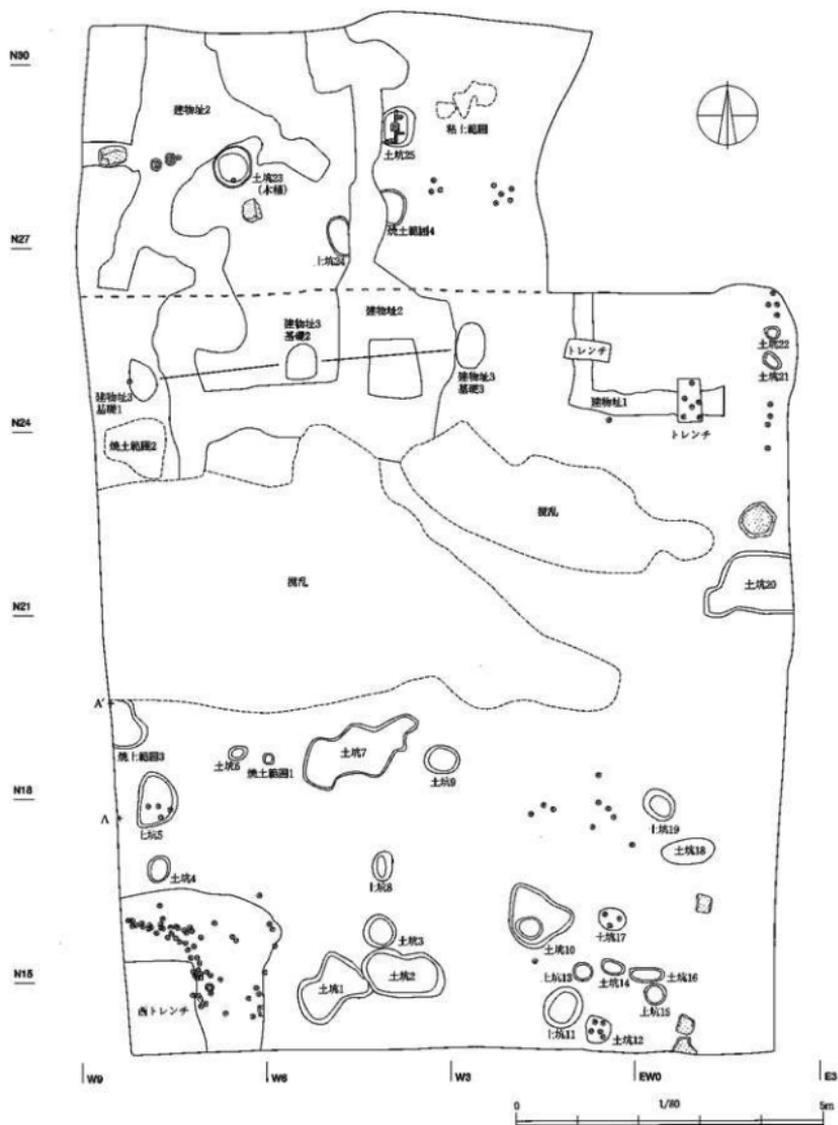
E9

E6

E3

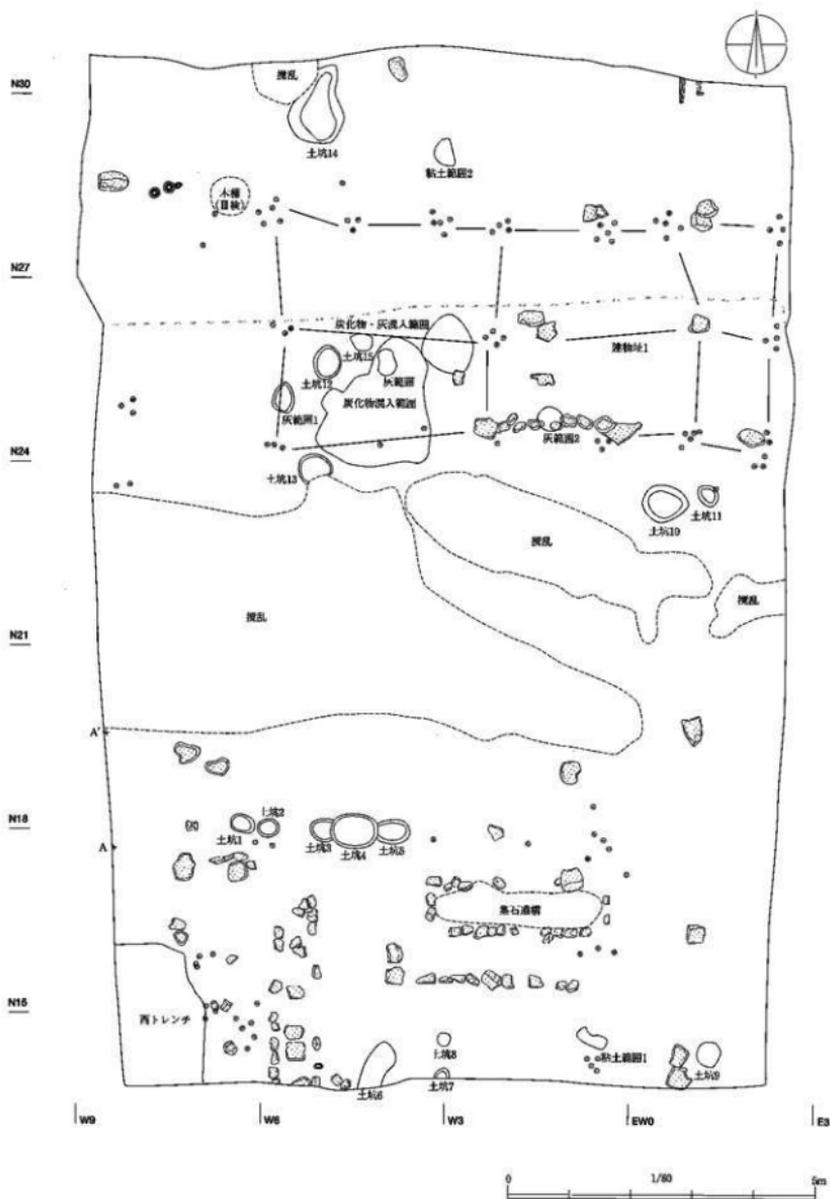


第10图 A地区第Ⅵ検出面遺構配置図



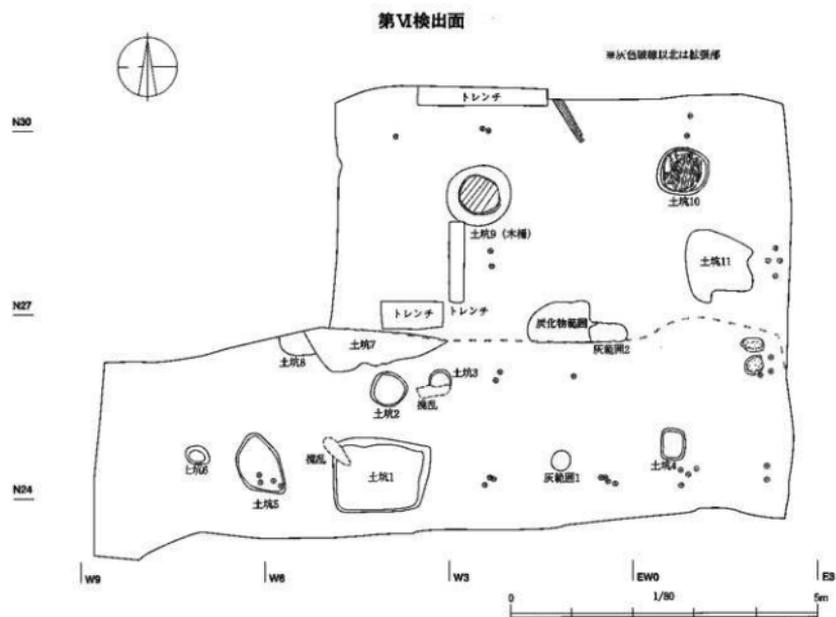
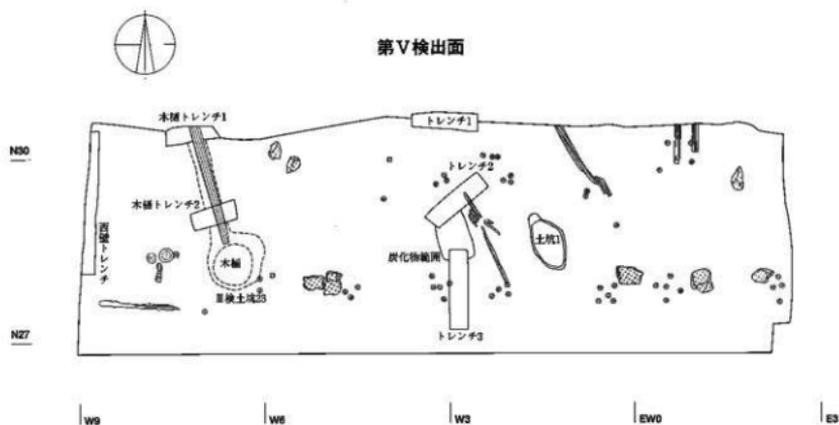
第12図 B地区第Ⅲ検出面遺構配置図

※灰色塗線以北は拡張部



第13図 B地区第IV検出面遺構配置図

※灰色斜線以北は仮定線



第14図 B地区第V・VI検出面遺構配置図

N30

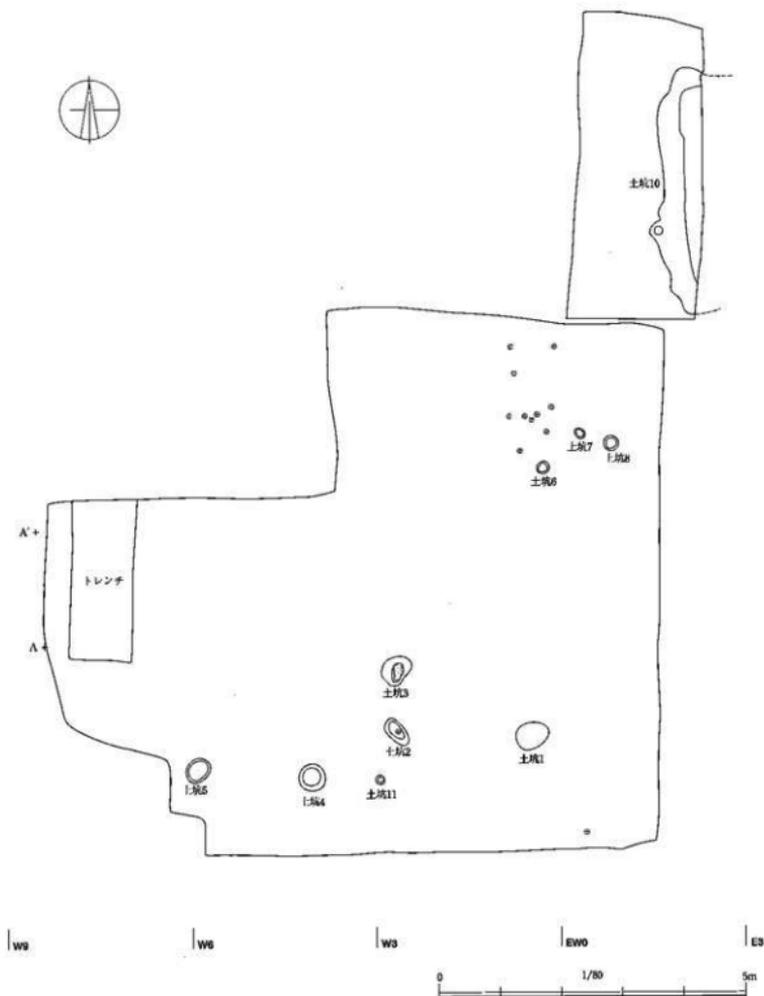
N27

N24

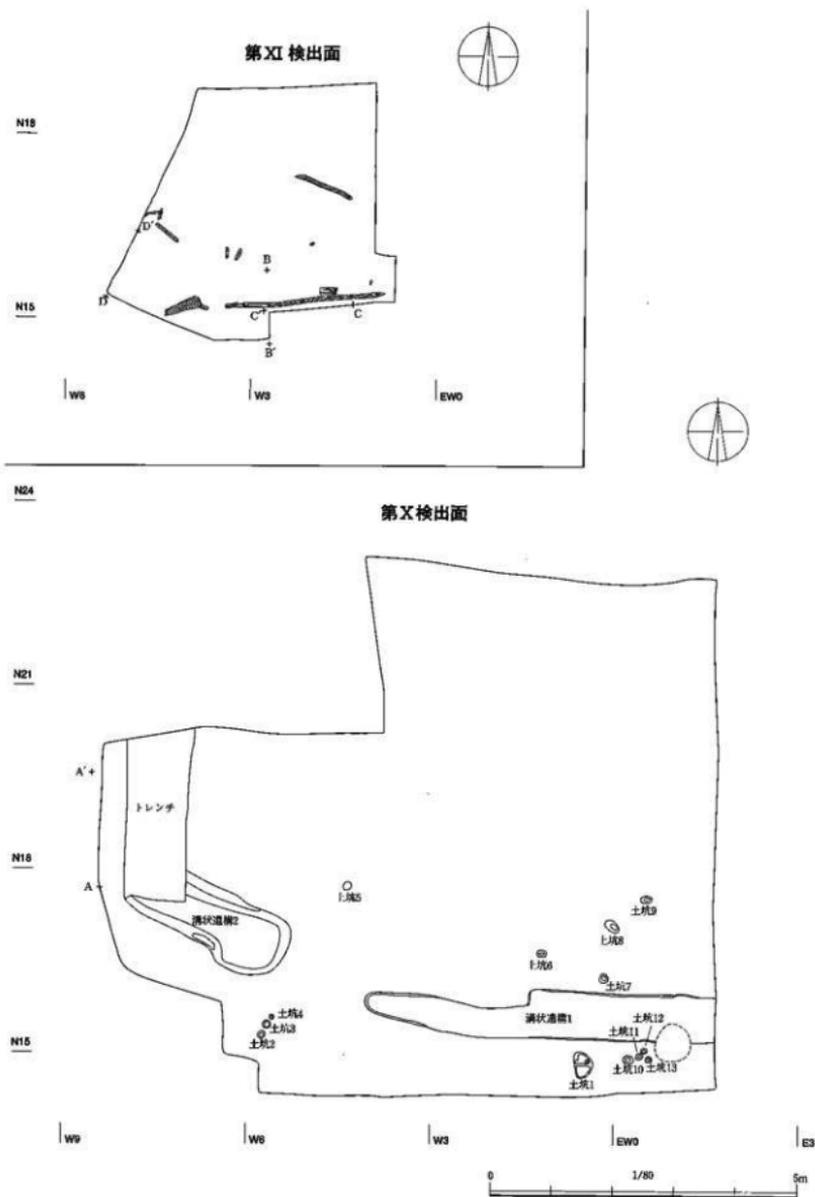
N21

N18

N15



第16図 B地区第B区検出面遺構配置図



第17図 B地区第X・XI検出面遺構配置図

4章 出土遺物

1節 土器・陶磁器

1 出土土器・陶磁器の概要

今回の調査では、調査面積に比して多量の土器・陶磁器が出土した。出土総量は、A区23,200g、B区19,280gで合計42,480gにおよぶ。このうち、可能な限り図化し、A区97点、B区152点の合計249点を掲載した。種別では、磁器・陶器・土器がみられ、器種・器形は多岐にわたる。出土遺物の時期は、A区から弥生土器1点、B区のⅪ検より古墳時代前期の遺物2点を得ているが、その他はすべて戦国時代末～近代(明治)のものである。以下、各地区の検出面ごとに、器種・器形およびその器種構成について記述する。

2 戦国末～明治時代の出土土器・陶磁器

(1) 器種分類

ア 磁器

磁器は、73点図化している。産地別にみると、肥前産が最も多く39点(53.4%)で、以下瀬戸美濃産33点(45.2%)、漳州窯産1点(1.4%)がみられる。器種は多様な形態・用途がみられ、本遺跡出土品を、形状から碗類・皿類・鉢類・壺類・瓶類・蓋物類・蓋類・その他に分類した。次に、この器種を、用途に応じて以下のような器形に分類した。碗類は、碗・猪口・蕎麦猪口。蓋物類は、蓋物・段重・合子。壺類は、壺、油壺。瓶類は、瓶・花瓶・仏花瓶・油徳利・御神酒徳利・燗徳利。その他は、仏飯具・散蓮華・紅猪口である。また、碗・皿・鉢については、器形により、さらに細分化を行なった。碗は、丸碗・平碗・筒碗・広東碗・端反碗・湯呑碗とした。皿類は、丸形・楕円形・輪花形・長方形・菊花形・変形として形を提示した。

これら磁器製品の用途は、ほとんどが日常雑器に使用されるもので、特に食器である碗41点(56.1%)・皿13点(17.8%)で7割以上を占められる。調理具・暖房具・灯明具・喫煙具は認められなかった。

イ 陶器

122点図化した。これらを産地別にみると、最も多いのは瀬戸美濃産で91点(74.6%)、以下、京・信楽系が11点(9.1%)、肥前産が7点(5.7%)、備前1点(0.8%)がみられる。器種は、碗類・皿類・向付・鉢類・片口類・植木鉢類・蓋類・火入類・瓶類・徳利類・土瓶類・壺類・甕類に分類される。器種の特徴では、磁器になかった煮炊具(鍋類)や貯蔵具(甕・鉢類)、調理具(搗鉢)がみられる。出土陶器の年代幅は、16世紀後半～19世紀後半(明治期)にわたる。

ウ 土器

本遺跡では、土師質土器と瓦質土器を一括して土器とした。これらは、基本的には無釉土製のものである。器種は、灯明皿・鉢(植木鉢)・鍋(内耳鍋・焙烙鍋)・火鉢がみられる。ほとんどが灯火具で、調理具や貯蔵具類は少ない。

(2) A区出土土器・陶磁器

A区では、検出面6面を確認しており、各検出面から出土遺物を得ている。これらの産地は、瀬戸美濃・常滑・信楽・京都・備前・肥前・在産土器と多岐にわたるが、出土量を比較すると、陶器では瀬戸・美濃産、磁器では肥前産がその中心をなしている。以下、各検出面の様相を述べる。

第Ⅰ検出面出土土器・陶磁器(第19図1～20)

16点を図化提示した。建1からは、肥前産染付碗(1)、瀬戸美濃産搗鉢(2・3)の3点を図化している。4は、瀬戸美濃産の陶胎染付碗である。内面見込み部に、六曜文と二重の圏線が巡る。19世紀初頭のものか。検出面からは、6点(5～10)出土。5～7は肥前産磁器である。5は、肥前産端反碗、7は小瓶(御神酒甌)

利)である。9は産地不明の壺か徳利である。胎土は灰色で緻密、釉薬は灰釉に鉄釉を流し掛けしている。10は、土師質の火鉢である。11～20は、トレンチからの出土である。瀬戸美濃産小瓶(11)、瀬戸美濃産灯明受皿(16・17・18)がある。20は、瀬戸美濃産織部向付である。14は、肥前産磁器の広東碗で、19世紀初頭のものともみられる。第I検出面出土遺物群は、19世紀初頭～中頃の時期に比定される。

第II検出面出土土器・陶磁器(第19図21～37)

17点を図化提示した。土2からは、瀬戸美濃産燗徳利(27)が出土、土坑11からは、21～26の6点が出土した。21は、肥前産色絵磁器碗で、外面に赤絵の圏線が巡っている。22は、瀬戸美濃産磁器で、コバルト員須により文様が描かれている。19世紀後半のものである。26は瀬戸美濃産灯明受皿、24・25は瀬戸美濃産灯明皿である。内面から口縁外面に錆釉が掛けられている。23は、瀬戸美濃産志野皿である。内面に鉄絵がみられ、17世紀初頭のものか。土坑11は、23を除き19世紀後半に位置付けられ、上層の遺構の可能性が高い。溝1からは、瀬戸美濃産陶胎染付皿(28)、溝2からは京・信楽系碗(29)が出土。18世紀末から19世紀初頭のものともみられる。検出面からは、瀬戸美濃産の鉄軸螺旋文碗(30)、灰軸丸碗(31)、灯明受皿(32)、産地不明の壺か甕(34・35)、在地産土師器播鉢(36)が出土した。いずれも18世紀末～19世紀初頭のものである。

第III検出面出土土器・陶磁器(第20図38～65)

28点図化した。器種は、碗・皿・向付・仏飯具・蓋・壺・小瓶・内耳鍋がみられる。陶器では、瀬戸美濃産が多い。土9からは、志野向付(42)、土27からは志野燗反丸皿(41)、土15からは、志野丸碗(40)が出土している。いずれも17世紀初頭のものともみられる。土43からは、内面見込みに員須絵がある灰軸丸碗(38)、土25からは鉄軸螺旋文碗(39)がある。17世紀中頃から後半ともみられる。検出面出土遺物の中でも、51・52・53の志野、59の志野織部向付、49の丸碗(銅緑釉)などが、いずれも瀬戸美濃産登窯I期(17世紀初)に該当すると考えられる。48は、肥前産京焼風肥前陶器である。底裏に刻印が残る。17世紀中頃か。43・54は、土師器皿である。いずれもロクロにより成形されている。磁器は、検出面から4点(45・46・56・60)出土しているが、いずれも19世紀代のもので、上層から混入した可能性が高い。

第IV検出面出土土器・陶磁器(第20図66～89)

24点図化提示した。磁器の出土はなく、陶器と土器に限られる。67・71は瀬戸美濃産灰軸折縁深皿である。67の見込み部には、印花刻印がみられる。69は瀬戸美濃産志野丸皿、70・72は、瀬戸美濃産灰軸端反皿である。70は、見込み中心部に刻印があり、その周囲を輪杓ぎして釉を掻き取っている。74～88は土師器皿である。ロクロ成形で、底裏に回転糸切痕が残る。器形は、腰部でやや屈曲して、八の字上に口縁に向けて開く。66・77・79・85・88の口縁端部には、煤の付着が観察できることから、灯明具として使用された可能性が高い。78・80～84・86・87は被熱し、銅または銅滓が付着していることから、坩堝として使用された可能性が高い。89は灰軸皿である。緻密な淡黄白色の胎土を呈している。器面の調整は、高台脇から口縁部に向けて横方向の回転ヘラ削りが施されている。高台は削り出し高台で、底裏も丁寧に削ってあり、兜巾がみられない。施釉は、畳付と口縁端部内面を除き全面に施釉される。肥前産の可能性が高い。IV検は、瀬戸美濃大窯V期(16世紀末～17世紀初頭)に比定できる。

第V検出面出土土器・陶磁器(第21図90～96)

7点図化した。土4からは土師器皿(90)と内耳鍋(91)が出土している。91は、耳部は欠損し、口縁部はハの字状に開き、内面に幅の広い調整痕が1周する。93・94は、瀬戸美濃産灰軸丸皿である。93には、底面に円錐ピンの痕跡が3箇所残存している。96は瀬戸美濃産志野徳利である。外面はヘラケズリ調整され、底部には低い削り出し高台がある。92は、錆釉が施された播鉢である。瀬戸美濃産か。95は、土師器皿である。V検の年代観は、瀬戸美濃大窯IV～V期(16世紀後半)に比定される。

第Ⅵ検出面出土土器・陶磁器（第21図97）

土坑31から瀬戸美濃産灰釉丸皿（97）が出土している。底部に輪トチンの痕跡が確認できる。他に、小片で図化できないが、内耳鍋小片が数点出土している。出土遺物が少ないが、瀬戸美濃大窯Ⅳ～Ⅴ期（16世紀後半）に比定できる。

（3）B区出土土器・陶磁器

B区の調査では、戦国期から近世の検出面Ⅰ～Ⅹ検が調査され、このうち最下層のⅩ検からは出土遺物がなかったものの、Ⅰ～Ⅷ検からは土器・陶磁器が出土した。以下、出土土器の様相について、検出面ごとに記述する。

第Ⅰ検出面出土土器・陶磁器（第21図98～109）

I 検は、12点を図化している。建1からは98～100の3点出土。いずれも磁器であるが、99・100が肥前産、98は瀬戸美濃産である。98は、端反碗の底部とみられる。19世紀後半代のものか。99は、内面見込み部に松竹梅の文様があり、底裏は蛇ノ目凹形高台で中心部に渦福文がある。18世紀中頃～後半のものともみられる。100は碗蓋で、外面に捻花文が描かれている。19世紀初めか。上7から、瀬戸美濃産磁器碗（101）、土4からは土師器皿（102）が出土している。検出面からは、103の瀬戸産磁器の端反碗、104の陶器鉢が出土している。104は、外面は錆釉が下塗りされ、その上に灰釉がかけられ、高台は削り出しである。産地は不明。106は、産地不明の陶器鉢である。107～109は土師器皿である。I 検の年代は、19世紀中頃～後半と推定される。

第Ⅱ検出面出土土器・陶磁器（第21図110～112）

3点図化提示している。110は肥前産青磁碗である。111は肥前産染付碗である。内外に1条の圓線が巡る。また、破断面には漆継ぎの痕跡が観察できる。112は瀬戸美濃産鉄釉碗である。出土遺物が少なく時期決定が難しいが、18世紀後半代に比定できよう。

第Ⅲ検出面出土土器・陶磁器（第21図113～127）

計15点を図化している。建1からは、土師器皿（113）が出土。外面に墨書が僅かに残る。土1からは焙烙鍋（116）が出土。外面底部は、手持ちへら削りされる。土8からは、瀬戸美濃産壺の底部（115）、土20からは瀬戸美濃産灰釉皿（114）が出土。検出面からは、瀬戸美濃産陶器（119・121・126・127）、肥前産磁器（118・122・123）が出土している。122は底裏にハリ支えの痕跡がみられる。123は、見込み蛇ノ目釉剥ぎされ、高台端部に砂目がつく。17世紀末～18世紀前半の波佐見産とみられる。127は灰釉火入で、口縁部が敲打され、釉が剝離している。126は蓋であるが、外面に刷絵がみられる。117は、コバルト具須染付の19世紀後半代とみられる瀬戸美濃産磁器である。混入品の可能性もある。第Ⅲ検出面の時期は、17世紀後半～18世紀前半に比定される。

第Ⅳ検出面出土土器・陶磁器（第21・22図128～147）

礎石から肥前産染付皿（128）が出土。高台端部登付部分のみ釉剥ぎされ、砂目が付く。1620～30年代のものか。検出面からは磁器4点（130・135・136・142）、瀬戸美濃産陶器（136～141）が出土している。134は、漳州産染付皿である。底部高台内は露胎し、へら削りが施されていない。135は肥前産磁器の染付皿である。136は、瀬戸美濃産志野織部皿である。137・138は志野菊皿である。139・140は志野皿、141は、瀬戸美濃産鉄釉水滴である。139の見込み中央部には、印花文がみられる。143～147は土師器皿である。17世紀初頭（1630年代まで）に相当するとみられる。

第Ⅴ検出面出土土器・陶磁器（第22図148～150）

磁器はなく、陶器のみが出土している。すべて瀬戸美濃産である。148は、志野向付、149は志野端反皿、150は志野向付である。いずれも、瀬戸美濃大窯Ⅴ期（16世紀末～17世紀初頭）に比定される。

第Ⅵ検出面出土土器・陶磁器（第22図151～161）

陶器と土師器のみで、磁器の出土は認められない。陶器は、瀬戸美濃産のみ。土7からは151の瀬戸美濃産灰軸丸皿が出土。上10からは灰軸丸皿が出土しているが、登窯期の遺物のため、他の出土遺物群とは年代差がある。153は土師器火鉢である。検出面からは、志野鉄絵皿（155・157）、印花文のある皿（156）がみられる。154は、鉄軸茶入である。形態は芋子形で、被熱しており、外面には軸垂れがみられる。158～161は、土師器皿である。第Ⅵ検は美濃大窯Ⅴ期（16世紀末～17世紀初頭）に比定される。

第Ⅶ検出面出土土器・陶磁器（第22図162～166）

162・165は瀬戸美濃産志野の碗と皿である。162は被熱しており、外面の鉄絵が不鮮明になっている。瀬戸美濃大窯Ⅴ期に相当する。

第Ⅷ検出面出土土器・陶磁器（第22図167）

図化できたのは、167の碗のみ。胎土は鉄分の多い暗灰色をしており、灰軸が掛けられ、淡青緑色に発色している。16世紀末の肥前産陶器碗か。

第Ⅸ検出面出土土器・陶磁器（第22図168～169）

土坑10より2点出土している。168は、瀬戸美濃産碗の底部である。被熱しているためか、もともと掛けられていた灰軸が変質している。169は、内耳鍋の底部である。出土点数が少なく時期が判然としませんが、内耳鍋の器高が深いものであることから16世紀末頃と考えられる。

(4) B区北側拡張部

B区では、調査途中で調査区を北側に拡張した。本調査区の検出面とは、必ずしも一致しない箇所があるので、ここでは拡張部出土土器・陶磁器について、別項を設けて記述していく。

第Ⅲ検出面北側拡張部出土土器・陶磁器（第23図179～192）

土24からは、瀬戸美濃産骨茶碗が出土。183～186・188・190・191・192は磁器である。186・188・191は瀬戸美濃産磁器で、コバルト呉須により染付されている。他はすべて肥前産である。191は散蓮華、192は戸車である。

第Ⅳ検出面北側拡張部出土土器・陶磁器（第23・24図193～225）

土14から出土した193は、瀬戸美濃産染付碗である。検出面から出土した196・198・201は瀬戸美濃産染付、204は瀬戸美濃産型打ち角皿である。いずれも、19世紀後半のものである。214・215は肥前産磁器である。陶器は、瀬戸美濃産・信楽産・京都産・肥前産・在産土師器がみられる。瀬戸美濃産では、搦鉢（216・217・218）、植木鉢（219）、灯明受皿（208・209）がある。在産土師器は、皿（210～213）と、焙烙鍋（224）がある。203は、京焼の碗とみられる。206は備前産陶器皿である。187は、信楽系の壺である。

第Ⅴ検出面北側拡張部出土土器・陶磁器（第24図226～238）

226～231は磁器である。226は瀬戸美濃産磁器、227～231は肥前産染付碗である。235～238は、瀬戸美濃産の搦鉢である。12の口縁内面には、(大)の刻印がある。愛知県の大高焼か。

第Ⅵ検出面北側拡張部出土土器・陶磁器（第25図239～249）

239～241・244・245は磁器である。土11からは、瀬戸産染付碗（241）・肥前産碗（240）・蓋（244）が出土している。19世紀後半に比定される。247は、瀬戸美濃産志野向付である。

(5) 戦国時代末から近世の土師器皿

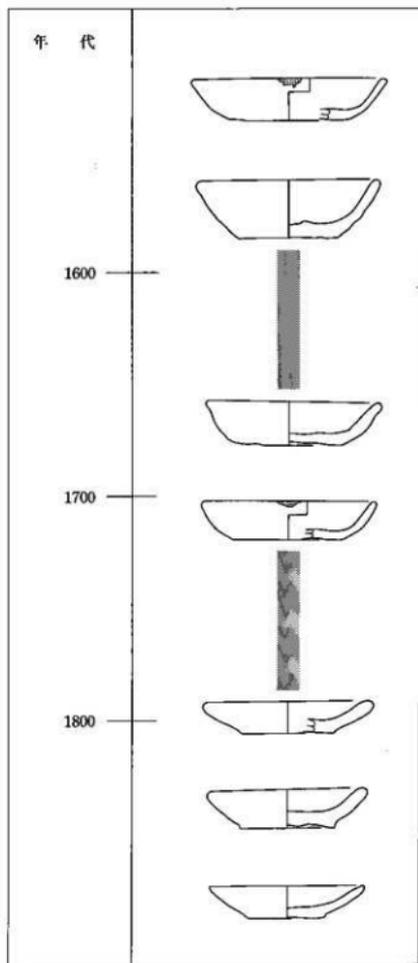
六九第4次調査では、16世紀末～19世紀後半にいたる陶磁器群と共伴して、土師器も多数出土している。土師器で特に出土量が多いのは皿で、そのほとんどの口縁部に煤が付着していることから、主として灯明皿として使用されていたものと考えられる。これらの成形技法は、すべてロクロ成形され、底面には回転糸切

り痕が観察できる。また、その器形と法量は、時期変遷の中で変化が認められるため、以下大略的な変遷を見てみたい。

土師器皿は、松木城下が形成される大竈Ⅳ～Ⅴ段階にはすでに存在しており、その後、近世を通じて普遍的に出土するものである。法量分化は特に認められないが、時期が新しくなると、口径が小さく器高が低くなる傾向にある。法量は、16世紀末段階で口径10.5cm前後、器高2.9cm前後、外傾指数72.4前後のものが、17世紀後半では、口径9.6cm前後、器高2.0cm前後、外傾指数81.2となる。19世紀中～後になると、この傾向はさらに強まり、口径9.6cm前後、器高2.0cm前後、体部の傾きはさらに強くなり、外傾指数は100となる。器厚も厚くなり、口唇部が厚く膨れる形状となる。土師器皿の16世紀末から19世紀にかけての器形の変化は、口径・器高・底径が小型化し、体部の開きが強くなる傾向にある。

3 弥生～古墳時代の土器 (第25図250～251)

A区Ⅵ検より弥生時代の高杯(250)の脚部が出土。杯部内面および外面に朱彩が施されている。B区Ⅺ検より古墳時代前期と推定される甕の頸部と胴部の2点が出土した。図化できたのは、251の1点のみ。器面には細かい刷毛目調整がなされている。胎土は、内外面ともに灰褐色を呈しており、在地産でない可能性が大きい。



第18図 土師器皿変遷図

第4表 土師器皿法量の変化

時期	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	外傾指数
16 c 末	10.0～11.4 (平均10.5)	5.4～7.0 (平均6.3)	2.3～3.4 (平均2.9)	72.4
17 c 前	9.3～10.6 (平均9.8)	5.2～6.9 (平均6.0)	2.1～3.2 (平均2.6)	73.0
17 c 後～18 c 前	8.6～10.0 (平均9.6)	5.2～6.4 (平均5.7)	2.0～2.8 (平均2.4)	81.2
19 c 中～後	8.4～10.0 (平均9.6)	5.0～6.0 (平均5.4)	1.9～2.2 (平均2.0)	100.0

註) 外傾指数は、 $\frac{(\text{口径}-\text{底径})}{2} \div \text{器高} \times 100$ で求めた。数値が高いほど、傾きが強くなることを示している。

第5章 土器・陶磁器調査表

図No.	坑名	出土地点	注記	種類	形状	径 (cm)		高さ (cm)	土質	胎土	技法・文様・形制の特徴	時期	所在年代	所在所
						口径	底径							
1	テラ-3	A I 棟 1	II 棟-005	陶器	高台	3.8		19c	灰	灰	灰	19c	瀬川	瀬川遺跡
2	テラ-2	A I 棟 1	II 棟-006	陶器	高台	3.8		19c	灰	灰	灰	19c	瀬川	瀬川遺跡
3	テラ-1	A I 棟 1	II 棟-008	陶器	高台	25.0		19c	灰	灰	灰	19c	瀬川	瀬川遺跡
4	テラ-1	A I 棟 1	II 棟-009	陶器	高台	3.6		19c	灰	灰	灰	19c	瀬川	瀬川遺跡
5	テラ-1	A I 棟 1	II 棟-002	陶器	高台	10.7		19c	灰	灰	灰	19c	瀬川	瀬川遺跡
6	テラ-2	A I 棟 1	II 棟-012	陶器	高台	4.0		19c	灰	灰	灰	19c	瀬川	瀬川遺跡
7	テラ-2	A I 棟 1	II 棟-012	陶器	高台	2.6		19c	灰	灰	灰	19c	瀬川	瀬川遺跡
8	テラ-1	A I 棟 1	II 棟-011	陶器	高台	8.1		19c	灰	灰	灰	19c	瀬川	瀬川遺跡
9	テラ-3	A I 棟 1	II 棟-011	陶器	高台	7.0		19c	灰	灰	灰	19c	瀬川	瀬川遺跡
10	テラ-4	A I 棟 1	II 棟-012	陶器	高台	25.9		19c	灰	灰	灰	19c	瀬川	瀬川遺跡
11	テラ-4	A I 棟 1	II 棟-005	陶器	高台	2.0		19c	灰	灰	灰	19c	瀬川	瀬川遺跡
12	テラ-1	A I 棟 1	II 棟-003	陶器	高台	3.1		19c	灰	灰	灰	19c	瀬川	瀬川遺跡
13	テラ-1	A I 棟 1	II 棟-005	陶器	高台	10.0		19c	灰	灰	灰	19c	瀬川	瀬川遺跡
14	テラ-2	A I 棟 1	II 棟-006	陶器	高台			19c	灰	灰	灰	19c	瀬川	瀬川遺跡
15	テラ-2	A I 棟 1	II 棟-003	陶器	高台	12.8		19c	灰	灰	灰	19c	瀬川	瀬川遺跡
16	テラ-2	A I 棟 1	II 棟-004	陶器	高台	9.2	4.2	1.7	11c-15c	灰	灰	19c	瀬川	瀬川遺跡
17	テラ-3	A I 棟 1	II 棟-006	陶器	高台	9.0		19c	灰	灰	灰	19c	瀬川	瀬川遺跡
18	テラ-4	A I 棟 1	II 棟-003	陶器	高台	11.0		19c	灰	灰	灰	19c	瀬川	瀬川遺跡
19	テラ-5	A I 棟 1	II 棟-006	陶器	高台	28.2		19c	灰	灰	灰	19c	瀬川	瀬川遺跡
20	テラ-8	A I 棟 1	II 棟-007	陶器	高台	9.8		19c	灰	灰	灰	19c	瀬川	瀬川遺跡
21	テラ-9	A I 棟 1	II 棟-011	陶器	高台	4.0		19c	灰	灰	灰	19c	瀬川	瀬川遺跡
22	テラ-9	A I 棟 1	II 棟-011	陶器	高台	6.6		19c	灰	灰	灰	19c	瀬川	瀬川遺跡
23	テラ-4	A I 棟 1	II 棟-020	陶器	高台	10.8		19c	灰	灰	灰	19c	瀬川	瀬川遺跡
24	テラ-2	A I 棟 1	II 棟-022	陶器	高台	10.0		19c	灰	灰	灰	19c	瀬川	瀬川遺跡
25	テラ-3	A I 棟 1	II 棟-022	陶器	高台	10.0		19c	灰	灰	灰	19c	瀬川	瀬川遺跡
26	テラ-5	A I 棟 1	II 棟-021	陶器	高台	11.2	3.6	2.1	19c	灰	灰	19c	瀬川	瀬川遺跡
27	テラ-1	A I 棟 1	II 棟-017	陶器	高台	6.5		19c	灰	灰	灰	19c	瀬川	瀬川遺跡
28	テラ-2	A I 棟 1	II 棟-028	陶器	高台	13.2		19c	灰	灰	灰	19c	瀬川	瀬川遺跡
29	テラ-1	A I 棟 1	II 棟-030	陶器	高台	12.2		19c	灰	灰	灰	19c	瀬川	瀬川遺跡
30	テラ-4	A I 棟 1	II 棟-037	陶器	高台	11.6		19c	灰	灰	灰	19c	瀬川	瀬川遺跡
31	テラ-5	A I 棟 1	II 棟-039	陶器	高台	9.8	3.8		19c	灰	灰	19c	瀬川	瀬川遺跡
32	テラ-6	A I 棟 1	II 棟-039	陶器	高台	9.8		19c	灰	灰	灰	19c	瀬川	瀬川遺跡
33	テラ-3	A I 棟 1	II 棟-040	陶器	高台	6.0		19c	灰	灰	灰	19c	瀬川	瀬川遺跡
34	テラ-1	A I 棟 1	II 棟-038	陶器	高台	6.0		19c	灰	灰	灰	19c	瀬川	瀬川遺跡
35	テラ-2	A I 棟 1	II 棟-039	陶器	高台	13.6		19c	灰	灰	灰	19c	瀬川	瀬川遺跡
36	テラ-1	A I 棟 1	II 棟-037	陶器	高台	8.4		19c	灰	灰	灰	19c	瀬川	瀬川遺跡
37	テラ-1	A I 棟 1	II 棟-041	陶器	高台	8.0		19c	灰	灰	灰	19c	瀬川	瀬川遺跡
38	テラ-4	A I 棟 1	II 棟-067	陶器	高台	5.2		19c	灰	灰	灰	17c-18c	瀬川	瀬川遺跡

図No.	実測番号	出土地点	注記	類別	彫形	口径	底径	高さ	容量	残存数	出土	技法・文様・彫彫の特徴	集積年代	形式名称	
80	棟-7	A1棟 輪出庫	1棟-004 土器	皿	(10.3)	(5.2)	3.6		01/10	白	口縁コナナ 胴部・内面コナナ、胴部中央部、底面中央部	17世紀	口縁コナナ		
81	棟-6	A1棟 輪出庫	1棟-004 土器	皿	(8.3)	(5.2)	3.6		01/18	黒	口縁コナナ 胴部・内面コナナ、胴部中央部、底面中央部	17世紀	口縁コナナ		
82	棟-3	A1棟 輪出庫	1棟-004 土器	皿	(11.2)	(5.4)	2.4		01/8	白	口縁コナナ 胴部・内面コナナ、胴部中央部、底面中央部	17世紀	口縁コナナ		
83	棟-10	A1棟 輪出庫	1棟-005 土器	皿	(10.6)				01/14	白	口縁コナナ 胴部・内面コナナ、胴部中央部、底面中央部	17世紀	口縁コナナ		
84	棟-12	A1棟 輪出庫	1棟-005 土器	皿	(11.4)				01/8	白	口縁コナナ 胴部・内面コナナ、胴部中央部、底面中央部	17世紀	口縁コナナ		
85	棟-9	A1棟 輪出庫	1棟-004 土器	皿	(10.6)				01/10	白	口縁コナナ 胴部・内面コナナ、胴部中央部、底面中央部	17世紀	口縁コナナ		
86	棟-4	A1棟 輪出庫	1棟-004 土器	皿	(9.6)				01/12	黒	口縁コナナ 胴部・内面コナナ、胴部中央部、底面中央部	17世紀	口縁コナナ		
87	棟-3	A1棟 輪出庫	1棟-005 土器	皿	(12.2)				01/9	白	口縁コナナ 胴部・内面コナナ、胴部中央部、底面中央部	17世紀	口縁コナナ		
88	棟-1	A1棟 輪出庫	1棟-001 土器	皿	(10.6)				01/23	黒	口縁コナナ 胴部・内面コナナ、胴部中央部、底面中央部	17世紀	口縁コナナ		
89	棟-14	A1棟 輪出庫	1棟-001 土器	皿	(10.6)				01/8	白	口縁コナナ 胴部・内面コナナ、胴部中央部、底面中央部	17世紀	口縁コナナ		
90	棟-21	A1棟 輪出庫	1棟-102 土器	皿	(26.0)				01/6	白	口縁コナナ 胴部・内面コナナ、胴部中央部、底面中央部	16世紀	口縁コナナ		
91	棟-2	A1棟 輪出庫	1棟-105 陶器	皿	(16.0)	(5.7)	2.1		01/6	黒	口縁コナナ 胴部・内面コナナ、胴部中央部、底面中央部	16世紀	口縁コナナ		
92	棟-4	A1棟 輪出庫	1棟-106 陶器	皿	(9.2)	(4.6)	1.6		01/3	白	口縁コナナ 胴部・内面コナナ、胴部中央部、底面中央部	16世紀	口縁コナナ		
93	棟-1	A1棟 輪出庫	1棟-105 陶器	皿	(10.0)	(7.0)	2.7		01/8	白	口縁コナナ 胴部・内面コナナ、胴部中央部、底面中央部	16世紀	口縁コナナ		
94	棟-1	A1棟 輪出庫	1棟-105 陶器	皿	(10.0)	(7.0)	2.7		01/8	白	口縁コナナ 胴部・内面コナナ、胴部中央部、底面中央部	16世紀	口縁コナナ		
95	棟-1	A1棟 輪出庫	1棟-105 陶器	皿	(10.0)	(7.0)	2.7		01/8	白	口縁コナナ 胴部・内面コナナ、胴部中央部、底面中央部	16世紀	口縁コナナ		
96	棟-1	A1棟 輪出庫	1棟-105 陶器	皿	(10.0)	(7.0)	2.7		01/8	白	口縁コナナ 胴部・内面コナナ、胴部中央部、底面中央部	16世紀	口縁コナナ		
97	棟-31	A1棟 輪出庫	1棟-113 陶器	皿	(10.0)	(5.5)	1.5		01/5	黒	1/6	白	口縁コナナ 胴部・内面コナナ、胴部中央部、底面中央部	16世紀	口縁コナナ
98	棟-128	A1棟 輪出庫	1棟-005 陶器	皿	(9.8)	(4.3)	1.5		01/5	黒	1/6	白	口縁コナナ 胴部・内面コナナ、胴部中央部、底面中央部	16世紀	口縁コナナ
99	棟-127	A1棟 輪出庫	1棟-005 陶器	皿	(9.8)	(4.3)	1.5		01/5	黒	1/6	白	口縁コナナ 胴部・内面コナナ、胴部中央部、底面中央部	16世紀	口縁コナナ
100	棟-126	A1棟 輪出庫	1棟-005 陶器	皿	(10.0)	(9.5)			01/8	白	口縁コナナ 胴部・内面コナナ、胴部中央部、底面中央部	16世紀	口縁コナナ		
101	棟-130	B1棟 輪出庫	1棟-004 土器	小皿	(6.2)	(3.2)	5.0		01/5	黒	1/4	白	口縁コナナ 胴部・内面コナナ、胴部中央部、底面中央部	19世紀	口縁コナナ
102	棟-41	B1棟 輪出庫	1棟-003 土器	皿	(7.2)	(4.6)	(1.8)		01/8	白	口縁コナナ 胴部・内面コナナ、胴部中央部、底面中央部	19世紀	口縁コナナ		
103	棟-131	B1棟 輪出庫	1棟-011 磁器	碗	(10.7)				01/8	白	外面草文、口縁内面草文	19世紀	碗		
104	棟-1	B1棟 輪出庫	1棟-011 磁器	鉢		(10.8)			01/8	白	外面草文、口縁内面草文	19世紀	鉢		
105	棟-129	B1棟 輪出庫	1棟-002 陶器	皿		(4.3)			01/8	白	外面草文、口縁内面草文	19世紀	鉢		
106	棟-14	B1棟 輪出庫	1棟-008 陶器	研木鉢	(16.8)				01/8	黒	口縁コナナ 胴部・内面コナナ、胴部中央部、底面中央部	19世紀	研木鉢		
107	棟-11	B1棟 輪出庫	1棟-007 土器	皿	(10.0)	(5.4)	(1.9)		01/14	黒	口縁コナナ 胴部・内面コナナ、胴部中央部、底面中央部	19世紀	研木鉢		
108	棟-13	B1棟 輪出庫	1棟-007 土器	皿	(8.0)	(5.6)	(2.2)		01/5	黒	口縁コナナ 胴部・内面コナナ、胴部中央部、底面中央部	19世紀	研木鉢		
109	棟-12	B1棟 輪出庫	1棟-008 陶器	研木鉢	(9.2)	(6.0)	(2.6)		01/8	白	口縁コナナ 胴部・内面コナナ、胴部中央部、底面中央部	19世紀	研木鉢		
110	棟-3	B1棟 輪出庫	1棟-004 土器	皿	(9.2)				01/8	白	口縁コナナ 胴部・内面コナナ、胴部中央部、底面中央部	19世紀	研木鉢		
111	棟-2	B1棟 輪出庫	1棟-014 陶器	丸皿	(9.2)				01/8	白	口縁コナナ 胴部・内面コナナ、胴部中央部、底面中央部	19世紀	研木鉢		
112	棟-1	B1棟 輪出庫	1棟-014 陶器	丸皿		5.4			01/8	白	口縁コナナ 胴部・内面コナナ、胴部中央部、底面中央部	19世紀	研木鉢		
113	棟-51	B1棟 輪出庫	1棟-028 土器	皿	(6.2)				01/2	黒	口縁コナナ 胴部・内面コナナ、胴部中央部、底面中央部	19世紀	研木鉢		
114	棟-201	B1棟 輪出庫	1棟-028 陶器	皿	(16.0)				01/8	黒	口縁コナナ 胴部・内面コナナ、胴部中央部、底面中央部	19世紀	研木鉢		
115	棟-1	B1棟 輪出庫	1棟-020 陶器	研木鉢	(16.0)				01/12	白	外面下部草文	17世紀	研木鉢		
116	棟-11	B1棟 輪出庫	1棟-019 土器	研木鉢	(16.0)				01/12	白	外面下部草文	17世紀	研木鉢		
117	棟-133	B1棟 輪出庫	1棟-005 陶器	研木鉢	(6.8)				01/14	黒	口縁コナナ 胴部・内面コナナ、胴部中央部、底面中央部	17世紀	研木鉢		
118	棟-136	B1棟 輪出庫	1棟-005 陶器	研木鉢	(4.7)				01/14	黒	口縁コナナ 胴部・内面コナナ、胴部中央部、底面中央部	17世紀	研木鉢		
119	棟-8	B1棟 輪出庫	1棟-008 陶器	小皿	(6.8)				01/5	黒	口縁コナナ 胴部・内面コナナ、胴部中央部、底面中央部	17世紀	研木鉢		
120	棟-6	B1棟 輪出庫	1棟-005 陶器	研木鉢	(11.2)				01/6	黒	口縁コナナ 胴部・内面コナナ、胴部中央部、底面中央部	17世紀	研木鉢		
121	棟-5	B1棟 輪出庫	1棟-005 陶器	研木鉢	(16.4)				01/12	白	外面上部2条平行溝	17世紀	研木鉢		
122	棟-134	B1棟 輪出庫	1棟-005 陶器	研木鉢	(8.3)				01/12	黒	口縁コナナ 胴部・内面コナナ、胴部中央部、底面中央部	17世紀	研木鉢		
123	棟-135	B1棟 輪出庫	1棟-005 陶器	研木鉢	(15.1)	(8.3)	3.2		01/14	白	外面草文、底面草文、口縁内面草文	17世紀	研木鉢		

図No.	東照寺号	出土地点	注記	彫刻	彫形	口径	高さ	重(kg)	保存	出土	出土年代	調査地
124	棟-1	B1棟 佛出座	Ⅱ棟940	土器	皿	9.4	5.6	2.3	口徑底底	19c	在座	
125	棟-3	B1棟 佛出座	Ⅱ棟935	土器	鉢	15.4			口徑底底	19c	在座	
126	棟-10	B1棟 佛出座	Ⅱ棟941	陶器	蓋	9.3			口徑底底	17c底	在座	
127	棟-11	B1棟 佛出座	Ⅱ棟935	陶器	火入	(11.2)	(11.4)	9.1	口徑底底	19c	在座	
128	138	B1棟 佛出座	Ⅱ棟938	土器	皿		(5.8)		口徑底底	17c	不明	
129	上-51	B1棟 土5	Ⅱ棟462	陶器	蓋	3.0	1.2		口徑底底	不明	不明	
130	144	B1棟 佛出座	Ⅱ棟939	陶器	蓋		(3.7)		口徑底底	18c	不明	
131	棟-19	B1棟 佛出座	Ⅱ棟933	陶器	蓋	(10.6)		3.2	口徑底底	18c	不明	
132	棟-23	B1棟 佛出座	Ⅱ棟932	陶器	蓋				口徑底底	17c底	不明	
133	棟-29	B1棟 佛出座	Ⅱ棟970	陶器	蓋	(9.6)			口徑底底	17c底	不明	
134	棟-34	B1棟 佛出座	Ⅱ棟971	陶器	皿		(9.8)		口徑底底	17c底	不明	
135	143	B1棟 佛出座	Ⅱ棟966	陶器	皿		(7.4)		口徑底底	17c底	不明	
136	棟-33	B1棟 佛出座	Ⅱ棟975	陶器	皿	13.6	7.5		口徑底底	17c底	不明	
137	棟-6	B1棟 佛出座	Ⅱ棟956	陶器	蓋	(13.4)			口徑底底	17c底	不明	
138	棟-20	B1棟 佛出座	Ⅱ棟967	陶器	蓋	(12.6)	(2.8)	(2.8)	口徑底底	17c底	不明	
139	棟-30	B1棟 佛出座	Ⅱ棟991	陶器	皿		(7.2)		口徑底底	16c底	不明	
140	棟-24	B1棟 佛出座	Ⅱ棟998	陶器	女用	(9.6)	(4.8)		口徑底底	17c初	不明	
141	棟-27	B1棟 佛出座	Ⅱ棟973	陶器	水筒	2.2	3.0	2.8	口徑底底	17c初	不明	
142	棟-21	B1棟 佛出座	Ⅱ棟982	陶器	小瓶		2.8		口徑底底	16c底	不明	
143	棟-4	B1棟 佛出座	Ⅱ棟976	土器	皿	10.2	6.6	2.6	口徑底底	18c	不明	
144	棟-7	B1棟 佛出座	Ⅱ棟974	土器	皿	(10.8)	(6.2)	(2.8)	口徑底底	17c初	在座	
145	棟-5	B1棟 佛出座	Ⅱ棟964	土器	皿	(16.6)	(6.2)	(3.0)	口徑底底	16c底	在座	
146	棟-11	B1棟 佛出座	Ⅱ棟966	土器	皿	(8.8)			口徑底底	17c初	在座	
147	棟-5	B1棟 佛出座	Ⅱ棟966	土器	皿	(10.4)	(6.2)	(3.2)	口徑底底	16c底	在座	
148	棟-5	B1棟 佛出座	Ⅱ棟110	陶器	向付	(13.2)			口徑底底	16c底	在座	
149	棟-3	B1棟 佛出座	Ⅱ棟113	陶器	反取	(11.1)	(6.0)	2.6	口徑底底	16c底	在座	
150	棟-1	B1棟 佛出座	Ⅱ棟968	陶器	向付	(14.0)			口徑底底	16c底	在座	
151	上-2	B1棟 土7	Ⅱ棟124	陶器	皿	9.8	4.45	2.4	口徑底底	16c底	不明	
152	上-1	B1棟 土10	Ⅱ棟128	陶器	皿	(6.6)	(3.2)	2.3	口徑底底	16c底	不明	
153	上-6	B1棟 土7	Ⅱ棟124	土器	鉢				口徑底底	16c底	不明	
154	棟-4	B1棟 佛出座	Ⅱ棟137	陶器	火入		3.4		口徑底底	16c底	不明	
155	棟-2	B1棟 佛出座	Ⅱ棟145	陶器	女用	(14.7)	8.1	3.3	口徑底底	16c底	不明	
156	棟-5	B1棟 佛出座	Ⅱ棟138	陶器	皿		(6.4)		口徑底底	16c底	不明	
157	棟-9	B1棟 佛出座	Ⅱ棟151	陶器	皿		(7.8)		口徑底底	16c底	不明	
158	棟-9	B1棟 佛出座	Ⅱ棟150	陶器	皿	(10.2)	(7.2)		口徑底底	16c底	不明	
159	棟-8	B1棟 佛出座	Ⅱ棟162	土器	皿	(10.1)	(5.0)	2.7	口徑底底	16c底	不明	

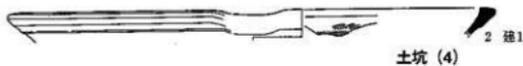
図No.	発掘番号	出土地点	注記	種類	形状	口径	高さ	重 (g)	容量	流行度	出土	特徴	年代	所在地
226	246	B.V. 棟 検出品	V 棟 111	陶器	餅鉢	(26.7)				口1/20	新茶色	鉄錆	18c 末	瀬戸窯
227	247	B.V. 棟 検出品	V 棟 102	陶器	餅鉢	(34.0)				口1/2	茶色	鉄錆	18c 末	瀬戸窯
228	248	B.V. 棟 検出品	V 棟 103	陶器	餅鉢	(34.0)				口1/2	茶色	鉄錆	18c 末	瀬戸窯
229	249	B.V. 棟 1-11	V 棟 132	磁器	小鉢	6.2	2.7	2.9		口0.4底底	白	白磁釉	19c 末	瀬戸窯
240	167	B.V. 棟 子 11	V 棟 135	磁器	皿	(10.4)				口1/4	白	白付	19c 末	瀬戸窯
241	165	B.V. 棟 上 11	V 棟 133	磁器	皿	(5.1)				底0.13底1/2	原灰口	茶付	19c 末	瀬戸窯
242	1-3	B.V. 棟 子 9	V 棟 127	陶器	皿	(10.6)	(5.8)	2.2		口1/4底1/8	原灰	長石釉	16c 末	瀬戸窯
243	1-5	B.V. 棟 子 9	V 棟 126	陶器	皿	(10.2)	(6.4)	2.3		口1.73底1/3	原灰	長石釉	16c 末	瀬戸窯
244	166	B.V. 棟 子 11	V 棟 133	磁器	鉢	8.8		3.0		口0.7	白	白付	19c 末	瀬戸窯
245	168	B.V. 棟 検出品	V 棟 154	磁器	皿	(4.2)				底0.25底1/4	白磁釉	茶付	19c 末	瀬戸窯
246	163	B.V. 棟 検出品	V 棟 128	陶器	鉢小	(8.7)				底1/2	茶白	茶付	19c 末	瀬戸窯
247	1-3	B.V. 棟 検出品	V 棟 130	陶器	内付	(11.5)		2.5		口1.73底0.7/8	乳白	灰釉	不明	瀬戸窯
248	1-7	B.V. 棟 検出品	V 棟 154	十割	皿	(10.0)				口1/8	茶白	長石釉	16c 末	瀬戸窯
249	162	B.V. 棟 検出品	V 棟 156	陶器	餅鉢	(33.4)				口1/8	茶白	鉄錆	16c 末 17c 初	瀬戸窯

学生一占埋時代

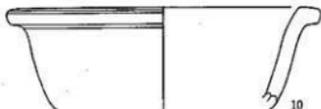
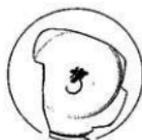
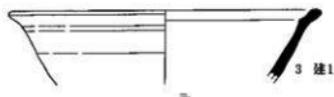
250	B. 棟 1	B.V. 棟 検出品	A.V. 棟 318	京牛	京牛					底面一部	青灰色	内面・高台部製草履、露部・底面ヨコナデ面製草履、本釘		
251	B. 棟 1	B.V. 棟 検出品	A.V. 棟 327	土器	土器		(4.3)				淡灰褐色	外面・内面ハケス		

A区

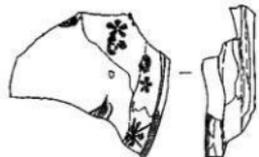
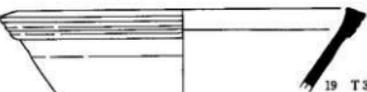
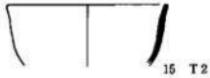
I 検
建 (1~3)



検出面 (5~10)



トレンチ (11~20)



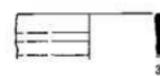
溝 (28・29)



II 検
土坑 (21~27)



検出面 (30~36)

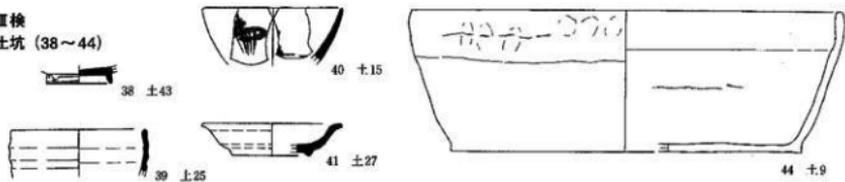


拂土 (37)

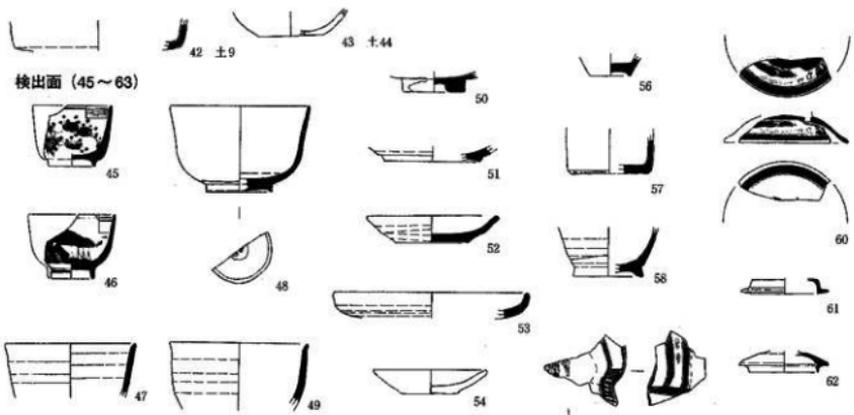


第19図 土器・陶磁器 (1)

Ⅲ検
土坑 (38~44)



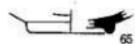
検出面 (45~63)



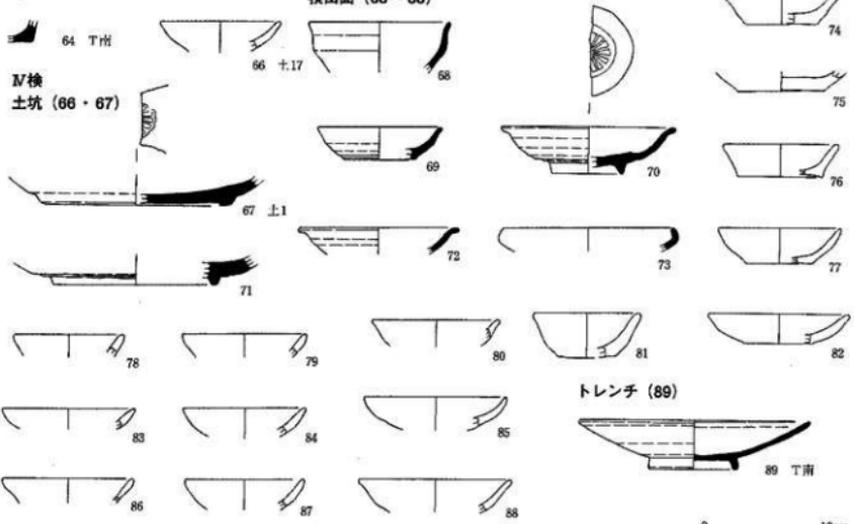
トレンチ (64)



排土 (65)



検出面 (66~88)



トレンチ (89)



第20図 土器・陶磁器 (2)



V 検
土坑 (90・91)



90 土4



91 土4

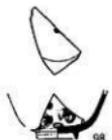
V 検
土坑 (97)



97 土31

B 区

I 検
達 (98~100)



98 達1

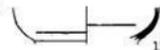


99 達1

II 検
検出面 (110~112)



110



111



112

III 検
達 (113)



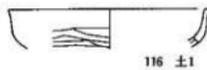
113 達3



114 土20



115 土8



116 土1

検出面 (117~127)



117



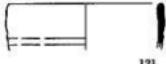
118



119



120



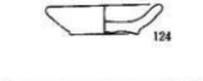
121



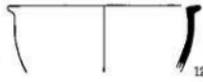
122



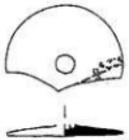
123



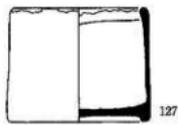
124



125



126



127

IV 検
礎石 (128)



128

土坑 (129)



129 土5



132

検出面 (130~147)



130



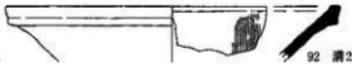
131



133



溝 (92)



92 溝2

検出面 (93~96)



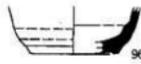
93



94



95



96

検出面 (103・104)



100 礎1

土坑 (101・102)



101 土7

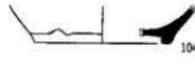


103

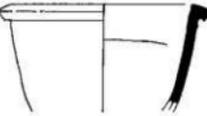
トレンチ (105~109)



105 T南東



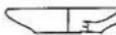
104



106 T北



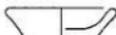
102 土4



107 T北



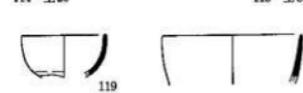
108 T北



109 T北



115 土8



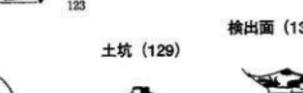
120



124



125



土坑 (129)



129 土5



132



130

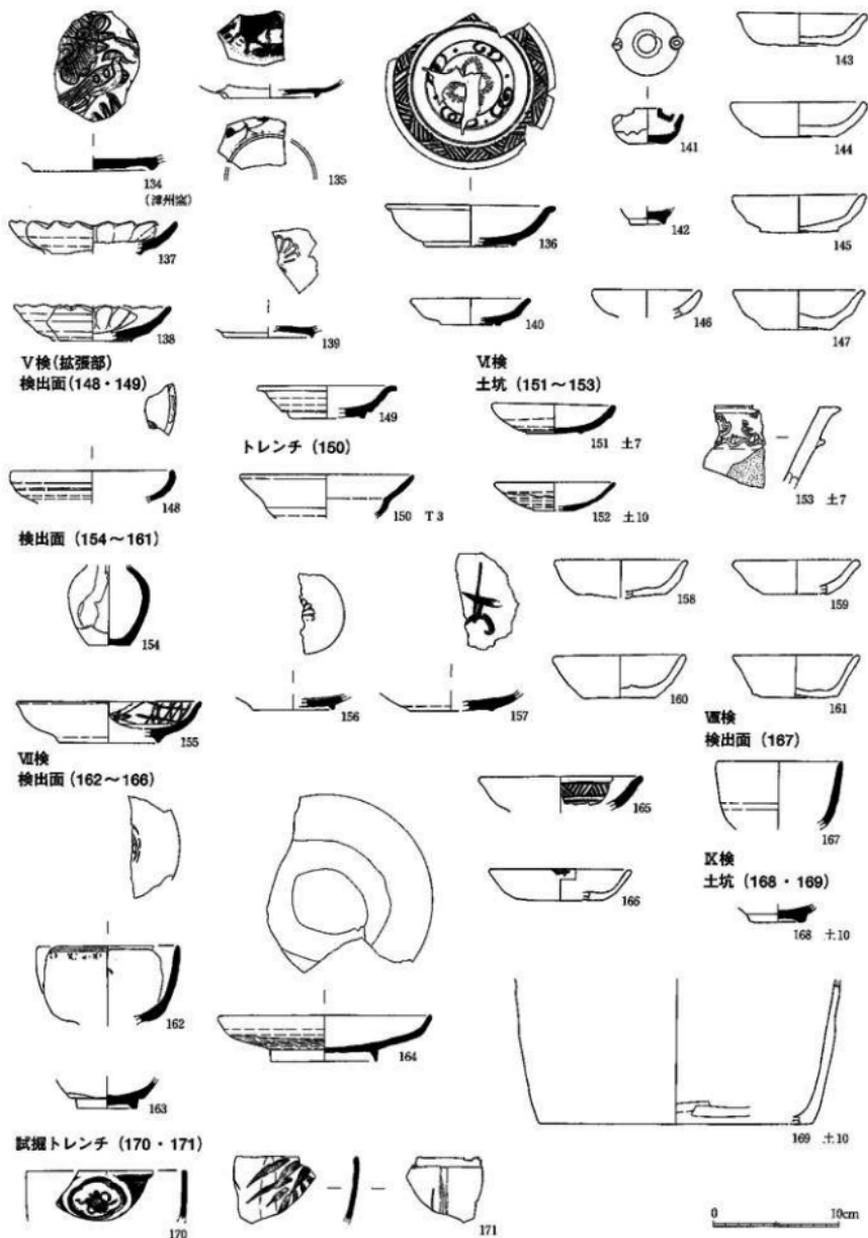


131



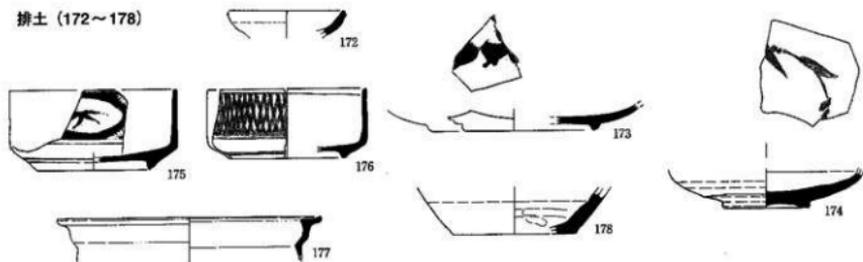
133

第21図 土器・陶磁器 (3)



第22図 土器・陶磁器 (4)

辨土 (172~178)



B区 拡張部

Ⅲ検

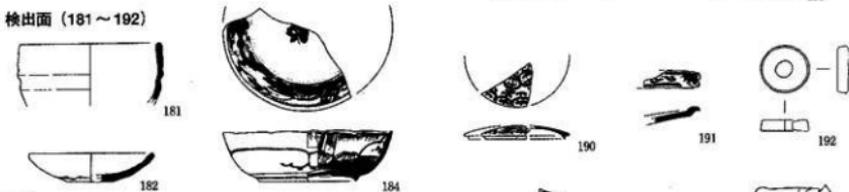
木桶トレンチ (179)



土坑 (180)

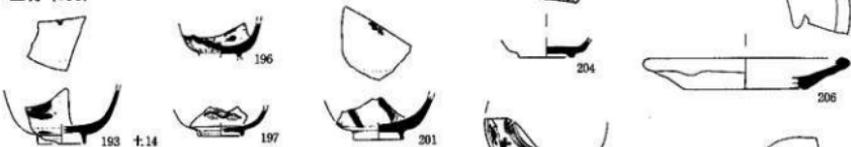


検出面 (181~192)

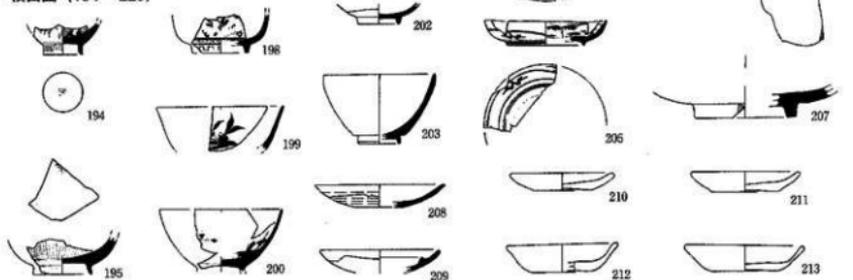


Ⅳ検

土坑 (193)

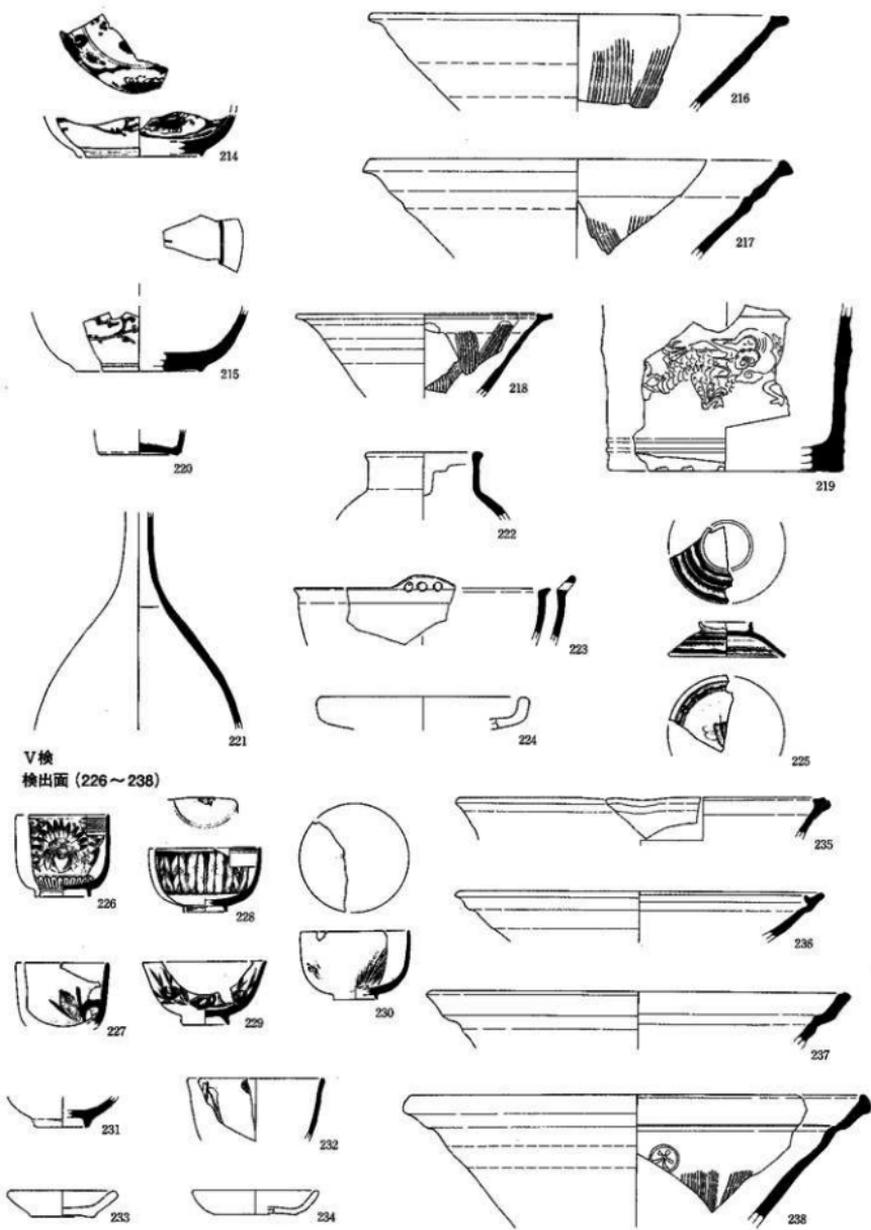


検出面 (194~225)



第23図 土器・陶磁器 (5)

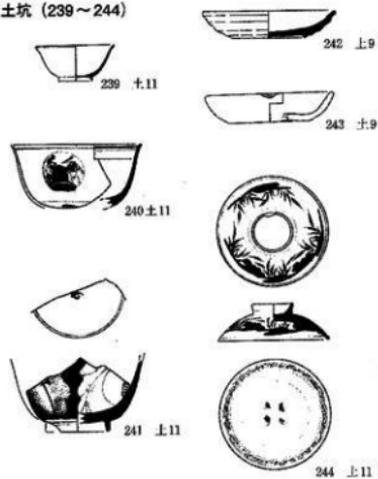
0 10cm



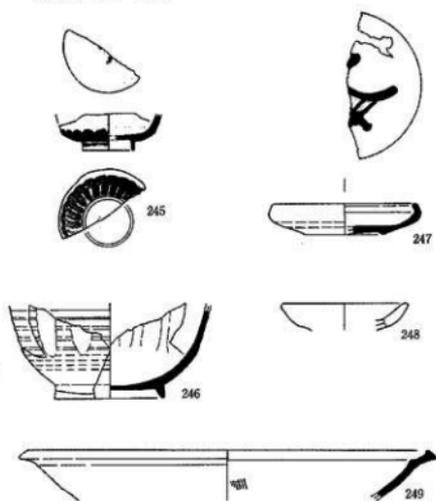
V検
検出面 (226~238)

第24図 土器・陶磁器 (6)

Ⅴ検
土坑 (239～244)



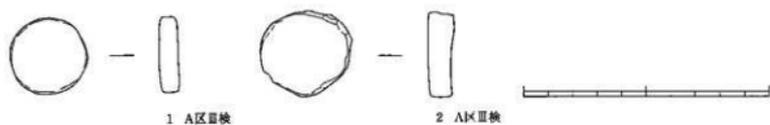
検出面 (245～249)



弥生～古墳時代 (250・251)



土製品



第25図 土器・陶磁器 (7)・土製品

2節 木器

A区から21点、B区から26点、合計47点の木製品が出土した。主な木製品は戦国期から江戸期にかけての遺物だが、B区からは古墳時代の木製品が出土した。器種別に見ると、荷札14点、日用品では箸4点、椀、曲物、栓、箒各1点、装飾品では下駄5点、櫛1点その他・用途不明品などである。以下、各地区の検出面ごとに概要を記述する。また、文字資料の解釈に関しては、まとめて後述する。

A区

第I検出面（第26図1）

荷札が1点のみ出土した。荷札の下端は細く加工されている。

第II検出面（第26図2～13、第27図14～15）

2～11の荷札は土坑11から出土した。下端が斜めに加工され、荷に刺したのだろう。2と11には縄で縛ったような圧痕がある。12も土坑11から出土し、黒漆地に蒔絵が施されている。出土する箸の大多数が白木であるのに対して珍しい例である。13～15は土坑23から出土した用途不明の板状製品で、両面に斜めの工具痕が多数ある。各々周囲に釘穴があるが、13は釘の頭が遺存している箇所が見られる。14・15は墨書で、14は遺物としては完形だが、上部の墨書が途中で切れており、部材が組み合わさる大型製品の一部分だったと考えられる。

第IV検出面（第27図16）

16は前述の荷札と内容・形態を異にし、桶等の側板の表面を平坦に加工して再利用されたと考えられる。

第V検出面（第27図17～19、第28図20）

19・20は1枚の板から2枚の圈を削り出した連圈下駄である。19は後圈以後が欠損しているが、長円形を呈し、前壺の周囲に指頭圧痕が残っている。20は前壺以前と横緒孔の横が欠損しているが、隅丸長方形だったと考えられる。調査で出土した下駄の横緒孔は、いずれも後圈の前にあり、使用した痕跡が見られる。

第VI検出面（第28図21）

21は隅丸長方形の連圈下駄で完形である。表面に数箇所の擦傷痕と指頭圧痕が見られる。

B区

古墳時代の遺物

以下の遺物は城下町の遺構面より下層の第Ⅱ検出面で発見され、古墳時代前期のものと考えられる。現段階では、松本平最古の木製品である。第Ⅱ検出面は水分の豊富な低湿地帯で、劣化しやすい木製品が良好な状態で遺存していた。取り上げ時に、地山に含まれる腐植物が大量に付着していた。

建築部材（第30図44、45）

44は長さ270.8cmで一端を鉛筆状に削り、中央部と片端を凹状に加工されていた。遺物は長野市川田条里遺跡の屋根材（古墳時代中・後期）に類似し、臼井直之氏（長野県埋蔵文化財センター）によれば、44は竪穴住居の垂木で凹部を梁に掛け、先端を地面に刺して使用したという。45は長さ100.0cmで先端を尖らせ、片端も加工された。使用箇所は不明だが建築材と考えられる。

用途不明品（第29図40～43、第30図46、47）

42、43は自然木と考えられるが、工具で切断した痕跡がある。43には、広範囲に被熱痕が見られる。46は長さ64.4cmの板材で、先端を薄く加工している。47は、側面に凹状の切込みが2箇所ある細長い板状製品で、穴が3箇所貫通している。

戦国時代以降の遺物

第I検出面（第28図22、23）

22は箒の穂の一部で、針金で束ねられている。毛の残存状態は良好である。23は楔だが、先端を切り落

とされている。

第Ⅲ・Ⅳ検出面 (第28図24~26)

第Ⅲ検出面出土は24のみ。角張って整形され、黒漆で内外面を塗られている。破片ではあるが、残存状態は良い。25・26は第Ⅳ検出面出土。25は丁寧に成形され、径0.3~0.4cmの留釘が3箇所残っている。用途は不明である。26は周囲に0.2cm×0.2cmの木の留釘4箇所と釘穴1箇所が残り、欠損部にも釘が打たれていたと推測される。荷札と考えられるが墨書は不明である。

第Ⅴ検出面 (第28図27~29) (第29図30~35)

27は包丁の柄と考えられ、木口に1.2cm×0.4cm×2.1cmの茅の入る溝が掘り込まれ、持ち易く加工されている。28は土坑9から他破片7点と共に出土した白木の箸で、粗く加工されている。29は先端を細く加工されるが、表面や一端が欠損して用途不明である。30も箸だが、長さ34.4cmの大箸は真魚箸と考えられ、上部に径0.3cmの穴が貫通し、表面には黒漆が残る。31も荷札と考えられるが、墨書は片面のみである。32は左半分が欠損しているので墨書の解釈をできず、用途不明である。33・34は連樹下駄で隅丸長方形を呈する。33は台の後面に斜めに線刻されて中央には工具痕があり、34は前壺周囲に指頭圧痕が見られ、後歯の摩擦が進んでいる。双方の裏面には加工痕が明瞭に残っている。35は30より短い通常の箸より大型で、先端には被熱痕がある。

第Ⅵ検出面 (第29図36)

36の表面は非常に滑らかに加工され、歯はすべて欠損している。

第Ⅶ検出面 (第29図37~39)

37は両端を工具で切断されているが、他に加工の痕跡はない。38と39は溝2から出土し、38の用途は不明である。39は曲物の円板と考えられ、径0.5cmの穴が2箇所開いている。

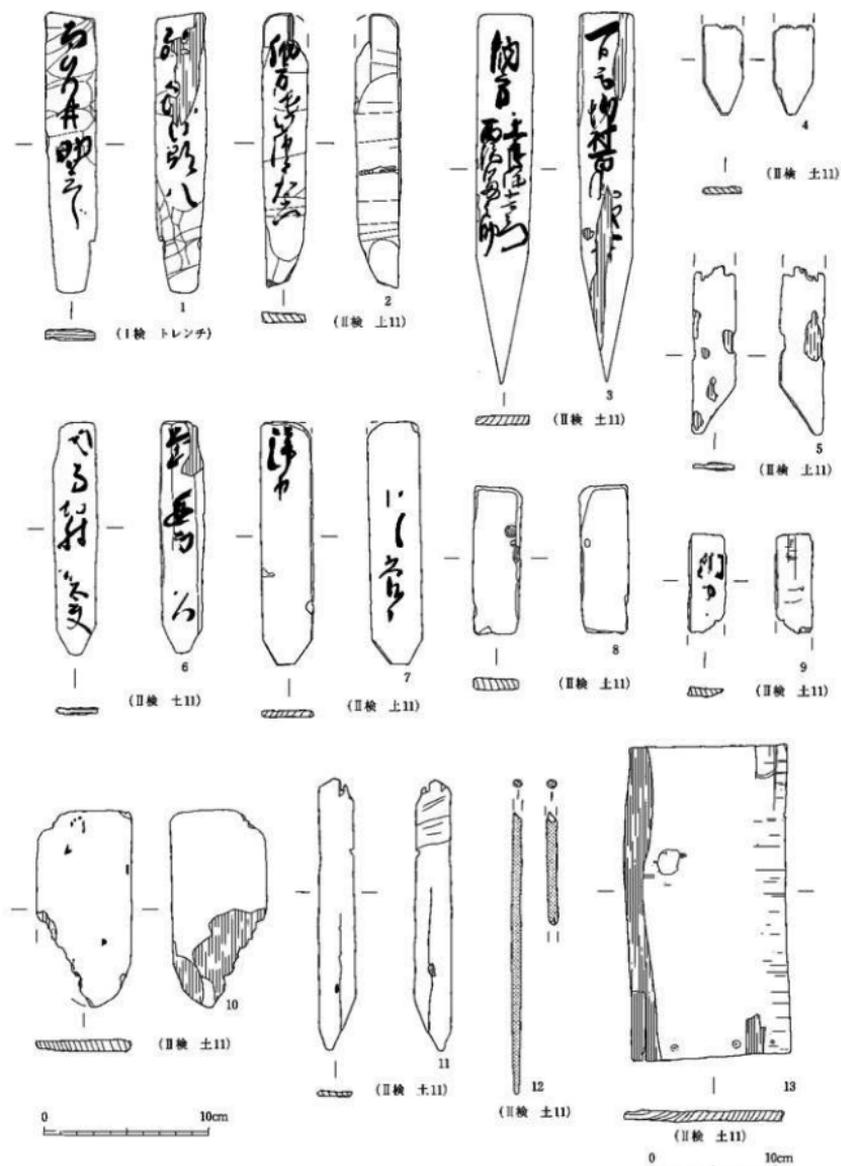
文字資料 (第7表)

解釈された文字資料について、まとめて記述する。1は欠損により解釈困難であるが、裏面に人名らしき文字が読める。2・3・6・9は「納方」と書かれ、米納入の荷札と考えられる。荷札は表に納方役人の名前、裏に出納地・氏名が記載されている。3の出納地は一日市場村は、現在の南安曇郡三郷村に残る地名である。4・5・7・8・10・11は墨書をほとんど残していないが、2・3・6・9と同じ土坑11から出土し、形態も類似するので同種の荷札と考えられる。14は品物の数量を記載しているが、品名は不明である。15も荷に関連した板であろう。文字は合羽刷りされており、印刷方法から判断して近代以降の遺物と考えられる。16も荷札で屋号が書かれていた。17は表に「納方」とあるが、第Ⅴ検出面(16世紀後半~末)から出土し、土蔵・蔵役所に関連するか不明である。26は字の欠損が著しく内容は不明である。31は小松船司宛てに中山道の賢川宿から運ばれた荷札である。当時は中馬による輸送が発達しており、31も中馬により運ばれた可能性がある。小松船司は、「嘉永七年三月改家中名前付図」(1854)の調査地該当場所にみられる武上名で、出土した土坑10が江戸後期の土坑と推測される。

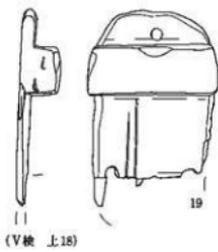
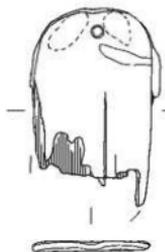
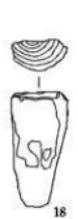
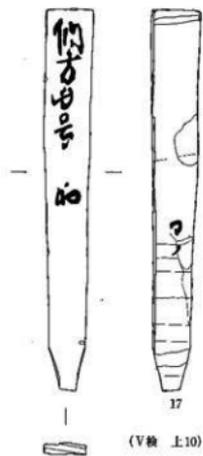
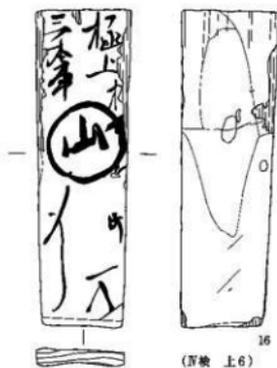
まとめ

木製品を器類別に見ると、荷札が最も多く発見された。A区からまとめて出土した荷札の大半は「嘉永七年三月家中名前付図」(1854)の土蔵、蔵役所に関連する遺物と考えられる。出土した荷札によって、B区は絵図の小松船司宅と一致することが判明し、中山道の賢川との流通も実証された。その他の文字資料は六九町が商業取引に関係した場所だったことを示唆しているが、詳しくは分らず、今後の課題である。他の遺物については点数が少なく、他の調査区の出上遺物と併せて検討する必要がある。

A区 (1~21)



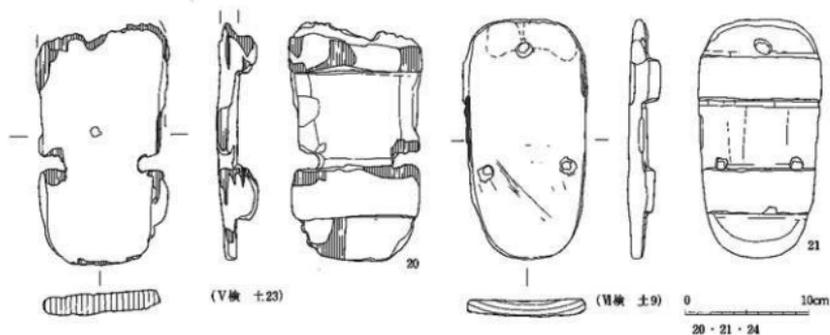
第26図 木製器 (1)



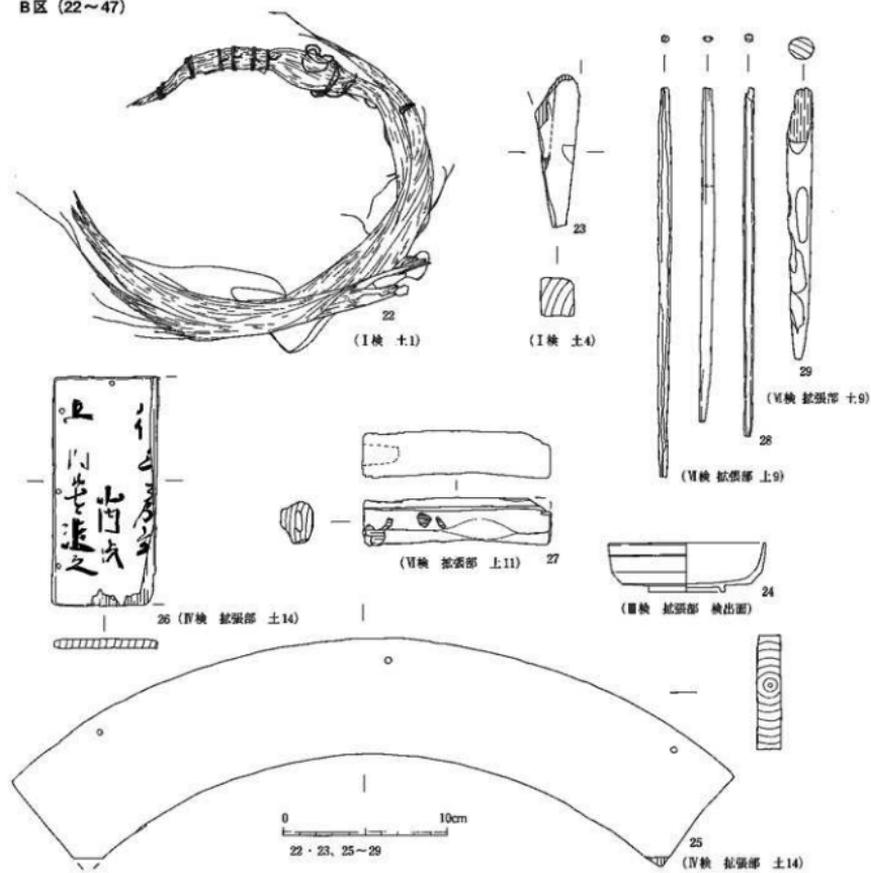
0 10cm
14 · 15 · 19

0 10cm
16 · 17 · 18

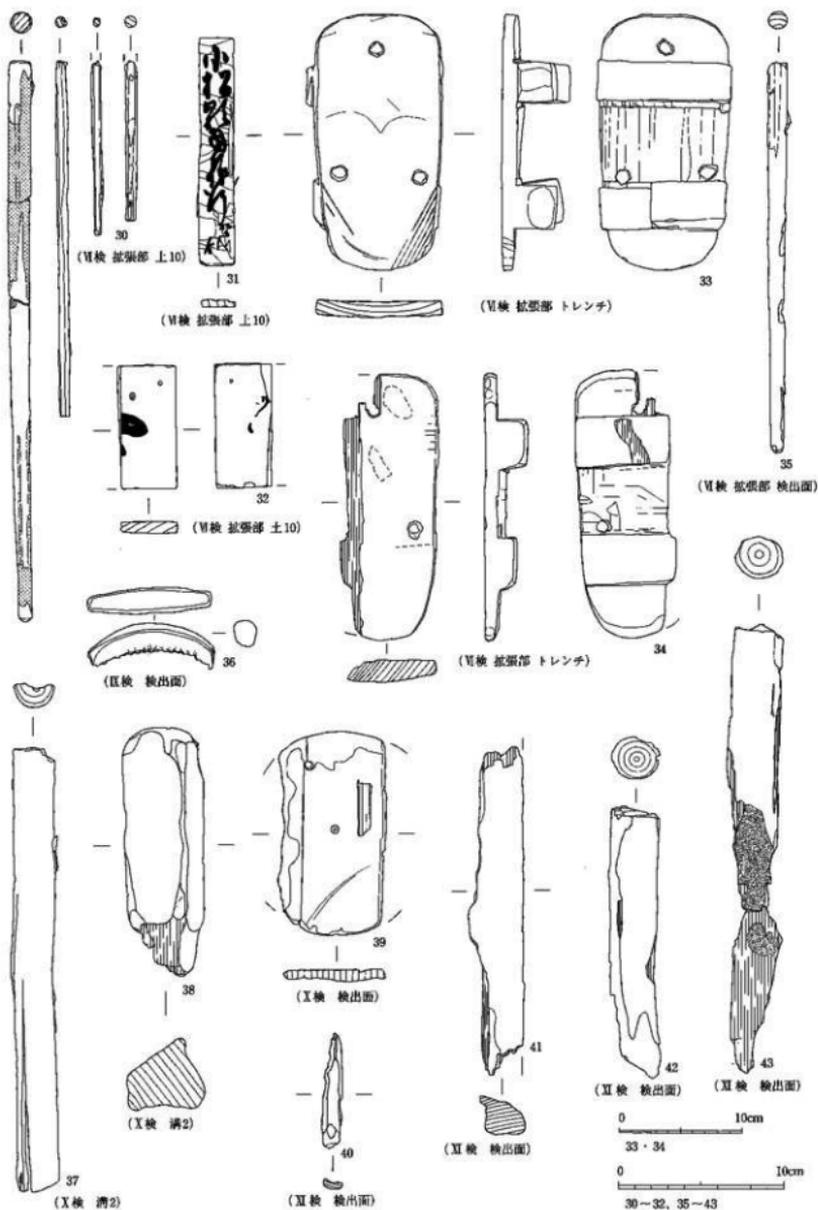
第27図 木製器 (2)



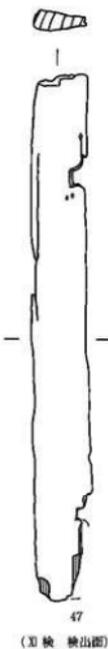
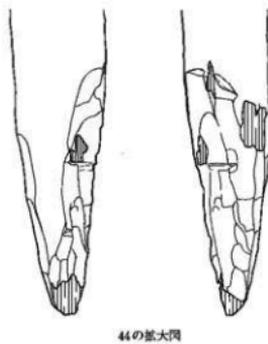
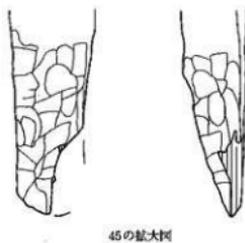
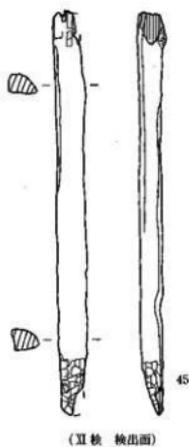
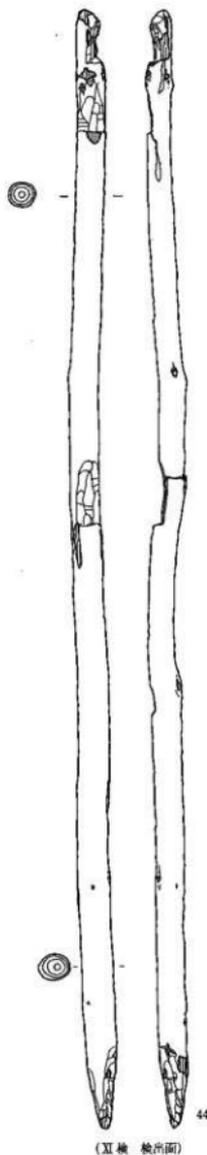
B区 (22~47)



第28図 木製器 (3)



第29図 木製器 (4)



第30図 木製器 (5)

3節 石器 (註)

本遺跡では当初石器の回収は行わない方針であったが、結果的に (1) 研磨等多数回の物理的接触による加工が加わる、(2) 黒曜岩・火成岩など明らかに他から持ち込んだと思われる石材を使用する、(3) 砥石・石印など用途が容易に推定できる道具に酷似する、という条件のいずれかを満たす物は回収した。総点数は94点、うちトレンチ、検出面等遺構以外から出土したものが87点を占める。三次元座標記録率が10%に満たず、回収基準も発掘担当者の裁量に依存しているため、一般的な遺跡から出土する一般的な石器に比して例外的な遺物であり、数量的な解析に耐えうるデータではないことをお断りしておく。

11は板状に加工された粘板岩で、中央からやや端寄りに直径約3mmの正円形の穴が穿たれている。近世期防塞用に使われたとされる温石に類似する。26、34は石英安山岩による砥石状石器だが、共に背面に櫛目状の沈線痕が見られる。この特徴は本町4次調査で出土した群馬県甘楽郡南牧村産の砥石と推定される砥石群に類似する。本町出土の砥石群は未使用であったが、26、34には使用痕が認められる。QuAn01 (20,34)は兩個体がそれぞれB地区拡張部のⅢ検、Ⅵ検から出土しており、この地点での検出面決定に疑義を呈する。23は石灰岩による石印と推定される。刻書は第31図左から表面が「成王」、裏面が「彈琴対山月」、頂面が「並」と判読できるが定かではない。側面の刻書は不明である。B地区Ⅺ検出面より出土した48～97の43点はそのほとんどが折れ面等加工痕のない礫、あるいは自然剥落のみの礫片だが、Ⅺ検出面が植物遺体を多く含む黒色腐植土層のため、何らかの原因で他から流入した遺物として回収した。うち安山岩が23点、硬砂岩が8点を占める。調査終了間際で三次元座標記録が無いのが惜しまれるが、An02 (81,82,84,88,91)・An03 (90,92,95)と2例の接合例が見られる。

今回の調査では恣意的な回収基準にもかかわらず8例の接合例を確認し、うち3例で剥離・分割順序を特定することができた。近世においても石器の回収基準を明確にし、二次元座標を記録した上で接合すれば、遺構等の相対年代決定の判断に有効であると考えられる。

[註]

近世においては「石製品」という呼称が一般的ではあるが、48～97のような礫片と23のような「石製品」を分かつ基準を判断し難いため、全て「石器」で統一した。

[主要引用・参考文献]

太田主郎「石梁」『平瀬遺跡Ⅱ』2000 松本市教育委員会
竹内尚長「松本城下における礫石流通の一事例」『松本市史研究 第九号』1999 松本市

第8表 遺構略号一覧

遺構略号	遺構名
SC	溝状穴
SU	溝状遺構
SK	土坑
TC	クワッド
TT	トレンチ

第9表 器種略号一覧

器種略号	器種名	定義
C	石核	剥離産物の産物としての剥離核が認められる個体
D	剥片	剥離産物の剥片としての剥離面が認められる個体
DP	剥片石核	剥離産物の産物としての剥離核が認められる個体
MP	剥離産物ある剥片	剥離産物の剥離核が認められる剥片
PF	礫	礫・礫片・礫片石核・剥片・剥片石核のいずれの面も認められない個体
PT	礫片	自然面による剥離が認められる個体
PTC	礫片石核	折り取りもしくは折れの剥離が認められる個体
PTD	礫片剥片	折り取りもしくは折れの剥離が認められ、剥離により剥離した個体
PL	礫石印	一面に捺印痕跡が認められる。もしくは捺印痕跡により凸面の形成された凸面
PLC	礫石印剥片	一面に捺印痕跡が認められるか、もしくは捺印痕跡により凸面の形成された凸面
PLD	礫片剥片	剥離・剥片・まれには剥離剥片でも認められる個体
WS	砥石状石器	平ら面に研磨痕跡が認められたか、もしくは研磨技術により平ら面の形成された石器
SL	硬砂岩礫	いびつな形

第10表 石材略号一覧

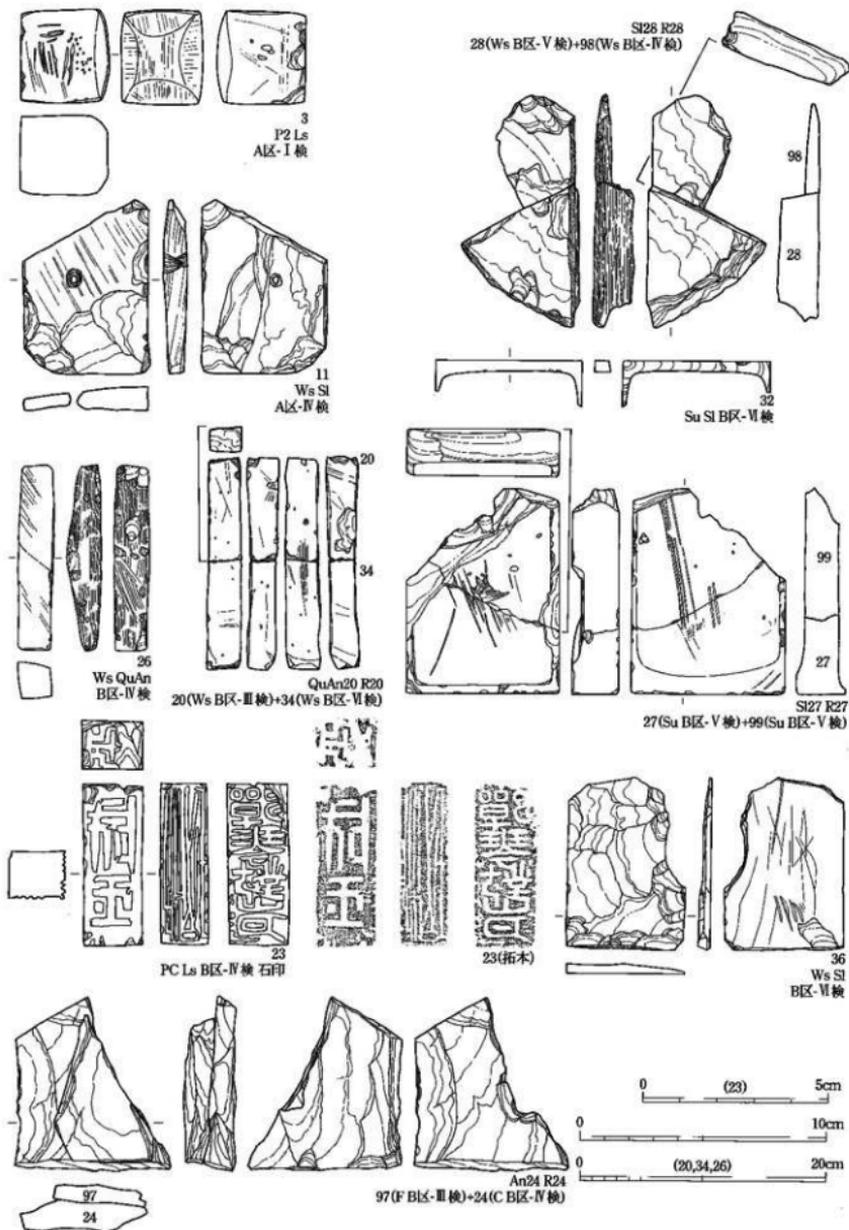
石材略号	石材名
An	安山岩
Do	凝結玄武岩
CoAn	凝結玄武岩
TuSa	輝石安山岩
HsA	硬砂岩
Sa	砂岩
Si	頁岩
MeTt	凝結粘板岩
Hu	凝結粘板岩
Cl	粘板岩
Ch	チャート
HsAn	輝石安山岩
Qu	石英
La	石灰岩
QuAn	石英安山岩

第11表 A地区石材単位器種組成

石材略号	C	D	DP	MP	PF	PT	PTC	PTD	PL	PLC	PLD	WS	SL
An													
Do													
TuSa			1										
HsA				1									
Sa					1								
MeTu						1							
Tu							1						
Cl								1					
Ch									2				
Qu		1											
La											1		
QuAn		1											

第12表 B地区石材単位器種組成

石材略号	C	D	DP	MP	PF	PT	PTC	PTD	PL	PLC	PLD	WS	SL	計
Qu	1	1												2
Do														3
CoAn														3
HsA														12
Sa														7
Sh														9
Si														6
Ch														3
HsAn														1
Qu														1
La														1
QuAn														3
計	2	2	1	1	2	2	7	1	1	1	1	1	1	37



第31图 石器

第4節 金属器

今回の調査ではA地区47点、B地区82点合計して129点の金属器を回収した。そのうち銭貨は39点。銭貨を除いた90点の中から、比較的残存状態の良いものを選択して実測を行い、本報告書に実測図を掲載した。A地区出土の遺物が22点、B地区出土の遺物が34点、合計56点を第32・33図に掲載した。銭貨については実測を行わず表に記載するに留めた。出土した銭貨のうち、寛永通寶については、字体によって古寛永と新寛永に大別して記載した。寛永通寶の他に、本遺跡では中国銭も多く出土している。これらについては中国における初鋳年を記載したが、中国で鋳造されたものであるか、日本で模倣して鋳造したものであるかは不明である。また、雁首銭と呼ばれる煙管の火皿部を叩き潰して平たくしたのも出土している。これは、銭箱に混ぜて使ったとする説が一般的で、19世紀には通用銭として扱われていたといわれている註1)。以下、第17表に銭貨について、第18表に実測図を掲載した遺物について記載する。なお遺物の材質については正確な材質の判別が難しいため、磁気に反応するものを鉄とし、緑青の認められるものについては銅もしくは銅を含む合金と記述した。註1) 都立学校遺跡調査会 『白鳥2 都立白鳥高校埋蔵文化財発掘調査報告書』1990

第17表 銭貨一覧表

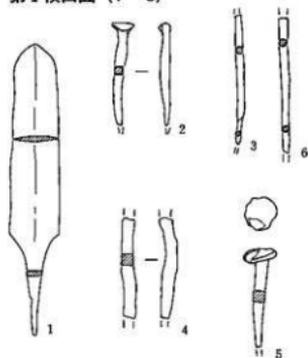
No.	貨幣名	書体	背面の文字	検出面	出土地点	初鋳年	径 (mm)	備考
1	寛永通寶		なし	A区Ⅰ検	検出面	1668	21.7	ほぼ完形、やや厚折、新寛永
2	寛永通寶		なし	A区Ⅱ検	土10	1625	22.4	完形、背面の穿孔とその縁がずれる、古寛永
3	寛永通寶		なし	A区Ⅱ検	溝3	1668	22.7	完形、新寛永
4	雁首銭		なし	A区Ⅱ検	検出面	不明	長径17.7、短径15.2	完形
5	寛永通寶		なし	A区Ⅱ検	Ⅲ検掘り下げ中出土	1668	21.0	完形、新寛永
6	寛永通寶		なし	A区Ⅲ検	検出面	1625	22.7	完形、古寛永
7	寛永通寶		なし	A区Ⅲ検	建2	1668	22.6	完形、新寛永
8	寛永通寶		文	A区Ⅲ検	検出面	1668	23.1	完形、新寛永
9	寛永通寶		なし	A区Ⅲ検	検出面	1668	23.3	完形、新寛永
10	雁首銭		なし	A区Ⅲ検	建2	不明	長径18.9、短径17.9	完形
11	□□□寶		なし	A区Ⅲ検	検出面	不明	21.1	完形、摩滅大
12	□□□□		なし	A区Ⅳ検	溝1	不明	20.7	1/5欠、摩滅大
13	□□□□		なし	A区Ⅴ検	土8	不明	20.6	完形、摩滅大
14	元豐通寶	行	なし	A区Ⅴ検	溝2	1078(北宋)	21.3	完形、摩滅大
15	洪武通寶		なし	A区Ⅴ検	検出面	1368(明)	18.8	完形
16	永樂通寶		なし	A区Ⅴ検	検出面	1408(明)	22.4	完形
17	元祐通寶	行	なし	A区	検出面	1093(北宋)	21.6	完形
18	寛永通寶		なし	A区	溝土	1668	21.9	完形、新寛永
19	寛永通寶		なし	B区Ⅰ検	建1	1668	21.7	完形、新寛永
20	元祐通寶	篆	なし	B区Ⅱ検	検出面	1093(北宋)	21.7	完形
21	寛永通寶		なし	B区Ⅱ検	検出面	1668	22.5	完形、新寛永
22	開元通寶		なし	B区Ⅲ検	検出面	621(唐)	22.4	完形
23	淳化元寶	草	なし	B区Ⅲ検	検出面	990(北宋)	22.1	完形
24	皇宋通寶	真	なし	B区Ⅲ検	検出面	1038(北宋)	22.2	完形、摩滅大
25	元祐通寶	篆	なし	B区Ⅳ検	検出面	1093(北宋)	21.8	完形
26	嘉定通寶		十	B区Ⅳ検	検出面	1208(南宋)	22.5	完形
27	洪武通寶		なし	B区Ⅳ検	検出面	1368(明)	21.3	完形
28	永樂通寶		なし	B区Ⅳ検	検出面	1408(明)	22.8	完形
29	寛永通寶		なし	B区Ⅳ検	検出面	1408(明)	21.0	完形
30	寛永通寶		なし	B区Ⅳ検	検出面	1625	22.4	完形、厚折、古寛永
31	寛永通寶		なし	B区Ⅳ検	検出面	1625	22.2	完形、古寛永
32	雁首銭		なし	B区Ⅳ検	検出面	不明	長径17.4、短径15.0	完形
33	雁首銭		なし	B区Ⅳ検	検出面	不明	長径20.0、短径16.4	完形
34	寛永通寶	文		B区並強部Ⅳ検	検出面	1668	23.6	1/10欠、新寛永
35	寛永通寶		なし	B区Ⅴ検	検出面	1668	22.2	完形、新寛永
36	開元通寶		不明	B区Ⅴ検	検出面	621(唐)	22.7	完形、摩滅大
37	祥符通寶		なし	B区Ⅴ検	検出面	1009(北宋)	22.0	一部欠
38	皇宋通寶	真	なし	B区Ⅴ検	検出面	1068(北宋)	21.9	完形
39	熙寧元寶	真	なし	B区Ⅴ検	検出面	1068(北宋)	24.0	完形

第18表 金属器一覧 (銭貨を除く)

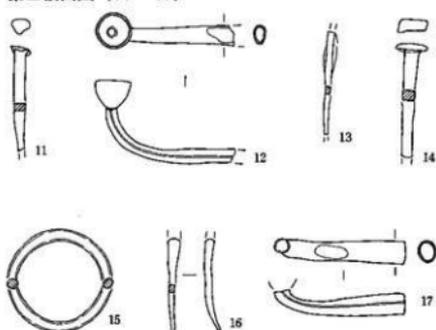
図No.	地区	検出面	出土地点	材質	器種	備考
1	A	I 検	溝1	鉄	槍先?	
2	A	I 検	検出面	鉄	釘	脚部先端欠損。
3	A	I 検	検出面	鉄	不明	断面形の丸い棒状。一端が細くなっている。両端欠損。
4	A	I 検	検出面	鉄	不明	断面形の四角い棒状。両端欠損。
5	A	I 検	検出面	鉄	釘?	頭部は丸く。部欠損。脚部の断面形は四角。
6	A	I 検	トレンチ	鉄	不明	断面形の丸い棒状。両端欠損。
7	A	II 検	土11	鉄	不明	鉤状を呈すが両端欠損。
8	A	II 検	検出面	鉄	釘	脚部先端欠損。
9	A	II 検	検出面	鉄	不明	断面形の四角い棒状。両端欠損。
10	A	II 検	検出面	鉄	釘	脚部先端欠損。
11	A	III 検	建1	鉄	釘?	頭部は不正形。脚部先端欠損。
12	A	III 検	上9	銅または銅を含む合金	煙管	火皿、雁首が出土。火皿に穿孔あり。雁首の一部に叩打痕あり。
13	A	III 検	土24	鉄	不明	断面形の四角い棒状。両端欠損。
14	A	III 検	土24	鉄	釘	脚部先端欠損。
15	A	III 検	検出面	鉄	不明	外径42mm、内径34mmの筒状。断面形は丸い。錆び目なし。
16	A	III 検	検出面	鉄	不明	上端欠損。
17	A	III 検	検出面	銅または銅を含む合金	煙管	雁首のみ出土。一部に叩打痕あり。
18	A	IV 検	土6	鉄	釘	脚部先端欠損。
19	A	IV 検	土6	鉄	釘	脚部先端欠損。
20	A	IV 検	検出面	鉄	楔?	先端欠損。
21	A	IV 検	検出面	銅または銅を含む合金	把手	
22	A	V 検	検出面	鉄	刀子	
23	B	I 検	土1	鉄	釘	
24	B	I 検	検出面	銅または銅を含む合金	不明	幅6mm程の棒状の金属を楕円形に丸め、繋いだもの。
25	B	I 検	土1	鉄	釘	脚部先端欠損。
26	B	II 検	検出面	鉄	不明	上端欠損。
27	B	III 検拡張部	検出面	銅または銅を含む合金	煙管	火皿、雁首が出土。雁首は一部欠損。雁首の一部に叩打痕あり。
28	B	III 検拡張部	検出面	銅または銅を含む合金	煙管	雁首のみ出土。
29	B	III 検拡張部	検出面	鉄	釘	脚部先端欠損。
30	B	III 検拡張部	粘土範囲	鉄	釘	脚部先端欠損。
31	B	IV 検	検出面	銅または銅を含む合金	煙管	火皿、雁首が出土。雁首は一部欠損。雁首の一部に叩打痕あり。
32	B	IV 検	検出面	鉄	不明	幅6mm程の環状。両端欠損。
33	B	IV 検	検出面	不明	目貫?	環の模様か?
34	B	IV 検	検出面	鉄	不明	断面形の四角い棒状。両端欠損。
35	B	IV 検	検出面	鉄	釘	脚部先端欠損。
36	B	IV 検拡張部	検出面	鉄	不明	両端欠損。
37	B	IV 検拡張部	検出面	鉄	釘	脚部先端欠損。
38	B	IV 検拡張部	検出面	鉄	釘	脚部先端欠損。
39	B	IV 検拡張部	検出面	鉄	釘	
40	B	IV 検拡張部	検出面	鉄	釘	
41	B	IV 検拡張部	検出面	銅または銅を含む合金	不明	
42	B	IV 検拡張部	検出面	鉄	不明	両端欠損。
43	B	IV 検拡張部	検出面	鉄	不明	両端欠損。
44	B	IV 検拡張部	検出面	鉄	釘	脚部先端欠損。
45	B	V 検	検出面	鉄	釘?	
46	B	V 検	検出面	鉄	不明	上端欠損。
47	B	V 検	検出面	鉄	釘	脚部先端欠損。赤色化している。
48	B	V 検	検出面	銅または銅を含む合金	煙管	火皿、雁首が出土。雁首の一部に叩打痕あり。
49	B	V 検	検出面	鉄	包丁?	
50	B	VI 検	検出面	鉄	不明	幅6mm程の環状。両端は離れている。
51	B	VI 検	検出面	鉄	不明	両端欠損。
52	B	VI 検拡張部	検出面	鉄	釘	脚部先端欠損。
53	B	VI 検拡張部	検出面	銅または銅を含む合金	不明	
54	B	VI 検拡張部	土11	鉄	包丁?	木製の柄の付いた刃物。
55	B	VI 検拡張部	検出面	鉄	鏃?	
56	B	VI 検拡張部	土10	鉄	火箸	脚部先端欠損。

A地区出土遺物 (1~22)

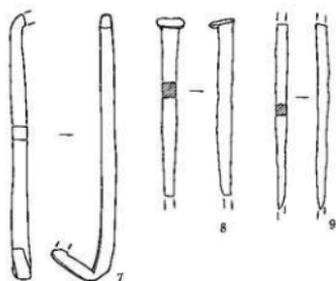
第I検出面 (1~6)



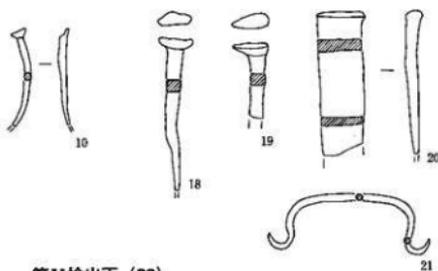
第II検出面 (11~17)



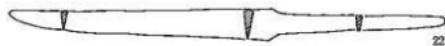
第II検出面 (7~10)



第IV検出面 (18~21)

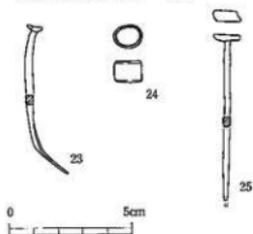


第V検出面 (22)

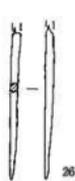


B地区出土遺物 (23~56)

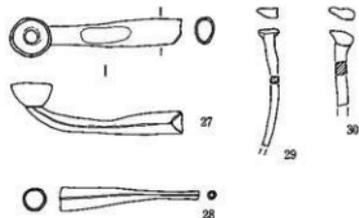
第I検出面 (23~25)



第II検出面 (26)



第III検出面拡張部 (27~30)

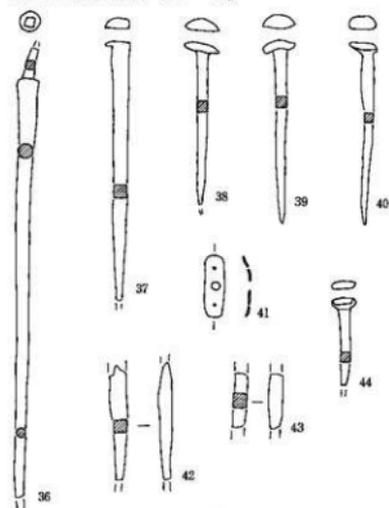


第32図 金属器

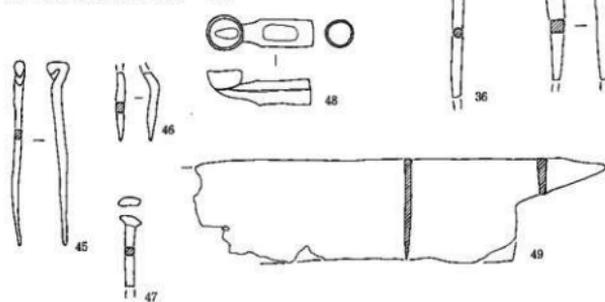
第Ⅳ検出面 (31~35)



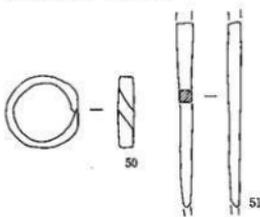
第Ⅳ検出面拡張部 (36~44)



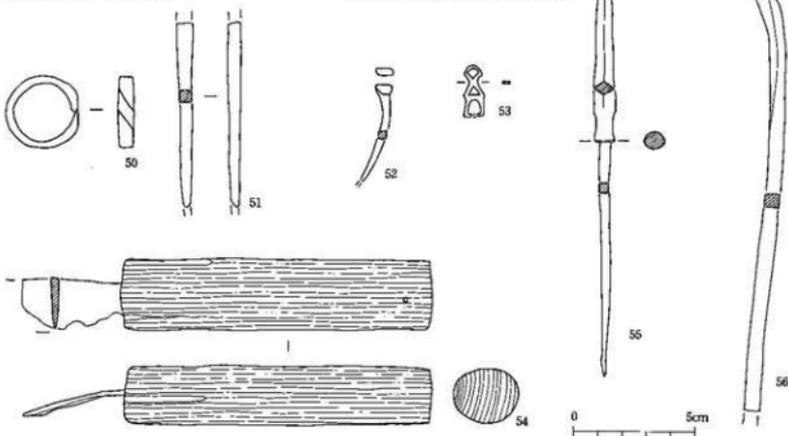
第Ⅴ検出面拡張部 (45~49)



第Ⅵ検出面 (50、51)



第Ⅵ検出面拡張部 (52~56)



第33図 金属器

5章 付編1

今回の調査では、B地区において第16層～第23層までの土壌サンプルを採取し、これらについて植物遺体の分析及び結果報告の執筆を信州大学農学部の上直人博士に依頼した。その結果を以下に記載する。

松本城下町跡六九第4次B地区16～23層における植物遺体の分析

信州大学農学部 上直人

目的

松本平における古墳時代の植生および作物栽培はほとんど判っていない。そこでその情報を植物遺体によって知ろうとした。

方法

現生の花粉などが混入しないように採集された9層の土壌試料に含まれるイネ科の機動細胞のケイ酸体（プラント・オパール）と花粉について、光学顕微鏡で調査した。試料に蒸留水を加えて攪拌した後に、ピペットでスライドグラスに滴下し、写真撮影した。撮影されたプラント・オパールの形状を測定した（図1）。ひとつの地層あたり、約30枚撮影し、各種類の出現頻度を計算した。形状が典型的でないものは過誤を避けるためにイネとしては計数しなかった。

また、近代のイネ品種を栽培して収穫後に茎葉部を乾燥後に裁断し、予備灰化の後にマッフルで500℃、2時間かけて灰化し、比較対照のためにプラント・オパールを検鏡し、撮影・計測した（図2）。

結果

- 1) 図2に代表的な写真を示した。各地層に最も多く認められたのは、6と7のようなヨシであった。また、イネのプラント・オパールが見出された。
- 2) 地層別の出土状況を示したのが図3である。確認した総数が地層によって異なるために出現頻度で表した。22層でイネの出現率が高く、地層による差が明瞭に見られた。また、イネとイヌビエの出現率とアカマツ花粉の出現は同調する傾向が見られた。
- 3) イネのプラント・オパールは亜種レベルで形状が異なり、かなり高い精度で*Indica*と*Japonica*を判別できることが報告されている。そこで、その基準となる形状を計測し、地層別に平均値を示した。最も理解しやすいプロポーション（横/縦比）を示す $c/(a+b)$ は21b層と22層で小さく、地層によって出土したものの形状が異なることが示された。この値はあくまでも平均値であり、22層ではかなり多様であった（図1の12と17を比較参照）。さらに比較対照するために、近代の代表的な品種である赤毛とIR8の形状と比較すると、両品種の特徴を有するものが22層などには潜在していることが確認された（たとえば12や13と18[*Japonica*]、14や17と25[*Indica*]を比較参照）。
- 4) そこで、計測平均値をもとに亜種の判別関数による推計を実施した（表2）。その結果、19、20、21b、22層では、判別値が明らかに低く、*Indica*の特徴を有し、それより上の層では*Japonica*の特徴が示された。

考察

松本の六九4次B地区の地層断面の植物遺体の調査の結果、その地層の該当する古墳時代には多くのヨシが生育し、ある時代に一時的に稲作が行われていたと推察された。また比較的古い時代に*Japonica*だけでなく*Indica*の混入したイネ系統が栽培されていたことが示唆された。さらに稲作が行われていた時期にはアカマツやイヌビエが見出され、周囲の植生が攪乱されていたと考えられた。

参考文献

- 佐藤洋一郎・藤原宏志・宇田津徹朗(1990) イネの*indica*および*japonica*の機動細胞にみられるケイ酸体の形状および密度の差異, 育種学雑誌40: 495-504.
- 王 才林・宇田津徹朗・藤原宏志(1996) 中国イネの亜種判別における機動細胞珪酸体形状と樹の形態・生理形質の関係, 育種学雑誌46: 61-66.

図1 プラント・オバールの形状の計測



図3 プラント・オバールから見た種組成

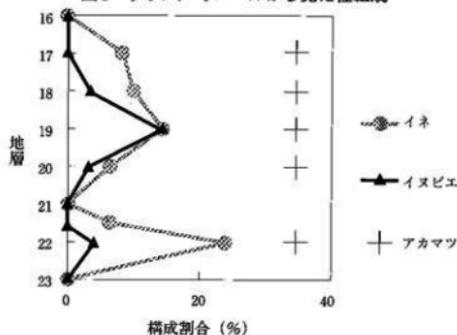


表1 イネのプラントオバールの形状

地層	形状(μm)						形状係数	
	縦長			横長	側長			
	n	a	b	a+b	c	d	b/a	c/(a+b)
16	0							
17	1	14.6	10.4	25.0	22.9	2.1	0.71	0.92
18	3	15.3	10.4	25.7	25.0	4.5	0.68	0.97
19	1	12.5	12.5	25.0	22.9	4.2	1.00	0.92
20	2	11.5	16.7	28.1	26.0	4.7	1.45	0.93
21a	0							
21b	1	11.8	23.2	35.0	27.6	4.2	4.2	0.79
22	8	11.9	18.9	30.8	26.8	3.0	3.0	0.87
23	0							

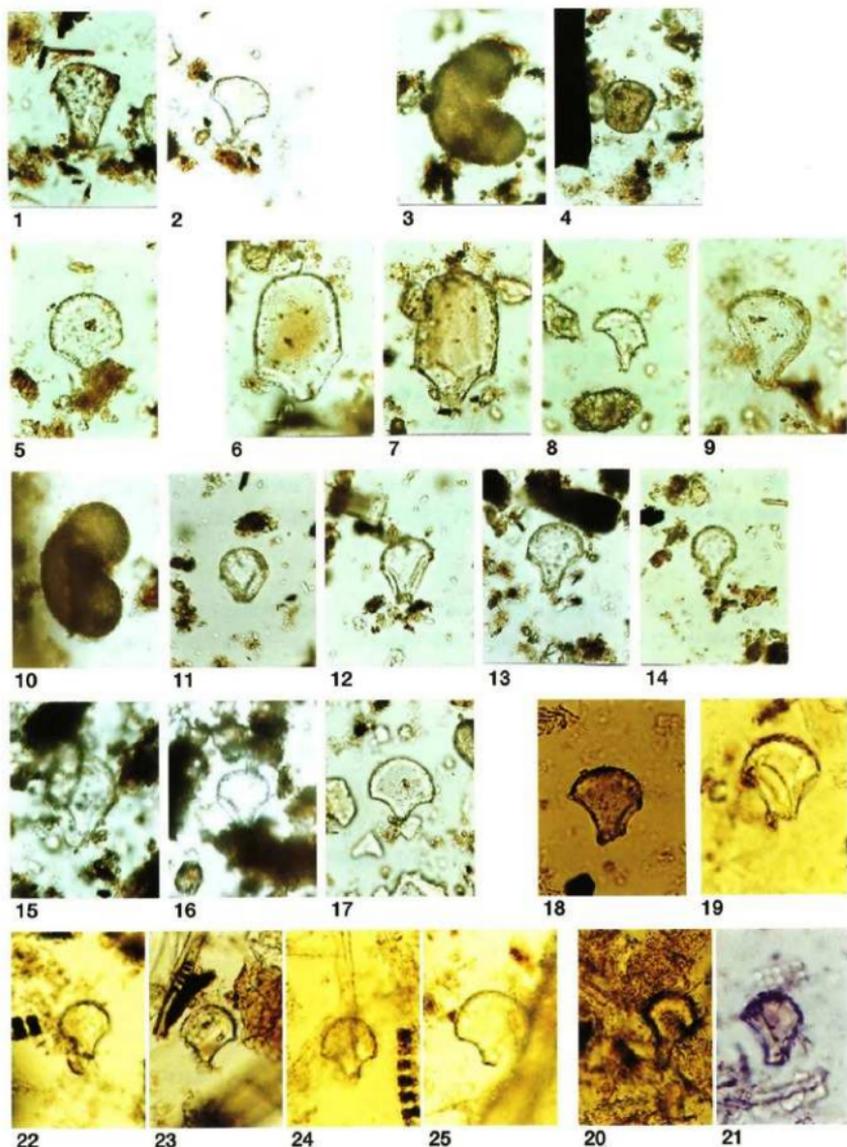
表2 イネのプラントオバールによる亜種の判別

地層	形状				亜種判別値 Z1(佐藤ら, 1990)
	縦長 (μm) a+b	横長 (μm) c	側長 (μm) d	形状係数 b/a	
16					
17	25.0	26.8	2.1	0.71	-0.4
18	25.0	28.2	4.5	0.71	-0.4
19	25.0	28.3	4.2	1.00	-1.8 *
20	28.1	30.2	4.7	1.45	-3.2 *
21a					
21b	25.0	29.4	4.2	1.00	-1.8 *
22	31.1	28.3	3.0	1.58	-3.1 *
23					
参考					
赤毛 (Japanica)	25.6	20.1	3.0	0.66	0.1
IR8 (Indica)	20.3	18.7	2.7	0.89	-2.2 *

Z1判別関数: $Z1 = 0.049 \cdot (a+b) - 0.019 \cdot c + 0.197 \cdot d - 4.792 \cdot (b/a) - 2.614$

ただしdは真横からの正確な測定が困難なため、縦長と同様と仮定。

*: Z1 < -0.5 であるため、Indicaに判別されたケース



1~2; 18層 イネ 3~4; 19層 3/アカマツ花粉、4/イヌビエ 5; 20層 イネ 6~9; 21b層 6~7/ヨシ、他はイネ
 10~17; 22層 10/アカマツ花粉、他はイネ 18~21; 参考資料/Japonica品種 赤毛(1999年信州大学産)
 22~25; 参考資料/Indica品種 IR8(1999年信州大学産)

図2 出土したプラント・オパールと花粉

6章 付編2

今回の調査ではB地区第Ⅻ検出面において木器が出土した。同検出面では古墳時代前期のものと同定される土器が出土しており、木器も同時代に帰属する可能性があったため、この木器の放射性炭素年代測定をバリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。その結果を以下に記載する。

松本城下町跡六九第4次調査出土木材の放射性炭素年代測定

バリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

松本城下町跡六九地点は、松本市大手2-2-8に所在する。本遺跡からは、江戸～明治時代の建物址や土坑、礎石、集石遺構等が検出されている。また、地表下約180cmの第Ⅹ検出面からは溝が検出され、その底部からは古墳時代の上師器が出土している。さらに、その下位の地表下約230cmの第Ⅺ検出面からは、古墳時代の土師器と共に木器が出土したことから、当該期の遺跡の存在も想定されている。

今回の分析は、前述した第Ⅻ検出面（22層）から出土した木器を対象に、放射性炭素年代測定を実施し、同検出面の年代に関する資料を得る。また、試料の由来に関する情報を得るため、樹種同定も合わせて実施する。

1. 試料

試料は、第Ⅻ検出面（22層）から出土した木器1点である。木器は、長さが約280cm、径約7cmの丸棒状を呈し、一方の端部を削り尖らせている。分析試料は、尖った端部の先端から約160cm～170cmの部分を切断・採取したものである。本試料を対象に、放射性炭素年代測定と樹種同定を実施する。

2. 方法

(1) 放射性炭素年代測定

測定は、株式会社加速器分析研究所の協力を得た。

(2) 樹種同定

綱刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クローラール（抱水クローラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

3. 結果

(1) 放射性炭素年代測定

結果を表1に示す。測定年代値（補正年代値）は、約1860年前の値を示した。

なお、 $\delta^{13}C$ の値は、加速器を用いて試料炭素の ^{13}C 濃度（ $^{13}C/^{12}C$ ）を測定し、標準試料PDB（白亜紀のペレムナイト類の化石）の測定値を基準として、それからのずれを計算し、千分偏差（‰；パーミル）で表したものである。今回の試料の補正年代は、この値に基づいて補正をした年代である。

(2) 樹種同定

結果を表1に示す。木材は、針葉樹のマツ属複雑管束亜属に同定された。以下に、主な解剖学的特徴を記す。

・マツ属複雑管束亜属（*Pinus* subgen. *Diploxylon*） マツ科

仮道管の早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道及び水平樹脂道が認められる。

分野壁孔は窓状となり、放射仮道管内壁には顕著な鋸歯状の突出が認められる。放射組織は単列、1～15細胞高。

4. 考察

第Ⅱ検出面(22層)から出土した木製品の測定年代値(補正年代値)は、約1860年前の値を示した。

放射性炭素年代は、測定法自体が持つ誤差や、測定の前提条件である大気中の ^{14}C の濃度が過去において一定ではなかったことなどから、年輪などから測定されたいわゆる暦年代とは一致しない。これらのことから、年輪年代による暦年代既知の年輪についての放射性炭素年代測定を実施することで、暦年代と放射性炭素年代を両軸とする補正曲線が作られている (Stuiver, M. et al, 1998)。これによれば、今回測定された測定年代値の暦年代は、約1825年前の2世紀頃に相当する。すなわち、木器の年代値は、1世紀末～2世紀頃と考えられ、弥生時代後期(関, 1985)に相当する年代値を示す。分析試料である木器と同層からは土師器が出土しており、今回の分析結果は発掘調査による所見と比較してやや古い年代を示している。

今後、今回得られた分析結果を評価するために、同層位から出土した他の木器や木材の分析調査例を得るとともに、木器の詳細な出土状況など考古学的な所見と合わせて評価することが望まれる。また、木器の樹種は、マツと同定されたことから、木器が出土した22層やその下部の堆積物を対象として、花粉分析や植物珪酸体分析を実施し、当該期における植物利用や周辺の植生に関して評価・検討したいと考えている。

表1 放射性炭素年代測定および樹種同定結果

試料名	整理番号	試料の質	樹種	補正年代 BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	測定年代 BP	Code.No.
松本城下町跡六九地点第4次調査出土木材	A-11-12	木材	マツ	1860 \pm 60	-25.5	1870 \pm 60	IAA-65

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
- 2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。

引用文献

- 関 俊彦 (1985) 「弥生土器の知識」. 183p., 東京美術.
- Stuiver, M., Reimer, P.J., Bard, E., Beck, J.W., Burr, G.S., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, G., van der Plincht, J. and Spurk, M. (1998) INTCAL98 radiocarbon age calibration, 24,000-0 cal BP. Radiocarbon, 40, p.1041-1083.



A地区全景（南から）



B地区全景（北から）

A地区第Ⅰ検出面
(南西から)



A地区第Ⅱ検出面
(東から)



A地区第Ⅱ検出面
南側部分
(東から)





A地区第Ⅲ検出面
(東から)



A地区第Ⅲ検出面
南側部分
(東から)



A地区第Ⅳ検出面
(東から)

A地区第V検出面
(東から)



A地区第VI検出面
(東から)



B地区第I検出面
(東から)





B地区第Ⅲ検出面
(東から)



B地区第Ⅲ検出面
拡張部
(北から)



B地区第Ⅳ検出面
(東から)

B地区第Ⅳ検出面
拡張部
(北から)



B地区第Ⅴ検出面
拡張部
(北から)



B地区第Ⅵ検出面
拡張部
(北から)





B地区第Ⅶ検出面
(東から)



B地区第Ⅷ検出面
(東から)



B地区第Ⅸ検出面
(東から)

B地区第Ⅴ検出面
(東から)



A地区北壁断面
E9付近



A地区北壁断面
E12付近





B地区西壁断面上部
N18付近



B地区西壁断面下部
N18付近



B地区第X—XI検出面
西壁断面図N15付近



A地区第Ⅲ検出面 建物址1 (南から)



A地区第Ⅲ検出面 建物址2 (西から)



A地区第Ⅲ検出面 建物址2 断面 (南から)



A地区第Ⅲ検出面 土坑38出土状況 (北から)



B地区第Ⅳ検出面 集石遺構 (北から)



B地区第Ⅵ検出面 瀬戸美濃産 鉄釉茶入出土状況



B地区第Ⅷ検出面 土坑21 断面 (西から)



B地区第Ⅺ検出面 木器出土状況 (北から)



13



110



134



103



5



229



135



123



58



60



130



170



126



228



227



171



104



162



35



93



118



52



90



249



14



99



230



174



106



67



176



70



192



141



136



124



214



183



180



164



238



247



155



16



44



89



251



250



1



115



33



145



147



151



20



154



169



14



16



31



2



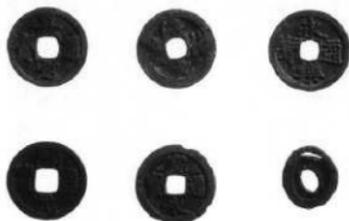
3表



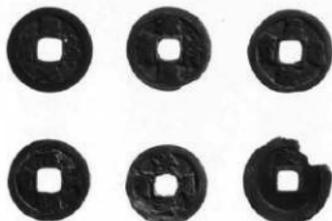
22



33



1



2

鉄貨写真1 上段左からNo.26 嘉定通寶、No.23 淳化元寶、No.28 永樂通寶
下段左からNo.22 開元通寶、No.2 寬永通寶、No.32 順首銭

鉄貨写真2 上段左からNo.39 熙寧元寶、No.37 祥符通寶、No.38 皇宋通寶
下段左からNo.20 元祐通寶、No.27 洪武通寶、No.34 寬永通寶

松本城下町跡 六九4次 緊急発掘調査報告書抄録

ふりがな	ながのけんまつもとし まつもとじょうかまちあと ろっく だい4じ きんきゅうはっくつちようほうこくしょ							
書名	長野県松本市 松本城下町跡 六九 第4次 緊急発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	松本市文化財調査報告							
シリーズ番号	No.160							
編著者名	赤羽裕幸、小山高志、竹内靖長、中村慎吾、森義直、廣田平和子							
編集機関	松本市教育委員会							
所在地	〒390-8620 長野県松本市丸の内3番7号 TEL 0263-34-3000(代)							
	(記録・資料保管:松本市立考古博物館 〒390-0823 松本市中山3738-1 TEL 0263-86-4710)							
発行年月日	平成14(2002)年3月15日 (平成13年度)							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
まつもとじょうかまちあと 松本城下町跡 ろっく 六九 第4次	ながのけんまつもとし 長野県松本市 おおて 大手2丁目	20202	157	36度 13分 53秒	137度 58分 16秒	20000918～ 20010416	1915.2m ²	松本六九リバーサイド地区 市街地再開発事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
松本城下町跡	その他 (城下町)	近世 中世 古墳	近世 建物址 木樋 溝状遺構 土坑	10棟 1条 13条 358基	中世・近世 陶磁器 土埴器 木器 金属器 石器 古墳 土器 木器	A地区においては大規模な建物址を確認するなど、16世紀から19世紀の良好な資料を得ることができた。また、B地区においては中世の面のさらに下層において、古墳時代前期と推定される土器と、それに伴って木器を確認することができた。		

松本市文化財調査報告 No.160

長野県松本市

松本城下町跡 六九 第4次

緊急発掘調査報告書

発行日 平成14年3月15日

発行者 松本市教育委員会

〒390-8620

長野県松本市丸の内3番7号

印刷 株式会社 総合印刷

